
魔法少女代行つきみ ～交差する太陽と月～

てらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女代行つきみ 交差する太陽と月

【コード】

N0594P

【作者名】

てらい

【あらすじ】

とある帰り道、少年は不思議な出会いをする。それは誰もが少年時代に妄想する非日常。少年はそんな出会いに心躍っていた。

しかし、少年はまだ気付いていない。この出会いが自分の運命を大きく変えるということに。

プロローグ ある日森の中で出会った者

とある世界のとある国のとある森。

「はあ、はあ……っ！」

息を切らせながら細い道を必死に走る。足を踏み出すたびに、パキパキと枝が折れる音が響く。

鬱蒼と生い茂る木々。

その木々が作り出す入り組んだ獣道。

人が通るにはあまりにも狭い。にもかかわらず、なぜか吸い込まれるように奥へ奥へと足が勝手に進んでいく。

ところで、なぜこんなにも息を切らせて走っているかということ、とある謎の生物に追いかけられているからである。いや、あれはもはや生物と呼べる形態をしていない。悪魔、そうそれは悪魔と呼ぶべきだ。黒くて、大きくて、硬そうで、もじやもじやしていて、変な匂いがしそうな、生物もとい悪魔。

『どうでもいいですけど、とあるっていいすぎじゃないですか？』

こんなにピンチな状況に立たされているのに、冷静なツツコミをするのは相棒のルース・ド・ソル（言い難いのでルースと呼んでいる）だ。

彼女は代々ソルの家に受け継がれる魔力変換機^{ゲレータ}である。太陽の形を模した彼女は、白銀に輝き放ち首飾りとして首に掛けられている。この魔力変換機があつて初めて私達は魔法を行使することができる。この彼女、少しばかり特殊で、人語を話すのである。他のゲレータも人語は話すが、ルースのように人間臭さを持ったゲレータは、まずいないだろう。

「うるさい！ どうでもいいならツツコミをいれないで！」

首にかけられた彼女^{ルース}を睨みながら言った。そのせいで道を見失い、危うく木々の中突っ込みそうになるところであったが、なんとか持ち直した。

「それよりも後ろのほうに何か言つべきだったんじゃない!?」

『それに触れるといろいろ危険な気がしたのでやめておきました。』

マスター、初っ端からそんなこと言つてると引かれま
すよ
『よ』

「そこは自分でもやってしまった感じがいなめない……って、あ
あ、もう！ そんなこと言つてる場合じゃないの!」

そう、そんなことを言っている場合ではない。もうすでにあの悪
魔はすぐそこまで迫っているのだから。

しかしながら、なぜこんなことになっているのか。事の発端は今
から数十分前に遡る……

ひんやりとした空間。だだっ広い正方形の部屋。ここには何も無
い。机も椅子も本棚も無い。唯一、今時では珍しいたいまつが壁の
両側に設置されていた。

ここは城の地下にある一室。造りも他の部屋とは違つ、何か異質
なものを放っている。この場所だけが、まるで隔離されるように造
られていた。

しかし、それは立ち入り禁止という意味ではなく、出入りは自由
であつた。ただ、暗黙の了解で入つてはいけない、と皆が思つてい
るだけである。

薄暗く、不穏な雰囲気をかもし出しているが、私はこの部屋を結
構気に入っている。

理由は涼しいから。それと、外の音が一切聞こえないから。

外でお昼寝も気持ちが良いけれど、この閉鎖された空間もなんと
もいえない。

そんな理由でこの部屋には何度も出入りしていたが、まさかこん

な秘密が隠されていたなんて知りもしなかった。

「それじゃあ、確認するよ」

藍色の髪少年が、手に持った資料らしきものを見ながら言った。まだ幼さの残る顔立ちに、それを感じさせない大人びた目つき。紺色の軍服をなれたように着こなすが、少し背伸びをした子供のように見える。だが年齢は17と、大人とは言えないが子供というには失礼な年頃である。ただし、身長がやや小さめであるため、どう見ても十代前半にしか見えない。

「一つ、転移中に他の魔法を使用しないこと。転移先の軸がずれる可能性があるからね。もつとも、そんなことする人はいないと思うけど、念のため」

「いやいやあ、アレスならやりかねないわよ」

少年の横で、ため息混じりに話す赤髪の女性。白銀のドレスを身にまとい、頭上にはこれまた白銀のティアアラが乗っていた。

普段ならばこんな堅苦しい格好は好まないが、今回は重要な儀式ということもあり祭典用の衣装を着用している。

「お、お母さん、そんなドジッ娘属性は私には無いよお」

『いえ、十分にそのドジッ娘属性は受け継がれていますよ』

今度は首元の首飾りが話した。

「ルース、それは私にもそのような一面があると言いたいのですか？」

母は笑いながら、それでいて怒りを表していた。

『親子そろって自覚が無いようですね。私はあなたが生まれたときから、ずっとこの目で見てきているのですよ。よもや、自分のしてきた数々の行いを忘れたとは言わせませんよ』

ルースの言葉攻めが始まるうとしていたが、それは少年の咳払いに止められた。

「一つ、転移後は魔力を相当量消費しているので気をつけること。

アレスなら一日もすれば元通りかな」

「魔力量はこのガラシアが一番ですもんね。ま、若いころの私には

遠く及ばないけど」

母の自慢が始まるうとしたが、これまた少年に止められた。

「注意事項はこれくらいだけ、僕たちが着くまではあまり無理をしないこと。あくまで事前調査だからね」

「そうね、こちらから接触しない限り安全だと思うわ。」

本当なら私がすべきことなんだけど・・・ごめんなさい、娘にこんなことさせるなんて、母親失格よね」

「お母さん・・・ううん、私がやるって言ったんだもん。お母さんが気にすることじゃないよ。それに、ルースも一緒だから大丈夫だよ」

私は母に笑って見せた。

本当はちよっぴり不安だけど、大丈夫だと言うのも本当だ。

「ヴアライ、あなたの娘は必ず守って見せます」

「ええ、お願いします。」

あなたにはいつも頼りになってばかりね、ルース」

「それが私の務めですから」

ルースはいつもの無感情な声で言葉を発した。

「・・・あなただって本当は・・・」

それに対し母は何かを言ったが、それは私には聞こえなかった。

「いえ、何でもありません・・・では、頼みましたよ」

『御意、ヴアレントリーナ王妃』

二人もかつては私たちのようにパートナーだった。今でも二人のときは、まるで友達のように話しているが、私も含めて皆が周りにいるときは二人ともかしこまった口調になる。

二人は主従の関係にあるのだから、それは当然のことである。それでもやはり、友達として過ごした日々がまるで無かったかのような振る舞いが、私にはとても辛く感じ取れる。そして、いつかは私たちもそんな風になってしまうのだろうかと考えてしまうのである。

「・・・いるので注意してほしい。聞いているかいアレス？」

考え事をしてしていると、少年はそれを見通していたかのように聞いてきた。

「ふえ？ も、モチロン」

「……言い忘れていたが普段の魔法とは違った魔力の消費の仕方だから、回復の際も通常とは異なっているので注意して欲しい」

「ちゃ、ちゃんと聞いてるってばあ。二回言わなくてもわかってるよ」

「大事なことだからね。聞いていても聞いていなくても、君には二回ほど説明が必要だと思ったんだよ」

ひ、ひどいよこの人。いや、まあ、実際に聞いていなかったのだから悪いのは私なのだが。

「あんまり長く話していても仕方が無い。反応が出てまだ三日も経っていないけれど、早く行動するに越したことは無い」

少年は言つと部屋の入り口のほうへ歩き、母もそれに従った。

「アヴィアーレ」

少年の口から言葉が漏れた。

と、同時に部屋の床一面に魔方陣が浮かび上がった。それは青い光を放つて私の身体を囲んでいた。

「……！ すごい……」

その魔方陣は想像を絶するほどの魔力が込められていた。今までに見たどの魔法よりも、魔力量、魔力濃度が高かった。

「そりゃそうだよ。この転送魔法を行使するためには、ガラシア全人口のおよそ半数の魔力が必要だからね。

もつとも、これから行く地球という場所が遠すぎるだけであつてもつと近くであればその魔力量は少量で済む。当然だけど、反対にその地球から遠ければ今以上の魔力が必要になる」

「ほえ……ってことはこの魔方陣は……」

「ああ、ソルに住む人々全員の魔力が込められている」

この二日間、一般人の城の出入りが多いと思ったら、なるほどそういうことか。

「今回の作戦は一般に公開していないから、非常時用の魔力提供ということになってるけどね」

「じゃあ、頑張らないわけにはいかないよね」

この国に住む人々の思い。それがこの魔法には乗っかっているのだ。半端な気持ちでは務まらない。皆の思いを絶対に無駄にはしない。

「アレス、私にはこんな言葉しか言えないけど・・・頑張ってる」

心配そうに見守る母。

「うん、頑張る」

そんな母に私は笑顔で答えた。

すごく短い会話だった。でも、それだけでも、母の気持ちは伝わってきた。

本来ならばこの任務は母の仕事だった。

今から十数年前にある事件が起きた。今回の事件とそのある事件は関係しているのだが、その事件の担当が母であった。母は引き続き自分がやるべきだと主張したが、すでに魔力変換機は私へと引き継がれていた。

私達が戦うには彼女の力が必要になる。しかし、ルースの所持者は私へと移っていた。ならば任務を引き受けるのはこの私だ、と先日行われた国の重役たちが集まる作戦会議の際に大声で主張したのは今では良い思い出である。

その場にいる全員が「こいつ何言ってるんだ、馬鹿なの？死ぬの？」と反対をした。当然、母も反対したが、口にした以上私は辞めるつもりなんて無かった。

そのときの母の顔は今でも忘れない。なんともいえない表情。初めて母親の感情を読み取れなかった。楽しいことも寂しいこと

も、怒りも悲しみも、母の傍にいた私はいつも肌で感じていたのにあの時だけは何も分からなかった。

あの時母はどんな気持ちだったのだろうか……

「それじゃ、始めるよ」

少年は目を瞑り胸のペンダントを握った。

すると、魔方陣の放つ青い光が更に輝きを増し、青白い光が身体を包んだ。身体をまとう魔力が増幅する。

とても暖かい光だった。

これが皆の思い。

魔力を通して人々の温もりを感じた。

頑張らなきゃ、皆の気持ち、そして母の気持ちを無駄にしないために。

「では、行ってまいります！」

それが最後に交わした母との言葉だった。

光は完全に私の身体を覆い、目の前は真っ白になった。

ぐん、と頭を引っ張られる感覚。

視界は光に支配され、手足の自由もあるのか無いのかわからない。

光が流れる。目まぐるしいほどに。

体がくるりと回転する。

まるで宙を浮いているようにふわふわとしているが、身体は激しく風に揉まれているようだった。

もう二回転すると、光の中に一つの黒点が見えた。黒点は豆粒よ

りも小さく、光の中を漂っていた。

右へ左へと動く黒点を見つめる。瞬間、黒点が光を支配した。

視界は光から闇へ。

闇は心を不安にさせる。何も見えない恐怖感が全ての感覚を支配する。

視覚、嗅覚、触覚、聴覚、味覚。五感全てが恐怖という感覚しか生み出さなくなる。

だが、恐怖はそう長くは続かなかった。恐怖を感じたと同時に闇が晴れ、そして

「はっ！！」

お尻に鈍痛が走った。

「がっ、ああ、あ……くうううう」

『どうやら、無事に着いたようです』

「全然無事じゃないから！」

『ところでここは……』

無視ですか、はいそうですか。

さわさわと何か擦れる音。その正体はすぐに分かった。ふつと風が髪をなびかせる。風は身体を包んだ後、周りの木々へと抜けて行った。

「……ん、森……かな？」

『見たところそのようです』

深く暗い木々の中。人の歩けるような道はないし、何より匂い都在这里を森だと言っていた。

『……いえ、森ではないみたいです』

「どうということ？」

『言葉では説明し辛いですね』

ルースは少しうねると

『そうですね……マスター、半径1kmの魔力の反応を見てください』

と言った。

「うん、やってみる」

言われたとおりに魔力の反応を見える。

目を閉じ精神を集中させる。地図を開くように魔力の反応を頭の中に映し出した。

小さな魔力の粒が無数に転がっている。恐らくこの森に生える木々や生物だろう。地図の中が全て埋め尽くされるほどに転がっていた。しかし、それはすぐに途絶えた。その先はぼつぼつと小さなも

のが少しあるだけだった。

少し先まで伸ばしてみると、いくつかの固まった反応が等間隔で並んでいた。

『恐らくこれは住宅でしょうね』

「住宅？ でも、魔力の反応はすごく小さいよ？」

その魔力反応はまるで小鳥たちのように小さかった。もしもそれが人であるなら、もっと大きな反応が出るはずである。

『この地球に住む住人が、我々と同等の魔力を持っていると考えているのなら、それは間違いです。地球の人々の魔力量は我々と比べ非常に少ないですし、魔法の概念も存在しません』

「へえ〜そうなんだ」

『と、出発前に教えたはずですが？』

ルースは何で覚えていないのですか？ と問いただしてきた。

「え！？ あ、あれ〜そうだったかなあ〜？」

．．．
いつだったかそんな話をしていたようなしていなかったような．．．

しかしながら、自分の記憶の中からは綺麗さっぱり消え去っていったようだ。

「うん、ルースの気のせいだよ、気のせい」

『42時間17分32秒前に教えたと私のメモリーが記憶しているのですが、それは間違いなのでしょうか？』

さ、さすがルースの記憶能力メモリー。そんな無駄なことまで覚えているとは。

「な、なんでそんなこと記憶してるの。容量の無駄．．．」

『あ・な・た・が！ いつまで経ってもその頭の中に無駄な知識しか入れ込まないから、私が変わりに記憶しているのです』

怒りと呆れの感情を同時に表すという高等技術を用い、ルースは吐いた。

「あは、ははは．．．ごめんなさい．．．」

何も言い訳ができないほどの真実を突きつけられ、私は言葉を失

った。

『それにしても、まさかここに辿り着くとは……』

「……?」

『ともかく、これで分かったと思いますが、ここは森ではないということですよ』

住宅に囲まれた木々の密集地帯。一体ここはどこなのだろうか。

『ここでじっとしていても始まりませんし、とりあえずここから抜けましょうか。それに今のマスターは 魔力量がほぼゼロに等しいですから、なるべくアレとの接触は避けたいですよ』

「うう〜ん、そういえばなんだか体がぼわわ〜ってしてるような

……」

地面をしつかりと捉えられていない、そんな感じだ。

「でも、それって魔力の反応が感知できないんだよね? だったら

どこにいても同じなんじゃない?」

『それはそうですが、マスターはこの場所に留まりたいのですか?』

「そりゃこんな薄暗いところに居たくはないけど……」

正直なところ、今の私にとって安全な場所と言っるのは無いのかも
しれない。それはルースも分かっているはずだ。それでもここから
出ようと云っるのは何か理由があるのかもしれない。

『では、一つだけお教えしましょう。この木々の中にアレが存在する
可能性があります』

「……? なんて分かるの」

『あなたの母と過去にここを訪れた際、アレと接触したことがあります。』

「……!」

ルースは静かに言った。

母と過去にここを訪れた。恐らく十数年前のある事件と言っもの
に係しているのだらう。そしてその際にルースの言っアレに接触
した。そういうことだらう。

十数年前の事件については母もルースも全くと言っていいほど話してくれなかった。

今回の任務は十数年前の事件の新たな発見とやらによるものだった。もしそれがなければ事件そのものを知らなかったかもしれない。

ルースの言うアレとは「ドディックジュエリ」である。未知なるエネルギー源にして国の、いや、世界の最重要物質かつ最重要危険物である石だ。なんでもその石に深く関わると死をもたらすとか。

今現在、ドディックジュエリはガラシアにはない。それもそのはず、ガラシアにあったドディックジュエリはこの地球に飛ばされたのだ。そしてそれを探するのが今回の任務である。

と、分かっていることはそのドディックジュエリを探すということだけである。十数年前の事件との関連性はルースも母も語ってくれなかった。

事件については一般には公表されていないが、事実起こった事であるので城にいる一部の人間は概要を知っていた。

彼らから聞いた話によると、母とルーナの女王が飛散したドディックジュエリを回収しにこの地球へやってきた。そして、全て集め終わる直前に再びドディックジュエリが飛び散ってしまった。その後わずかな反応さえ確認できなくなってしまったので、二人はガラシアへと帰ってきた。

今回、その反応が十数年ぶりに発見されたので、再びドディックジュエリ回収の作戦が実行されたのだ。

ルースと母が事件の概要を話さなくても知っている人間が他にいるのだから、いずれは知られてしまうことだと二人も分かっているはずだ。それでも二人は事件について話さなかった。

この事件にはまだ何か隠されていることがあるの、そんな気がしてならないのである。

『反応は感知できませんが、確率を考えるならこの場は避けておいたほうが良いでしょう。それに……』
「それに？」

『この木々の中に流れる不穏な空気。それがあの時と酷似している』
ルースは辺りを警戒するように集中していた。
それだけここは危険なのだ、そう思った。

「・・・分かった、それじゃあ早くここから出よ。こんなところにいたら気が滅入っちゃうよお」

というわけで、ここから抜け出そうとした矢先にあの怪物に遭遇したのだ。

『この状況を打破するためには変身することですね』

ルースは冷静に事を分析した。いつものことだからルースは冷静すぎるほど冷静である。

「変身って簡単に言うけどこの状況でどうやって変身しろって言うのよ！ 変身してる間にやられちゃうじゃない。それに今は魔力がすっからかんなんですけど」

『いや、だから大丈夫です、って何度も説明したじゃないですか』

「あれのどこが大丈夫なのよ！ 変な台詞を言わされるは、謎のポーズを取らされるは、拳句の果てには真っ裸にされるは・・・全然大丈夫に見えないって！！」

『ですから、それを何度も説明したのです。いいですか、よく聞いてくださいよ？ あの变身シーンはですね・・・』

途中まで言いかけた彼女の言葉が、ふと途切れた。

『マスター危ない！！』

そして彼女は叫んだ。

「・・・！！」

背筋がぞくりとする。それだけで理解できた。自身のすぐ後ろに悪魔が迫っていることに。そして気づいたときにはすでに手遅れで、目の前は真っ暗になり私は気を失った。

ブローグ ある日森の中で出会った者（後書き）

ポツと思いついたのでパツと書きました。そんな物語です。文章はあまり上手くないので読み苦しいかもしれませんが、読んでやってください。

生（とき）の旅人

産声を上げた無限

世界には虚空だけが、虚空には全てが

愛を受けし身は自ら選択し勝利を喜ぶ

全てを求め、全てを失った

運命に抗い失うは自由

目の前には死が待っていた

生ときの旅人

絶望した。目の前に広がる光景に。

広がるはいつもと変わらぬ景色。

静かだ。あまりにも静かだ。

まるで、世界そのものが生命の活動を停止しているようだった。

しかし、それは事実であった。

この世の終わり。それが正しい表現だろう。

人はどこにもいない。木や草は枯れてしまっている。空気は在るだけで意味を成していない。全てが生命としての役割を終えている。太陽の輝きも、それを映す月も、今はもう無い。

「どうして……」

少年がこぼした言葉。絶望と虚無感と入り混じる。

全てが消える。それは決定された事だった。

世界の、宇宙の、概念そのものが消え去る。無が残ることさえない。

「……どうして」

少年から漏れた言葉が、虚しく世界を流れた。

不思議な出会い

空から女の子が降ってくる、なんて事はあり得るのだろうか。あるいは異世界から、あるいは未来から、あるいは過去から、あるいは平行世界から。更には記憶喪失なんていうおまけつきで。

その答えは必ずしもNOではない。この世は何が起きておかしくない。

それは確立の問題であり、絶対的な否定をすることはできないのだ。例えば科学的な根拠が無くてもだ。

もしも、この世界が二次元だとしたら、昨今の漫画、ラノベ、アニメなどで多々起きている運命的な出会い、というやつに当てはまるのだろうか。

それは主人公にとって転機であり、たいていの場合には巻き込まれつついつの間にか「正義の味方」と言われるような善行に走っている。

俺はこんな展開は嫌いじゃない。むしろ好きな部類に入るだろう。今までも似たような展開をいくつか目にしてきた。しかし、いくら王道、テンプレといわれようが心が躍る。

現実で起きる確率は非常に少ない。限りなくゼロに近いだろう。だが、起きてしまった場合、俺自身は運命的な出会いに歓喜するのだろうか。それとも、当事者となって始めて理解する非現実な出来事に、そんなことやっぺいられるか、と放棄するのか。

俺は面倒ごとが嫌いだ。だから、後者の人間だと思っていた。故に、今回の出来事に我ながら驚いている。あまりにも冷静でいられた。あまりにも事を受け入れていた。

自身ですでに諦めをつけているのか、それとも、自分自身の出来事を第三者の目線で見ることができているのか。それはまだわからない。

「……! ……はあ、なんなんだよお、ったく」

目覚めは最悪だった。

窓から射す日差しが眩しい。それもそのはず、今の時刻は午後二時半。授業の真っ只中である。

一番窓側の席に座る俺にとって、この時間の太陽は眠気を誘うものの以外の何ものでもなかった。いつもならばチャイムが鳴るまでは起きないのだが、今日は変な夢のせいで30分も早く起きてしまった。

余った時間はどうすればよいのだろうか。勿論、授業を受けなさいと言われるのは重々承知だが、この半端な時間に起きた数学の授業ほど訳が分からないものは無いだろう。

みんなも真面目に授業を受けているかと思えばそれはクラスの半分だけで、もう半分は俺と同じように夢の世界に行っている者や、教科書の影に隠れ携帯をいじっていたりゲームをしている者もいる。後ろの席にいとみんなが日ごろの授業をどう過ごしているか分かってしまうのである。あの真面目な委員長があんな事を!? 的
なことは無いが、皆が思っている以上に授業中は静かに荒れていた。

朝日市立光陽中学校。2年3組16番、高村月海。

親いわく、海月にしたかつたらしいが、そうすると海に浮かぶゼラチン質のアレになってしまつので、さかさまにしたらしい。親に知識があつてよかつたと心から思う。しかし、「つきみ」にしろ「みつき」にしろ、あまり男っぽくないと思う。最近はそうでもないのか?

季節は春(6月上旬)学生服を着ていると暑いと感じる気温になつてきた。

遠足、ゴールデンウィーク、そして中間テスト。春に行われる行

事はほとんど終わり、クラス替え後のよそよそしい雰囲気など、とつきの昔になくなっていった。かわりにクラス内にいくつかのグループが出来上がり、そのグループ内だけで盛り上がるという、よくありがちな光景になっている。

決して仲が悪いとかそういうのではない。ただ共通の話題が少ないのである。共通の話題がグループ形成の要因のひとつにもなっていて、自然と同じ話で盛り上げられる人間が集まりグループとなっているのだ。

さて共通の話題とは言ったが、中学生の俺たちがする話なんて大体決まっている。

あるグループではスポーツの話で盛り上がる。中学に入学すると部活動というものを始めなければいけない。クラス内でもその部活動グループが集まるといことが多々あり、自分が所属している部活動のスポーツの話で盛り上がる。しかしなぜか、文化部にはそういう現象が起こらない。この学校だけなのか、それとも全国共通なのか。

あるグループはアイドルについて語り合う。男子も女子そうだが、この年頃は何故か芸能界の情報に精通していないとやっていけない。あるグループはTVについて語り合う。これは上記と似通った部分があるが、こちらのグループは主にバラエティが専門である。

そしてもうひとつ、これは主に男子に当てはまることだが、アニメ、漫画、ゲームなどそういった娯楽系の話。現代っ子なら普通である。そして皆、厨二病に感染している。

言うまでもなく俺はこのグループに所属している。おそらく俺は邪気眼系だろう。日々妄想に妄想を重ね、何度かこの学校が壊滅状態に陥った。

「ういつす、今日も一日お疲れさん」

6時限目の終了を告げるチャイムが鳴るやいなや、前の席からクルツと振り向き俺に話しかける一人の男。

「で、今日はどうすんだ？」

そしてもう一人。少し離れた席からやってきた男が、目の前の男と親しげに話す。二人とも厨二病グループの一員だ。

俺の前に座っている、背がひよる高い男が鈴木茂^{すすきしげる}。そして横に突っ立っているちよいとばかりし体がふくよかなやつが佐藤翔太^{さとうしょうた}。

二人ともノリがよく、知り合ってからはずくに仲良くなり、一年生の時からの長い付き合いである。

どうでもいい情報だが、日本で一番多い苗字のツートップである。そしてこれらもどうでもいい情報だが、おそらくグループ内でも屈指の実力を持つ人間である。

「お前ら準備よすぎだろ」

少し呆れながら言った。二人とも放課の準備はすでに完了しているようだ。

「っていうか、今日は普通に帰るわ。」

「なに・・・？ ま、まさか、この俺を裏切るのか!？」

隣に立っていた佐藤が妙な言い回しで聞いてきた。いつものことである。あまり気にしないでおう。

「ん〜、まあ色々あるんだよ」

色々とは昨日発売されたゲームをいち早くクリアすることだが。

「なんだよそれ・・・って、ああ、昨日発売されたゲームをいち早くクリアすることか」

一字一句もらさず正確に言い当てる鈴木。お前は超能力者か。

「だってお前、昨日も予約したゲームを取りに行くから無理、とか言ってただろ」

体をひねりながら後ろを向いていた鈴木が、さらに体をねじらせ言った。

「あー、そういえばそんなこと言った気がする。ならば仕方あるまい。完クリできるよう健闘を祈る」

「お、おう」

こんなことで応援されても困るんだが。

ちなみに完クリとは完全クリアのことで、そのゲームにおけるす

すべての要素を成しえた時に初めて完クリといえるらしい。全クリはストーリーをクリアしただけとかなんとか。

実際のところその辺の定義はよくわかっていないらしいので、俺としてはどっちでもいいことである。

しかし、こいつらの言う完クリとやらをどのゲームでもやってしまうので、いつの間にもやらそれが当たり前となり、逆にゲームをやらなければいけないというある種の脅迫のようなものに襲われている。

まあ、実際やっていて楽しいので特に問題はないのだが、はずれを引いたときは絶望的である。何でこんなことをしなければいけないのかと。

「終わったら感想聞かせてくれよ」

「ああ、了解。じゃあな」

話している間に片した荷物を担ぎ、二人に別れを告げた。

あまり都会とはいえない、校門から見える町の風景。目の前には大きな道路があり、何台もの車が行きかっている。

校門の反対側には文具屋がある。ここで文房具をそろえることが、この光陽中に在籍するものの義務である。

校門を出て左に曲がり十三歩行くと十字路がある。今しがたその十字路に設置してある信号が、青色から赤色に変わった。

この信号はちょうど一分で変わる。目の前を通り過ぎる車をボーンとただ見つめる。信号が青に変わったら右足から踏み出し横断歩道の白い部分だけを歩く。渡りきったらそのままずっとまっすぐ歩き続ける。

ずっとずっと。１キロくらいあるのだろうか。さすがに歩数までは覚えていない。

左手には住宅街。右手にも住宅街。途中にはスーパーがある。よく学生が買い食いをしているが、最近では交通の便もよくなり都心に繰り出すことが多い。

ここのスーパーもずいぶん寂れてしまった。しかし住宅街の中にあるので主婦にとつてはありがたいことらしい。まだまだ現役で活躍している。

ずっとずっと歩いた先に丘があり、そこからさらに坂道をずっとずっと歩く。

丘といつてもたいした大きさではない。緩やかな上り坂と下り坂が何度か繰り返されるだけだ。丘の中は少し木々が多くあまり家は建っていない。

さらにさらにずっとずっと歩くと少しずつ木々はなくなっていき、そこからまた住宅街が続いている。

途中で大きく道が分かれる場所がある。左へ行くと我が家が待っている。右にも家が数軒建っているが、畑が多く農家の家ばかりだ。そして、ちよつと奥へ行くと少し大きめの公園がある。といつても見たところ普通の公園と変わりはない。変わっているところといえば、なぜか雑木林が真ん中にありそんなに広いわけでもないのに中に入ると迷ってしまいそうになる。

子供のころはここでよく遊んでいたが、度々帰り道がわからなくなることもあり、立ち入り禁止になるまでの問題に発展した。今はもうそんなことはないが、暗黙の了解で雑木林の中には立ち入ってはいけない、というのが子供たちの間ではできているようだ。

「って、なんで俺こんなとこにいるんだ？」

いつの間にやらその公園の目の前に来ていた。

まったく、そんな説明してるからこんなところに来てしまうのだ。早く帰ってゲームをしよう。

しかし、妙な雰囲気がこの公園内を包んでいる。そんな気がした。ここへきたのも何か運命的なものがあるのでは、と、またいつものように妄想してみたりする。

だが、この妙な雰囲気、違和感。それだけは俺の妄想の中での一人歩きとは違う感覚がした。そして、その違和感は、現実が起こっている「何か」であると、この直後に知ることとなる。

丸い円状の広場。花壇が周りを囲んでいた。

遊具が入り口の横にあるが、滑り台、鉄棒、ブランコの3つしかない。

そして不自然な雑木林。

形で例えるならドーナツ型である。ドーナツの穴の部分が雑木林になっていて、周りの生地が広場となっている。

公園内では小学生たちが元気に遊んでいた。彼らも例に漏れず雑木林には近付かないようにしている。

うん、子どもは元気が一番だな。俺は帰ってゲームをしよう。

言っている事とやっている事が違うのは気にしないでくれ。

家に帰ろうと身体を180度方向転換させる。と、公園の入り口に一人の少女が立っていた。

小学生くらいの女の子。おかつぱ頭のロングヘアに赤いカチューシャをつけていた。体のサイズにあっていない大きい白いTシャツ、それにチエツクの入った赤いスカート。実にシンプルな格好だった。

少女の目は真っ直ぐにこちらを見つめ離さず、同じように少女から目を離すことはできなかった。少女から感じ取れる妙な雰囲気、目を離せずにいた。

「太陽が落ちた」

そして、少女は意味ありげに言葉を発した。

「……え？」

「いずれ月も落ちる……あなたは どうする？」

「どうするって……」

「あなたの選ぶ道に私は口出ししない。何を選んでも、それはあなた自身が変わりは無いのだから」

少女の言葉は何を意味しているのか理解できなかった。

「……忠告。あなたは絶対に自分を見失ってはいけない。ただ、それだけ」

少女は言い残すとその小さな身体を翻した。

「ちよ、待ってくれ。君は一体何が言いたいんだ」

少女はその場に立ち止まり振り向きもせず、

「二度は言わない。私の忠告を守ればそれだけでいい。私の望みはそれだけ」

と放つように言った。

そして、言い終わると同時に消え去った。それは比喻ではなく、文字通り目の前にいた少女は跡形も無く消失した。

「……なっ! ……」

目の前で人が消えた。ありえない現象だ。

いくら俺が厨二病患者だからって、ありえる事とありえない事の区別くらいつく。

「なんだってんだ、わけわかんねえよ……」

夢……でもない。試しに頬をつねってみたが、普通に痛い。

では一体なんだったのか。

「超能力？」

そんな非現実的なものがこの世にあつて良いのか。

俺ならもちろん大歓迎だが、現実というものは時に厳しい。非科学的な超常現象は常の世では存在しないと考えられている。

しばしばテレビで見かける超能力や魔法といった類は何かしらタネが存在するとされる。タネが存在しないのならそれを証明してみろ、という話になるのだがタネが無いので証明不能なのである。

つまり何が言いたいかというところ「わけわかんねえ」ということである。

「……今のは見なかったことにしよう。うん、それがいい」

余計なことに首を突っ込むと良くないことが起きる。これはリアルでも二次元でも同じである。

「よし、早く帰ろう。そうしよう」

再び公園の入り口に向き直り、一步を踏み出す。すると、

『……………』

何かが聞こえたような気がした。

「……………」

踏み出した一步を戻し公園の中を見回した。しかし、そこには遊具で遊ぶ子どもたちの姿しかなかった。

『……………て……………い』

消えるような声。

今度は何が起きたというのだ。

頭の中に響く声。かすかに聞こえる言葉は、直接脳に言葉が刷り込まれていくようだった。

『誰か！ この声が聞こえるのなら、助けてください』

今度は確かにはつきりと聞こえた。今のは幻聴でもなんでもなく確かな声だった。それも「助けて」と。

「行くしか……………ないよな」

誰かが助けを求めている。それならば行かないわけにはいかない。それに事実でも幻聴でも、どちらであってもこの先に進まなければいけない、そんな気がした。

そして、俺は言葉に引き寄せられるように雑木林の中に入っていた。

中はたくさんの木々で入り組んでいる。まだ太陽は明るいいというのに、中に入ったとたんに、まるで夜のように薄暗くなった。

子供のころはもちろん、今でさえこの中は迷いそうになるのに、今このときだけはどの方向へ進むべきなのかわかる。自然にその方向へと足が進む。

恐怖心があるのにもかかわらず、好奇心が前へと出る。絶対に厄介ごとに巻き込まれる。そう思うのに、この状況は自身の心を弾ませた。

そして、行き着いた先。そこはおそらくこの雑木林の中心。なぜかここだけは木が避けるように生えていて広くなっている。

『あなた！ 私の声が聞こえますか！！』

今までで一番はつきりと聞こえたその声。それが女性の声だと今気づいた。それまでは、ただ言葉がそのまま文字として頭に入ってきていたため、声の主が男か女かは判断ができなかった。

『あ、ああ。聞こえてる』

どこにいるかはわからなかったが、確かにここにいるであろう声の主に戻した。

『……！ よかった』

ほっとしたのか安堵の声が聞こえた。

『あ、あの、えっと、ちょっとこっちに来てもらえますか？』

『って言われても、えっと……どこ？』

見渡す限りではどこにも人影は見えない。

『え〜っと、そのまま前に3歩。左に2歩。そして下を見てくださ
い』

『は、はあ』

と、言われるままに前へ3歩。左へ2歩。そして下を見た。

『えっと……？』

そこにいたのは恐らく小動物。恐らくといたのは今までに見たことのないモノだったから。たぶんフェレットもどきではない。首には太陽を模した白銀の首飾りがかけられていた。太陽の真ん中には紅に光るガラス玉のようなものが装飾されている。

イ又だろつか、一番しっくりくる表現は。しかしイ又にしては小さい。ティーカップ程度の大きさだろつか。

『……そーいえばティーカッププードルっていたな。それか？』
『違います！ 犬ではありません。それともこちらの世界では犬に

羽が生えているのですか？」

初対面でいきなりツツコミを入れられてしまった。

「いや、悪い。そういう意味ではないんだ。」

そう、このイヌもといイヌもどきには羽が生えているのだ。これが、今までに見たことの無い生物、と例えた一番の理由である。

それよりも・・・イヌが喋ってる！・・・いや、見た感じだとイヌもどきではなく首飾りのほうが喋っているのか？ どちらにしても普通ではないことは確かである。

「もしかして、喋ってるのってそっちの首飾りか？」

そう思ったのは、イヌもどきはぐったりとじていて気を失っているからであった。

『そうです。その首飾りがしゃべっています』
なるほど、と納得するように頷いた。

『それより疑問に思わないのですか？ 首飾りがしゃべるって』

「いや。めちやくちや疑問に思ってる」

『では、なぜそんなに冷静なのですか？』

「たぶん非現実的すぎるから。あと俺の脳がオタクというものできてるから」

『ごめんなさい、ちょっと意味がわかりません』

そりゃそうだ。理解できるほうがすごいと思う。おれ自身も理解していないのだから。

「いや、別にわからなくていいよ。っていうかお前も結構冷静だな。なんかやばそうなんじゃないのか？」

『確かにやばいといえはやばいですけど、まー大丈夫ですよ。ほっといても死にはしませんから』

ひどい言われようだな。さっきまで助けて、って叫んでたのに。
「ところで、俺はどうしたらいいんだ？」

この子はホントは人間で、とある怪物が何かに襲われてやむなくその姿になっていて、力が戻るまでその子の変わりに魔法かなんかで戦えとか。と、いつものように妄想をする。

そんな展開になつたらかなり燃えるが、正直なられても困る。そういうのは二次元だけで良い。

『マスター……このイヌもどきを安全な場所まで運んで頂けるとありがたいです』

「まあそれくらいならかまわないけど。」

よいしょつと

イヌもどきを持ち上げ落ちないように両手でしっかり包んだ。

「とりあえず、ここから出られればいいよな？」

『はい。その後のことは私たちが何とかしますから』

何とかなるのか？ そんなことを思いながら雑木林の出口へと向かった。

『ひとつお聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか？』

首飾りが話しかけてきたのは、この雑木林を半分ほど抜けた辺りであつた。

「ああ、別に構わないけど」

『あなたは魔法というものが存在すると思えますか？』

唐突だつた。しかも魔法ときたもんだ。

ついさつき不思議現象を見たばかりでこの質問である。さて、なんて答えようか。

「うーん……あるんじゃないか？ 俺は知らないけど、それは俺が知らないってだけで、この世のどこかには存在するのかもしれないからな」

『……なるほど、そういう解釈ですか……』

彼女は腑に落ちない返答だ、と言いたそうにした。

『魔法は存在します。私たちの星では、ですけど』

「ふうん、なるほど」

彼女の口ぶりからすると、二人は地球の人間（？）ではないのだらう。

これは本格的にファンタジックになってきたぞ。

「でも、何でそんなことを急に聞いてきたんだ？」

『それは……』

彼女は言葉にするのを渋った。

「ま、言い難いことなら別に話さなくてもいいけど」

『……いえ、ただ確認をしておきたかっただけです』

「何か気になることでもあったのか？」

『はい、ですが、それは私の杞憂に済んだようです』

彼女は詳しく語ろうとしなかった。そして淡々と続けた。

『ちよつといいですか？ 私たち、たぶん迷子になってますね』

「へえ、そうなんだ……え？」

「ってなんでここでその流れ！？ 全く関係ねえじゃん！」

「えっと、どゆこと？」

『言葉のとおりです。途中までは正しい道を歩いていたようですが、少し前からまったく別の道を歩いています』

「まったく別の道？」

「どういうことだ。俺は、ただ来た道をそのまま帰っていただけなのだが。そして今もその道を歩いているはずだ。しかし首飾りいわくまったく違う道らしい。」

『はい。まったく別の道です。正確には「正しい道」であっているのですが、それが出口に通じていないのです』

「つまり、出られないって事か？」

「一抹の不安を感じつつ聞いてみた。」

『そうです。出られません』

「結構あっさりと言われた。」

『この道はあなたが来るときに通った道で間違いないようです。今まで歩いた道もすべてそうでした。しかしどこまで歩いても出られない。恐らく、どこかで道がループしているようです』

ループってまたやつかいな。迷いの森現象か。無限ループって怖いよね。

「それにしても、なんで俺が歩いた道ってわかるんだ？」

「それは魔力の流れですよ。この道からはわからずかですがあなたの魔力を感じます」

「魔力の流れ、ねえ。魔法とか関係ない俺たちにもそういうのがあるのか？」

「はい。魔力というものはどんなものにも存在します。植物も動物も、大地も空気も、機械、建造物なんかに魔力の反応はありません。たとえこの世界に魔法が存在しなくても、魔力自体がないわけではありませんから」

「ふうん、なんか難しそうだなそういうの」

「私たちにとっては当たり前ですから、それでもないのですけどね。」

それで、話の続きですが、正直このままではどうしようもありません」

「どうしようもありません、って何か方法はないのか？」

「方法があります。この無限に続く道を作り出している元を叩けばいいのです。」

「元を叩く……」

なんかいやな予感がしてきた。これは完全に巻き込まれたか？

巻き込まれたのか!？」

「なあ、あんまり聞きたくないけど、その元ってやつは何だ？」

「恐らくそれは、私たちが今に至るまでを作った原因」

今まではスパッと答えていたのに、なぜかここでまわりくどい言い方をする。

「つまりお前たちを襲った怪物ってこと……？」

「ええ、恐らくですけど」

「もしかしてもしかすると俺が変わりに戦うとかそういうパターン？」

「状況的にそういうパターンですね」

「マジで？」

『マジです』

ついに俺も二次元の世界に来てしまったか。嬉しいやら悲しいやら。

心躍る反面、理不尽な巻き込まれ具合に肩を落とす。まあ自分から飛び込んだ訳だし、理不尽ではないか。

しかし、不思議と冷静でいられる。それはまだ、自身の命運とやらが理解できていない証拠でもあった。

ギリリと光る怪物の眼光が突き刺さる。このまま逃げてもかまわないが、その瞬間に怪物は襲ってくるだろう。面と向かったこの状態。一定の距離を置いていれば、相手も迂闊には手を出さない・・・たぶん。

「・・・なるほど、十年以上経った今でも、その能力は変わりませんか。いえ、時間が経過したからこそ、なのかも知れませんが」

彼女は小さな声で

俺には聞こえないほどの声で何

かをつぶやいた。何と言ったのかは聞き取れなかったが、何かに納得したようなそんな声だった。

「失礼、こちらの話です。とにかく変身しましょう。話はそれからです」

どうぞ、と彼女はさも当たり前のことであるかのように言うが、勿論そんなことはできない。

「いかにも変身できるのがデフォルトみたいな言い方しないでください。全く理解できてないんですけど」

「大丈夫ですよ。頭の中に浮かんだ文字を復唱すればいいだけですから」

「頭に浮かんだ文字？」

「目を閉じて心を空っぽにするんです。そうすればおのずと見えてくるはずです。」

「・・・」

よくわからないが、とりあえずイヌもどきを安全だと思われる場所に置き、言われるがままに目を閉じる。

しかし、心を空っぽに、というのは難しい。常日頃、妄想が行われているこの頭は、無心なんて言葉とは程遠いものだ。

「あなたの心には邪念があるようですね」

「う、面目ない」

何か心の中を見透かされたような気がして、羞恥を覚える。

「急いでください、あの怪物もバカではありませんよ」

今まで冷静でいた声に少しあせりを感じた。それだけこの状況が

危険だということだろう。

「あ、ああ、分かった。心を空っぽに、心を空っぽに……」
無心、空っぽ、まっさら。そんな言葉を意味もなく並べる

いや、そもそもそれが間違っていた。心を空っぽになんて考えている時点で、それは無心ではないのだ。本当の意味で何も考えないことをしなくては。

「……我が心、汝がもとにあり。太陽の光は全てを照らす真実の光。赤く燃ゆる熱き光にこの身を捧げ、汝が力、我が力の糧とせん」

自然と口にした言葉。頭に文字が浮かんだというよりは、勝手に言葉が出てきた。最初から知っているかのように、それが自然と発せられていた。

「プロント
フォーメジオン！」
ルース・ド・ソル
トラス

瞬間、光が全身を包み込んだ。

身にまとった衣類は全て消え去り、代わりにどう見ても俺には似合わないコスチュームが装着される。

白を基調とした防護スーツ（なぜかスカート）。青と黄色のラインが襟や裾、ほかに所々ラインが入っている。首もとには赤く燃えるリボン。赤いグラブとレギンス。レギンスは脛全体ではなく、踝の辺りだけを守る短ゲートル。そして魔法使いらしくマントを装着。それは真っ赤に燃える太陽のよう。そしてまたまたなぜか、髪型がツインテールになっている。

全ての防具が自動的に装着され、体を包んでいた光が徐々に消えていく。右手には首飾りだった彼女が杖のような形をして握られていた。細長く1m弱はある先端部分にはとげとげしいモノ付いてい

た、叩かれたら痛そうだ。

「……………」

身体を包んだ光が小さな粒となり消えていった。そして、光の中から現れた自身の姿は、紛れも無く魔法使いの格好をしていた。

「……………っ！」

だ、ダサイ。そして何より恥ずかしい。

『つぶ、んくつくくくくく。』

彼女の必死に笑いをこらえる声が右手から聞こえてきた。

「お前が笑うな！」

『だ、だつて、つぶつくくく、ぜ、全然、似合つて、ない、うつふふ』

「だ、誰のせいだよ!!！」

『ふふ、あははははは、ちょ、ちよつと落ち着かせて、くださいい。はあはあ……すうはあ』

どんだけ失礼なんだこいつは。勝手にこんな格好させやがって。

『はあ、はあ……っ。え、えつと時間がないので簡潔に言うと、それはマスター用のプロテクトスーツです』

マスター用……ということはあるのイヌもどきのスーツって何か。

『マスターは女性ですので、勿論プロテクトスーツも女性用に作られています』

ということらしい。つまり俺はこんな大事な場面でいきなり女装をしてしまったわけだ。しかもご丁寧に髪型まで変えられるという。

「なんの罰ゲームだよこれ」

せめてもの救いは、ここにいるのがあの怪物だけであったということだ。こんな姿、知り合いに見られたら一生の恥となる。知り合いじゃなくてもこんなものは見られたくない。

『今は我慢してこの格好で戦ってください』

「まじでか！ 全然しまんねえよこんな格好じゃ!!！」

『しょうがないじゃないですか、緊急なんですから。ほらほら、そ

でしょうがっ！！！』

叫び声とも取れる怒声が響く。今までの彼女とは別人のような声だ。

「あ、いや、あの、どういう状況なのかわからないが、とりあえず謝る」

『はあはあ・・・っ・・・はあ、はあ。い、いえ、こ、こちらも取り乱して、申し訳ありませんでした』

若干の怒りを残しているようにも聞こえるが、とりあえず落ち着きたようだ。

『い、いいですか？ 例によって簡潔に説明しますが、今の私の状態は待機モード。簡単に言うと丸裸同然ということです。この状態では私を鈍器として扱うことは自殺行為です。私にとっても。ってか私の身が持ちません。今この状態で使えるのは初級魔法のみです。威力は弱いですが詠唱が必要ありません』

「なるほど。その初級魔法とやらで戦えということだな」

『簡単に言うとそういうことです。しかし、逆に言えばそれ以外の攻撃方法がないということです。つまり応用が利かないということです。まあ怪物相手には応用も何もないと思いますけど』

「まあ何でもいいさ。魔法が使えるってわかっただけでも十分だ」

『ホントに大丈夫ですか？』

「ああ、魔法ってこれだろ？」

そう言っつてポンと手のひらに丸い球体を作った。

飛び道具。直径10cmほどの小さな球体で、体の中にある魔力を練りだして作り上げたエネルギー弾だ。同時に複数個作り出すことができ、放ってからコントロールが利くので使い勝手がよい。しかし威力は弱い。ボタン長押しでため攻撃はできません。

『なんでそんな取説みたいな言い方なんですか。それよりも、よく説明なしでできましたね』

相変わらずツツコミが冷静である。

「ん、なんていうのかな。指を動かすのと同じだよ。初めからそ

これが最後です。ホントのホントにまじめにやりましょう」

「あ、ああ、そうだな。まじめにやらないと色々言われそうだが、全然効いてないけど、どうしたらいいんだ？」

「怪物にダメージがなかったのは、ただ単純に威力が弱かっただけだと思います」

「ということは、これよりももっと強い弾を作れば良いと言う事か。単純に考えるとそうなります。しかし、この状態でアレ以上のモノは作れません」

「そういえば言ってたな、初級魔法しか使えないって。」

「じゃあそれ以上の魔法はどうやって使えばいいんだ？」

「簡単ですよ。モードチェンジすれば使えるようになります」

「モードチェンジ？　なんか、剣とか槍とかに変形するのかわ？」

「それも可能といえば可能です。ですがそれよりももっと効率の良い砲撃モードというものがあります」

「砲撃モード……」

「某魔法少女みたいに超極太ビームが撃てたりするのだろうか？」

「某魔法少女を知らないのなんともいえませんが、その超極太ビームは砲撃可能です」

「おお……」

「なんとというロマン。厨二病の俺にとってはビームという名前だけでワクワクする。」

「注意事項ですが、砲撃までに5秒ほど時間がかかります。人によって差がありますが、今のあなたならばそれくらいでしょう」

「5秒か……よし、だったらその間あいつを動けなくしたらいいんだな」

「ええ、ですが相手の動きを封じるのは少々厄介ですよ。それにモードチェンジのやり方だって……」

「まあなんとかなるって。さっきと同じ要領でやればいいんだろ？　だったら余裕だぜ！」

丸く円を描いた防壁を思い切り押し出す。それは、怪物の巨体をも軽々と吹き飛ばした。巨体は宙を舞い、ドスン、と音を立て地面に落下した。

『なんて滅茶苦茶な……』

彼女は呆れを通り越し絶句する。

「今度は、こつちの番だ。全弾……突撃！」

展開されたエネルギー弾が全て打ち出される。打ち出された弾は怪物を雨のように襲った。

時間は5秒。その間に全ての過程を終わらせる。

精神を集中させ全ての意識を彼女に注いだ。不思議な感覚。暖かく心安らぐ。そして、彼女に手を伸ばした。

彼女の在り方。彼女の構造が手に取るように理解できる。今、自身が求めている姿も容易に見つけ出すことが可能だった。

「モードチェンジ

シーリングモード」

そうつぶやいた。言葉だけでは意味がない。しかし、今ならば何をどうすべきか理解できる。

彼女は光り輝き姿を変える。自身の望む姿に。

杖の先にあつた太陽は、機械音を立て二股に分かれたU字のレーンに変化した。

「俺の全てをこの一撃に注ぎ込む！」

彼女を怪物に向けまっすぐと構えた。そして、体中に存在する魔力を彼女に注ぎ込み、その魔力を互いに反するように一気に回転させた。

「はああああ……」

空気が割れる。キシキシと音を立てて。杖の先を中心に空間が悲鳴をあげ、渦を巻くように歪む。

「つく……」

腕に力が入らない。足も身体を支えることができない。力が抜け

る、そんな感じだった。

『無理をしすぎです！ これ以上魔力を放出すればあなたの体が危ない！』

しかし、彼女の言葉は一切耳に入らなかった。

「うおおお！ 爆ぜる俺の魂イイ！！」

体内に生成される魔力を彼女へと送り込む。送り込まれた魔力は爆発するように彼女の中で眩いほどに光り輝いた。

二股のレールが唸りを上げ、弾丸をねじ込むように押し出す。

「くらえ！ 貫き通す紅蓮ソル・プラストの炎砲オオオ！！！」

彼女に込められた全ての魔力を一気に解き放つ。

金切音が鳴り響き魔力と魔力が回転し擦れる。

「■■■■？ ■？」

怪物からもれる奇怪な声。

身体には一筋の赤い光がまっすぐと突き刺さっていた。

赤く染まる熱線は一筋の光となり怪物を貫き通した。身体に開いた小さな穴。そこから激しく炎が燃え広がる。

もがき苦しむも、その炎からは逃れることはできない。

「■■■■■■！！！」

堪えられるはずもなく、炎は全身を覆いそして怪物の体は消滅していった。

「はあはあ・・・っ・・・ふう」

一気に魔力を消費したせいか疲れがどつと襲ってきた。

轟と鳴り響いたその一撃の余韻が、いまだにこの林の中で渦巻いている。

『まったく、あなたには色々な意味で驚かされますね』

「む、どういう意味だよ」

なんだかバカにされたような言い方に大人気なく腹を立てる。

『そうですね・・・予想の範囲内でありながら、その全てが常軌を逸している。ということですかね？』

「なんだそれ？」

『そのことも含めて、あなたにはお話しすることが多そうですね。』

しかし、今はそれよりも目の前に落ちているものを優先しましょう』
と言う彼女の言葉通り、目の前に落ちているものに目をやる。

「・・・ん？」

そこには消滅した怪物の体から落ちて出た小さな石があった。石は、深く黒く漆黒の色をしていた。そしてその漆黒の中に光のようなものを感じた。

『それはとても大事なものなので、きちんと保管しておいてください。』

「大事なもの、ねえ。これを集めるためにこの世界に来たとか？」

なんかあり得そうな展開だ、と少し妄想してみる。

『目的のひとつではありますが、それは追々話すことにします。いまはあのイヌもどきを無事この雑林から助け出すことが先決です』

その妄想は当たっていたらしい。しかし彼女の対応があまりにも普通すぎて面白くない。もっとこう驚いてほしいものだ。

「ふうん、ま、いいや。じゃあ、とつとこの不気味な雑木林から出るとするか・・・うおっと」

気が抜けたせいかバランスを崩してしまった。

『ほら、言わんこつちやない。無理に魔力を変換させたせいで、体の中の魔力がうまく循環まわっていないみたいですね』

「は、はは、ま、まあなんとかあったんだし、結果オーライってことで。」

『・・・』

彼女は何も言わなかったが、どこか不満げな様子だった。

『別にあなたが倒れるのは構いませんが、そうなるとあの人を運ぶ人が居なくなるので倒れないで下さい』

そんなことを言いつつも彼女は彼女であの娘を心配しているのだろ。ツンデレ……？

「……あれ？」

『どうかしましたか？』

「あー、そういえば、あいつ何処に置いたっけかなあ、と思って「あいつとは当然あのイヌもどきのことである。怪物と戦う前に安全な場所に、ということとどこかに置いたのだがそれが見当たらなかった。」

『確かその木の影に……いない』

彼女の言う木の影というところは一度探した場所だった。俺も確かにそこに置いたと思ったのだが見つけることはできなかった。

『恐らく戦っている間もこの空間は捻じ曲がっていたみたいですね。その影響でどこかに飛ばされたのだと思います』

「どこににいるかわかるか？」

『いえわかりません。あの人の今の魔力はほぼゼロに等しいですから位置の特定は難しいですね』

なんか、また面倒なことになった。つまりこの林のどこかにはいるけど、そのどこかがわからないと。

「えーっと、探さなきゃダメ？」

『当たり前です！！』

「ですよね……」

こうしてまた、この入り組んだ雑林をさ迷い続けるのだった。

となりの幼馴染

昼休み、教室の中で、昼食中

なんか川柳っぽくなってしまった。

家から持ってきた弁当を机に拡げ、もくもくと食べていた。正面と左側には、いつものように佐藤と鈴木が机を並べ、また何か語り合っていた。

あの後、イヌもどきを探すのに小一時間ほどかかり、家に着いたのは午後6時頃。魔力の消費やらなんやらで相当疲れていたのか、自分の部屋に入ると同時にベットに突っ伏しそのまま眠ってしまった。

そして今に至る。

ずいぶん間をはしよったように聞こえるが、実際にそうなので困る。本当に気付いたら学校にいたのだから。それまでの出来事はほとんど覚えていない。朝食に何を食べたのか、学校までどうやって来たのか、そして今まで何をしていたのかを思い出せずにいた。

頭の中の記憶を探っても霧がかかったように何も見えず、何も思い出すことは出来なかった。

と、そんなことを考えていると教室のドアがガラガラと音を立て開いた。

昼休みに教室のドアが開くことは別段珍しいことではないので、気にせずに黙々と昼食に勤しんだ。

「つきちゃーん！ 一緒にお弁当食べよー！！」

「ぶふおっ！！」

思わず目の前にいる佐藤に食べかけの米粒をぶっかけるところだった。

吹出しそうになったご飯を飲み込み、声がしたドアの方を見る。そこに立っていたのは一人の女の子、入江舞いりえまいだった。

黒髪短髪リボン。これが彼女の特徴の全てといえるだろう。それ

ほどりボンが目立っているのだ。

このリボンは日によって変わる。その日の魔力の流れに合わせて変えているのだとか。ちょっぴりオカルトチックな少女である。ちなみに今日は黄色のリボンをしている。

少し釣り上がった目。そこから覗かせる瞳はなぜか鋭い。

一応、幼馴染だ。そんな幼馴染が言うのもなんだが、かなりの美人さんだ。身長はそれほど高くないが、スタイルも良く、出るところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んでいる。それも相俟ってか、見た目だけならかなりの人気があるらしい。実際に俺自身も可愛いとは思っている。だが、ここが少しなぞである。美人なのに可愛いこれ如何に。

しかし、舞の性格を知っている俺からするとマイナス部分が多すぎて、どうにもプラス方面に評価が行かない。それは、周りの皆も同じであるようで、残念美人とよく耳にする。

「お前はいちいちそんな大声で俺の名前を叫ぶな！！ 普通に黙って入って来たらいいだろうが！」

おかげでクラス中の皆から注目の的になってしまっている。

比較的昼休みと言うものは騒がしくなるものだが、今この状況は違う意味で騒がしくなっている。遠くのほうからひそひそと噂話らしきものが聞こえる・・・気がする。あくまで気がするだけである。

「え、いいじゃん別にいい」

それに、そのつきちゃんって言うのもやめてくれ。恥ずかしいことこの上ない。と心の中でつぶやいた。これを本人の前で言うと大変立腹になる。

「大体、なんで俺のクラスまでくるんだよ。自分の教室で食べたらいいだろ」

「それじゃあ、つきちゃんと一緒に食べれないじゃあん」

不満そうに言う舞。

「別に一緒に食べなくていいだろ」

「わかってないなあ。一緒に食べることに意味があるんだよ」
まったく、いつもこの調子だ。

「はいはい、ごちそうさま」
横で見ていた佐藤が仲裁に入ってきた。

「ささ、舞ちゃんにはこの席をお譲りしましょう」

そしてさらに鈴木が、自分が座っていた席を舞にあけ渡した。

「な、お前ら余計なことを・・・」

「まあまあ、あのままクラス中のさらし者にされるのも面白そうだったが、さすがに良心が痛む」

何気にひどいことを言う鈴木。

「じゃあ俺たちはこっちで食うから」

「お二人ともごゆっくり」

二人は机の上の弁当をどけ、隣の席に移った。

「リア充は爆発すればいいのに・・・」

去り際にボソツと何か聞こえたが気にしないでおこう。

「まったく、いい迷惑だったの・・・あ、いや何でもありません」

舞の鋭い視線がさしたのですぐさま訂正した。

しかし、二次元だと幼馴染には萌えるのに、どうしてこいつには萌を感じないのだろうか。

時間は進み、今は帰りのホームルーム中である。基本的に先生のどうでもいい話なのでみんな聞き流している。

あれから色々考えたのだが、結局頭の中の霧が晴れることはなかった。もしかしたら全てが夢であった可能性も否定できない。現に彼女たちの存在を今のところ確認できていない。まあ、今確認できたらクラス中が大騒ぎしているだろう。

と、またまたそんなことを考えていると、またまた教室のドアがガラガラッと開いた。ホームルーム中に教室のドアが開くなんてことは珍しいことなので全員がそちらを振り向いた。

「つきちゃん！一緒に帰ろお！」

現れたのは言うまでもなく舞だった。教室中の視線が舞へと突き刺さる。冷たく鋭いまなざし。直接見ていないのに感じるこの悪寒。

「し、失礼しました……」

空気を読んだのかサツと教室から出て行った。そして目線が、消え去った舞から俺へと変わる。ぞぞつと背筋に何かが走る。

「あ、えつと、ごめんなさい」

なぜか俺が謝る羽目になっていた。昼休みの時以上に恥ずかしい。そして気まずい。

その気まずい空気のままホームルームを終えた。

「アホだろお前」

「な！？開口一番アホとかひど過ぎるよ〜！」

ホームルームが終わり教室を出ると、そこには舞がいた。

気まずい空気から逃げるべくいつもの二人は放っておいて、いち早く教室から逃げてきた、のはいいのだが外に出てもどこからか視線を感じるの、やや駆け足で学校をあとにした（舞は放置）。

しかし運悪く信号にひっかかってしまい追い付かなくなってしまったのだ。

「だいたい、なんで私を置いて行くんだよ〜！」

「あのなあ、普通に考えてホームルーム中に堂々と教室に入ってくる奴があるか。おまけにまた大声で名前を呼びやがって。おかげでどんな目に会ったか……」

と嘆いていると

「ドンマイだよ、つきちゃん！」

と舞は明るく励ましの言葉を投げかけるのであった。

「お前のせいだよっ！ったく」

いつもこんな感じなので慣れてしまったが、かなり迷惑な行為だ
と思う。それを許してしまう俺も俺だが。そして、いつものように
帰るのである。まあ、こいつといると帰り道も退屈しなくなる。

もう見慣れた、というより見飽きてしまった道のりをグダグダと
歩き続ける。舞と他愛のない会話をぼつぼつとしていると、目の前
を見覚えのある犬が横切った。

「ん、あの犬・・・」

「つきちゃん、どうしたの？」

目の前に現れたその犬をボーッと見つめていると、舞が顔を覗き
込んで問いかけてきた。

「ああ、ほらあの犬、まだいたんだなあって」

「ぬうん、犬・・・？」

「・・・覚えてないのか？ほら、昔からずっとこの辺りにいただろ
あれは、そう。俺たちがまだ小学校低学年のときの話だ。今から
10年ほど前、この住宅街に飼い主のいない犬が度々目撃されるよ
うになった。それがこの目の前にいる犬である。

犬には首輪がかけてあり、飼い主がいるのだろうと飼い主搜索も
行われた。1年、2年と年月が過ぎても結局飼い主は現れず、飼い
主搜索もついに打ち切られた。

それからずっと、この住宅街に現れてはふらふらと歩いていたの
だ。小学生たちの間では結構人気があり、よく友達と探しに出かけ
たりした。しかし、そういうときに限って見つからなかったりする。
そしてその後、俺たちが小学校6年になると同時に、その姿を見
ることはなくなった。

猫は死ぬときに身を隠すといわれている（実際は違うらしい）が、
この犬もそうだったのだろう。と、俺たちの間では解釈することに
した。

そんなことがあったということさえ、この数年で忘れてしまっ
ていた。

「えと・・・あーそうだったかも？」

明らかに覚えていない様子の舞。

「俺もついさつきまで忘れてたからな」

「な、なんで私が忘れてるような言い方するのぉ」

「いや、忘れてただろ」

ふと思ったのだが、舞と一緒にこの犬を見たことはなかったかもしれない、と昔の記憶をたどってみた。

「10年前ってことは、もうかなりお爺ちゃんだよな」

「いや、お婆ちゃんの可能性もあるぞ」

「あ、そっか」

そういえば心なしかヨボヨボになっているような気がする。

過去に、性別を確かめるようなことはしなかったので、オスカメスかはわからない。

「あれ、いなくなってる」

舞が言う目線を戻して見るが、さつきまでそこにいた犬がいなくなっていた。少し目を放した隙にどこかに行ってしまったのだらう。

「……………」

「……………どうした？」

舞は神妙な顔つきでじつと何かを考えているようだった。

「え、あ、ううん。なんでもないなんでもない」

「?……………そうか」

それからずっと(と)いつても数分だが(舞は何かを考えるように、一言もしゃべらなかつた。そして無言のまま家についてしまった。

「じゃあな」

「……………うん、じゃあね」

ちよっぴり元気のない「じゃあね」だったが、彼女も何か考えたいことがあるのだろう、とそのまま別れることにした。

二人の事情

「やっと帰って来ましたね」

我が家に着き居間へと抜けると、唐突にそんな声が聞こえてきた。いや、聞こえたというより感じた。この感覚は前に一度だけ経験したことがある。初めて彼女に出会ったとき。脳内に直接話し掛けられるような感覚。脳の中に直接文字が刻まれる感覚だ。

「色々とお話ししたいことがありますので、至急部屋まで来て頂きますか？」

声の主は、恐らく昨日出会った彼女。

「ああ、わかった」

俺としても聞きたいことがあったので、ちょうどよかった。

「えっと、俺の部屋でいいのか？」

「それ以外のどこにいると思うのですか？」

「そ、そうだな。今すぐ行くよ」

なんとも間抜けな声だ、と自分でも思うほどの返事をした。

その疑問はある意味当然といえば当然なわけで、今日一日の出来事が昼休みごろからしかないわけではないわけである。当然、彼女たちをどこに置いたかも覚えていないし、そもそも昨日の出来事自体が夢であつたのではないかと思うほどである。

「あ、できれば飲み物か何かを持ってきて頂けますか」

「了解、飲み物だな」

と了解したはいいが、彼女が飲み物を飲むのか？ と内心不思議に思いつつ、台所の冷蔵庫に入っていたお茶をコップに入れ部屋へと向かった。

ガチャリとドアを開けると、そこには首飾りの彼女とイヌもどきが俺の机の上にちょこんと座っていた。なるほど、飲み物はこいつのためか……コップに入れたけど飲めるか？

『来ましたね。では、早速ですけど、マスターの目が覚めましたので……』

「この度は危ないところを助けていただきありがとうございます」「は、はあ」

首飾りの彼女が言い終わる前に、イヌもどきがひよいと頭を下げた。それに答えるようにこちらも軽く会釈する。

しかし、首飾りもそうだが、人外のものや人間の言葉で会話するというのはものすごく不思議な感じだ。

「私、ソルの国からやって参りました、アレッサンドラプリシエス・S・トゥロノファルコーネと申します」

「あれっさんどら……？ も、もう一回」

「アレッサンドラプリシエス・S・トゥロノファルコーネです」

む、無理だ。覚えられん。あと何十回か聞けば記憶可能だがそれは失礼になるだろう。

「ごめん、なんか愛称とかない？」

「愛称、ですか？ そうですね……私の母は私的のとき『アレ』と呼びます。ですので、それで覚えていただいても結構です」

「そ、そうか。悪いな、じゃあ、アレスで。俺は高村月海。よろしく」

軽く握手しようとしたが、どう見ても「お手」になってしまつのでやめておいた。

『えー、ちよつとよろしいでしょうか』

「ん？ どうした」

コホンと咳払いをして首飾りが間に入った。

『色々順を追って話を進めたいので、マスターは少し黙っていてください』

「ほう！ 開始早々、私の扱いひどくない!？」

『そういう役ですから』

首飾りは意地の悪い声でアレスへ言葉を投げ、話を続けた。

『申し遅れました。私の名はルース・ド・ソルです。ま、あなたは

すでに知っていると思いますけど』

そういえばあの時、変身時に彼女の名を口にしていた気がする。

『私のことはルースとお呼び下さい』

「ルースね、了解」

確認するように彼女の名を繰り返し頭の中に記憶する。そして、
ぼすん、と自分のベッドに腰掛けた。

『ではまず、私たちがどういう存在なのか、というところから説明
します』

ルースは言い改まり、

『先程マスターもおっしゃいましたが、私達はソルの国からやって
参りました』

と静かに語った。

「いきなり話を折って悪いけど、それって何処にあるんだ？ やっ
ぱりどこか遠い星とか？」

『場所ですか？ 結構この地球とは近所さんですよ。五つほどと
なりの銀河系ですから』

「………へ？」

あまりのスケールのでかさに思わず思考を停止する。

銀河系ってあれか、この地球がある太陽系みたいなのが何個も入
ってるあれか？

「そ、それって距離的にどれ位なんだ？」

『別に答えるのはかまいませんが……ホントに答えて欲しいで
すか？』

「い、いや、やっぱり遠慮しておく」

聞いてしまったらとてつもない数字がでてきそうだったのでやめ
ておいた。

『さて、話を戻します。どうしてそんなところからこの地球にやっ
て来たか、ということですが、その理由はこの石にあります』

そう言って指差した（指はないけどそんな気がした）のは、昨日
怪物が落としていった漆黒に輝く石ころだった。いつの間にか自分

の手元から無くなっていたので、どこに行つたのかと心配していたが、なるほど、自分の部屋に置いていたのか。

「大切なものだ、って言つてたな」

「そうです。大切なものです。正確には危険なものですけど」

「おいおい危険なものって・・・」

危険と大切は随分と違う表現だと思ふのだが。

「この石が危険だということも含めて今からご説明します。この石、私たちは「ドティックジュエリ」と呼んでいます、それはもともと私たちの星にあつたものなのです。私達の星ガラシアには、ソルルーナ、ステイール、この三国が存在しています。ドティックジュエリはそれぞれ四つずつ三国に保管されていました。ですが今から十数年前、それらをひとつに集め、より厳重に監視、保管しようという計画が立ち上がりました」

いきなり色んな国の名前が出てきたな。覚えられるか？ しかし、それよりも気になつたのは他のことである。

「どうしてなんだ？ 三つの国に分けて保管してたのは何か理由があつたんだろ。だとしたらひとつにあつめる方が危険じゃないのか？」

「・・・あなたは随分と頭が切れるようですね」

ルースは感心とため息を同時にだした。

「そうです。危険でした」

いいえ、危険かどうかは今

でも判断できていません」

ふしぎな表現をし、そのまま話を続けるルース。

「ドティックジュエリが危険と言われているのは、ひとつに集めることの他に理由があります。ドティックジュエリは保管と同時に研究の材料としても扱われていました。それはドティックジュエリに膨大なエネルギーが蓄積されている可能性があつたからです。」

「可能性？ 確定的じゃないのか」

「はい、だからこそ研究の対象になつていたのです。エネルギーが蓄積されていることは判明していましたが、蓄積量が不明だったの

です。ですが近年、といつても数十年前ですが、その蓄積量が天文学的な数値である可能性がある、という報告がありました。これにより、どの国でもドディックジュエリの研究が第一に行われるようになりました。そのエネルギーをうまく使うことができれば他国に差をつけることができる。逆に言えば研究が遅れば差をつけられずしてしまふ。ですから、皆こぞって研究を進めました。一歩でも遅れを取らないように。

ですがある日事件が起こりました。ドディックジュエリの研究員が謎の死を遂げたのです』

「……！」

謎の死。その言葉を聞き、少し背筋がひやりとした。

「病気とかそういうのじゃないんだよな」

『ええ、研究員はいたって健康体でした。死に至る要因が全くないほどこに。そして事件はそれだけでは終わりませんでし

た。他の国でも同じ様に、それも何度も起こってしまったのです。原因はもちろん、この石です。いえ、もちろん、と言う表現は正しくありませんでした。十中八九と言ったところでしょうか』

ルースは苦笑し息をついた。

目の前に置いてある石を見つめる。この石が人を殺した。そう思うと寒気がする。

「だから一つにまとめて保管したのか」

『そうです。嚴重に。誰の手にも触れられないように。』

場所は三国の国境が交わるところ。そこは誰も寄り付かない場所なので絶好の隔離空間でした』

「三国の国境？ 普通そういう場所って人の集まりが多いんじゃないじゃないか？」

『普通ならそうでしょうね。しかし今のガラシアは普通と呼べる状態ではなかった。ソルとルーナの間で戦争が起きているのです。今は停戦ということになっていますが、国家間は緊張状態にあります。』

随分物騒な言葉をさらりと言うルース。

『ドディックジュエリの存在自体、一般には公表されていませんからね。勿論、この保管計画もです。』

つまり国家機密というものらしい。

「そんな秘密を俺なんかに話してよかったのか？」

もしかしたら自身も抹消されるのではないかと、若干の不安がある。

『たぶん大丈夫ですよ。まず星が違いますからね。星間で交流があれば話は別ですけど、ガラシアと地球は全く接点がありませんからそれは良かったと、内心胸をなでおろす。』

『で、ドディックジュエリが消え去った原因ですが……』
ルースは少しもつたいぶるように言葉を止めた。

「おう」

そこまで言うのだからよほどの理由があるのだろう、と少しだけ期待する。

『それがわからないのです』

「何だよそれ……」

ちよつとだけ期待していた自分がアホらしい。

『大体の予想はついているのですが、なにぶん本物がないので調査ができずにいたのです。恐らくですけど、ドディックジュエリを全てひとつにまとめた、ということが原因のようです。なぜか？と聞かれるとなんとも答えられませんが、今までそんなことが起こっていなかったのに、保管後急に消え去ったとなればそれが原因と考えることが普通でしょう』

「まあ、俺もそう考えるよ」

『しかし、問題はそこではないのです。消え去ったあとドディックジュエリの反応は完全に消えました。どこか違う場所に移されたとかそういうのではなく、本当に存在そのものがなくなってしまうたのです。そして数週間後、この地球に反応が現れました。それもいきなりにです。それまではわずかの反応もなかったのに、あるとき

急に反応が現れた。当然、三国の王たちは早急にドディックジュエリを確保するよう命を下しました。そのとき地球に送り込まれたのはソル、ルーナから一人ずつ。マスターの・・・アレックスサンドラ姫の母、ヴァレンティーナ王妃。ルーナの国からは現女王エリザベッタ。この二人が選ばれました』

「二人だけだったのか？」

あまりにもの人数の少なさに、疑問をもった。

『まず、この地球とは極力^{ほし}関係を持たないこと。できれば全ての行動において極秘でなければいけませんでした』

「だとしても二人つてのは少くないか？ しかも二人とも王族で、それに今は停戦状態だといっても敵国であることには変わらないんだろ」

そんな二国が手を組むとは考えにくい。

『これは、また話がとぶので簡潔に説明しますと、その二人は魔力がずば抜けて高かった。そして戦闘における能力も。特にルーナのエリザベッタは100年に一人の逸材といわれるほどでした。先ほどは言い忘れていましたが、二国が停戦状態になってからおよそ50年ほど経過しています。二国間の交流はほとんどないに等しいですけど、ステイレーを通しての交流は良好です。徐々にですが和解を求める声も国民の中から出てきています』

「だからその二人が選ばれたのか」

ことの重要性はともかくとして、王族二人が任に着くということ、二国間におけるある種の友好の証だったのだろう。

「でもステイレーからは誰も選ばれなかったのか？」

『・・・説明がメンドイので簡単に言いますよ』
ルースはやる気なさそうに答えた。

一応重要な場面だから頑張ってくれ。

『ステイレーは機械の国、ソルとルーナは魔法の国、ということですよ』

簡単にいいすぎじゃないか。

「えっと、つまりステイラーには魔法を使える人が少ないとかそういうことか？」

『そんな感じですよ。そのことについてはいずれお話ししましょう。』

そしてドディックジュエリ探索の結果、十一個は見つかることができました』

「最後の一個は？」

『未だに発見できずにいます。いえ、それ以外の全てが今は未発見状態です。あ、一個は昨日見つけたのでしたね。そう、ドディックジュエリは一度回収に成功しかけたのです。しかしその直前にまた飛散したのです』

「全部集まっていないのか？」

この石、ドディックジュエリは、全て集められたから保管場所から消え去りこの地球にやってきた。しかし、それが全て集まる前にまだどこかへと飛び去った。

それはつまりどういうこと？

『その辺りの話は私からお話することはできないので……ルースは今までにない、悲壮感を漂わせる声でつぶやいた。』

「そっか……」

これ以上はこの話には触れてはいけなさと感じ、話を進めた。

「それからどうしたんだ？また一からやり直したか？」

『いえ、二人とも一時帰還しました』

「どうしてなんだ。すぐに探した方がいいんじゃないのか？」

『実はまたドディックジュエリの反応が消えてしまったのです。これはなんと説明したらよいのか、この地球ほしにあるのはわかるのに正確な場所がわからない、という状況だったのです。どうすることもできないので二人には帰還命令が出されました。その後この十数年間反応は現れませんでした。そしていまになって、その反応がこの地球、この町から現れたのです』

「なるほど、それでこの町にやってきたわけか？」

『はい、そういうことです』

「.....」

カチカチと時計の秒針が無音の部屋をつつむ。

ルースが最後まで話し終わり、しばらく沈黙が続いた。

気の遠くなるような話だった。およそ普通の人たちにとっては信じることができない内容ばかりだ。実際、俺だって信じることもできない。魔法がどうたら違う星がどうたら、なんて信じるほうがおかしい。しかし、今はこの彼女の話信じる他ない。でなければ、昨日起こった出来事が説明できない。

『ここまで話をしましたが、信じてはもらえただしょうか？ 今、私が話したことは、あなたにとって夢のような話のほずです。それこそ、虚言と言われてもおかしくありません。ですが、これは紛れも無い事実。もしも、あなたに信じてもらえないのなら我々はこのから出て行きます』

沈黙を破ったルースは、また突拍子も無いことを言い出した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺はまだ何も言っていないぞ。それに信じないとも言っていない。たとえ、お前の言ったことが非常識なことでも、俺はお前のことを信じるぞ」

『なぜですか？ あなたが私を信じる理由がどこにあるのですか？』

「おいおい、お前は俺に、信じてほしいのか信じてほしくないのかどっちなんだよ？」

先程と言っていることが真逆の彼女に、苦笑しながら言った。

『.....どちらでしょうね。私自身でもそれは分かりません。しかし、あなたが信じるというのなら、私はあなたにできる限りの助力をさせていただきます。反対に信じないというのなら、このことは忘れていただきます。そして、二度と目の前に現れることはありません』

ません』

「ったく、だから信じるって言ってるだろ」

『……………』

ルースは納得がいかないと黙り込んだ。

「理由がほしいなら教えてやるよ。確かに、俺はお前の言っていることは到底信じられない。でもさ、信じなきゃ何も始まらないだろ。はじめから嘘だ、って決め付けてちゃ、分かるものも分からなくなっちゃうだろ。だから、お前のこと信じるよ」

『信じた拳句、それが嘘だとしたら？』

「それはその時だ。俺の厨二全開物語がそこで終わるだけだよ」
ちよつぷりそれは寂しいと思いつながら、はは、と軽く笑い飛ばした。

「それでは、私たちに協力していただける、そういうことですね」
黙り込んだルースの変わりにアレスが聞いた。

「ああ、そうだよ」

「あ、ありがとうございます。今の私ではあの異型のものと戦う力はありません。あなたには魔法の素質がある、とルースに聞かされてしまったので、ご協力いただけるとてもありがたいです」
アレスは深々とその頭を下げた。しかし、それを制するようにルースが声を出した。

『本当に、よろしいのですか？ 私たちに協力するということは、この石を集めるということ。それがどういう意味だかわかりますか。一歩間違えれば、いいえ、間違えなくても死ぬかもしれないですよ』

「……………」

死

確かにそれは恐ろしい。今まで意識したことすらなかったことだが、死が恐ろしいなんてことは当たり前前の感情だ。

『よく考えてください。いま私がした話が例え真実だとしても、これはすべてあなたとは無関係なこと。その無関係なことに首を突っ込んであなたが傷つくことはありません』

いままでと同じような淡々とした言葉だった。

もつと無愛想なやつかと思っていたがそうでもないらしい。

「なんだ、心配してくれるのか？」

ちよつとだけ茶化すように言ってみた。

『ええ、もちろんです』

そして返ってきた言葉が意外なものだった。

『私は人を守るために造られた存在。たとえ星が違っても人であるあなたを危険にさらすわけにはいきません』

造られた存在。

ここまで普通に話していたが、彼女は機械なのだ。どういった経緯で、どのように造られたかはわからないが、機械である以上造られた目的がいまの彼女の行動なのだ。彼女はどう感じているかわからないが、それは彼女の意思ではないかもしれない。そもそも意思自体が造られたものである以上、そんな考えすら及ばないだろう。

「お前つてけつこう生きづらいんだな」

『・・・申し訳ありません。なぜそんな言葉がいま出てきたのか理解できないのですが』

「あー悪い、協力する、しないの話だったな」

あわてて話をもどす。

「お前がどんなに心配してくれても、俺は協力するぜ」

『なぜですか』

ルースは静かに聞いた。

「この、ドディックジュエリつてやつは人を殺しちまうモンなんだから？ それがこの町にあるっていうなら、やらないわけにはいかないだろ。」

それに、お前たちだけじゃどうしようもないんだろ。だったら代わりにやってやるよ。困ってる人がいたら助ける。そうだろ？

確かに死ぬとか言われたら怖いけどさ、でも、今それができるのは俺だけなんだつたらやってやるさ。俺にも守りたい人つてのが一応いるからな」

ふと、さっきまで一緒にいた少女の顔を思い出した。

『甘いですね』

「・・・え？」

『その考えは甘いと言ったのです。』

困っている人がいたら助ける。それは人道的に当たり前です。しかし、あなたがこれから足を踏み入れようとしている世界は、それが通用しません』

「・・・」

『別にあなたの考えを否定しているわけではありません。むしろ、それは評価すべき点です。しかし、その考えは死を招く。そういう世界なのです』

そんなことは分かりきったことである。俺と彼女たちとは住む世界が違う。それでも、何もしいまま終わりにたくない。誰かの力になれるのなら、それが自分にしかできないのなら、彼女が何と言おうと・・・

「それでも、それでも・・・！俺はお前たちに協力する。例えば、お前がやめると言っても、絶対にお前たちの助けになってやる」

『・・・そうですか。では、一つだけ忠告をしておきます。もしあなたの身に何かが起こったとしても私たちは一切責任を負いません。それでもよろしいですか？』

ふう、とため息をついたルースは、覚悟しろと言わんばかりの威圧的な声で問い質した。

「ああ」

そして、短く、はっきりと答えた。

『・・・わかりました。ご協力感謝します』

明らかに感謝しているような声ではない、事務的な言葉で、彼女は話を区切った。

「ところで、話は変わるんだけど、お前らこれからどうするんだ？」
『どうする、とは？』

あまりにも抽象的過ぎる投げかけを、冷静に返すルース。相変わらずの彼女の声だが、心なしか無愛想に答える。

「あー、いや、ほら、泊まる所とかないだろ？」

彼女たち二人は別の世界のヒトたちであるわけだから、当然、衣食住が存在しないわけである。

『……』

つて、なんでそこで黙るんだ。

『あなたはボケているのですか？』

「は？」

そして一言。予想外の返答に困惑する。

『それは、すでに昨日の時点で話し合っただではありませんか。食事の面と寝室の提供。この二つをあなたが提案したのですよ』

食事と寝室？ 確かに二人に行く当てが無いのであれば、それくらいはしようと思った。しかし、ルース曰く、すでにその話は済んでいるらしい。

「いや、でも俺は昨日すぐ寝ちまって、話すらしていないと思うのだが」

『……？ いえ、確かに了承を頂きました。あなたがすぐに寝てしまったのは事実ですが、その数時間後に起きて私と話をしましたよ』

というこらしい。

さらに訳が分からなくなってきた。俺は昨日、ベッド中へ入り込んだ後は一度も起きていないと思うのだが。まあ、記憶が無い以上、昨日の自分が何をしていたなんて分かるはずもないのである。

『……ふむ。どうやら、あなたと私の間に記憶のすれ違いがあるようです。』

「記憶のすれ違い？」

『ええ、例えばそうですね……。これはどうでしょう。あなたが昨晩の夕食に食べたものは何ですか？』

「え、なんだよいきなり」

「ずばり答えは「何も食べていない」なのだが、それが一体どうしたと言うのだろうか。」

『もうひとつ。今朝は何時に起床しましたか？』

それについてはお答えできません、としか言いようが無い。記憶が無いのだから。

『記憶のすれ違いとは、平行世界との記憶干渉することを言います。平行世界。現実とは違うもうひとつの世界。それは無限に存在し、限りなく現実近く、限りなく現実から遠い。』

『簡単に説明すると、あなたが今から行う行動の可能性の種類だけ、未来が存在する。その未来のひとつは現実からの未来であり、それ以外はパラレルワールド。原初から伸びる無数の枝、といったところですかね。よく、if世界とも呼ばれますね。もしも、あの時こうしてれば……。』

記憶のすれ違いとは、平行世界に存在する全く同じで全く違う自分自身の記憶が、何らかの影響で現実世界の自身と干渉することである。デジャヴなんかもこれの一種である。

『その影響がどんなものなのかは分かりませんが、身体に悪影響があるわけではないのでご安心ください』

「はあ」

まるで、SF世界のような解説に、頭が付いていかなくなる。

『と、さもありなん、みたいな感じで説明しましたが、実際に平行世界が存在するのかどうかは分かりません。存在することが可能な状況がある、というだけで「実在の世界」であるという確証はありません』

「つまり、仮定だけが存在して、確かめることはできない、つてことだな」

『ええ、まあ、そうですね』

ルースはなんと煮え切らない返事を返した。

『その表現には少々語弊があります。確かめることができないのは無く、確かめてはいけない。これが正しい表現です』

「確かめてはいけない？」

『そうです。われわれの星、いえ、魔法、またはそれに類似する能力を持った世界、もしくはそれ以上の高度な文明が存在する世界。それらでは禁忌として定めているものが幾つかあります』

ひとつは死者蘇生。これは道徳的にも反している。死んだ人間を生き返らせることは奇跡であり、それを行って良いのは神のみ。人間が触れていいものではない。もっとも神なんてものが存在するかは定かではありませんが。と、ルースは最後に付け加えた。

ひとつは時空間、異空間転移。空間を越えるだけならば問題ではないが、それが時を超え、異世界へも干渉するとなると話は別である。時空間、異空間を転移するということは、すなわち歴史を変えるところということ。その場所には存在しないモノが現れただけで平行世界の枝が増えるわけである。一つの世界が増えることにどれほどのエネルギーが使われるのか。そんなものは計り知れないが、現在に存在している無数の世界が均衡を保っているのだとすれば、世界が増えるということは大きくバランス崩すことになる。それは、想像することさえできない。

『と、まあ、平行世界云々、禁忌云々はここまでにしておきましょう。それよりも・・・』

ルースは一呼吸付いて

『あなたのそれは、記憶のすれ違いとは少し違うようですね』

と、また何かよく分からない説明が始まりそうな、そんな言葉で話し始めた。

『記憶が無いというのは、具体的にいつからいつまででしょうか？』

「えーっと、昨日寝てから昼休みまでだから、昨日の18時くらいから、今日の12時くらいまでかな」

『ということは、およそ18時間。睡眠の時間を外して半日ですか』
と言つてルースは黙り込んでしまった。そして数十分。長い沈黙が続いた。

「ねえ、つきクン、この指輪綺麗だね。彼女からのプレゼントとか？」

この沈黙に痺れを切らしたのか、アレスは机の隅に置いてあつた指輪を興味津々に見つめていた。それは、綺麗に箱詰めされていて、全く埃が被つていなかった。

急に話し方が変わったのと、「つきクン」というあだ名をつけられ少し戸惑う。

「ああ、それが。違うよ。それは俺が生まれたときに、親が記念に買つてくれたものだよ」

その指輪には半球形にカットされた宝石が裝飾されていた。乳白色の白い一筋の光が浮かび上がり、雲の間からのぞく月光を連想させる。ムーンストーン。たしか、健康、長寿の象徴だったか。

「ふう〜ん」
そして、なぜか不満そうにしているアレス。

「なんだよ」
「むうん、だつてこんなに大事にしてあるから・・・もつと面白そうな話が聞けると思つたのに」

それはつまり、俺に恋愛話をしてほしうってことか？
「生憎だが、そんな色恋沙汰は全くもって無いからな。へんな期待はしないことだ」

「えー、つまんなあい」
そんなこと言われても、無いものは無いので困る。

『・・・はあ』
不意にため息をつくルース。

『まったく、悪い癖ですよ。身内にならともかく、外でそのような

言葉使いで話されては困ります。仮にも王族であるのなら、その自覚を持つてください」

「はぁーい」

と、アレスは生返事で返した。

「まあまあ、で、なにか分かったことでもあるのか？」

『そうですね、何も分からない、ということが分かりました』

ああ、そうですか。

「じゃあ、何を考えていたんだ？」

『いえ、現段階ではお話しすることはできません。不確定な要素が多すぎます。』

そうですね、今は本来の目的に専念しましょうか』

魔法少年はじめます

サーッと暖かい風が吹く。春先の心地良い風とは違い、夏の訪れを感じる生ぬるい風だ。流れるそれは妙に肌にまとわり付く。

「・・・で、その反応とやらはこの辺りなんだよな？」

道の角を曲がったところで、首にかけられた彼女に聞いた。

あの、とても信じがたい話を聞いた後、ルースはこんなことを言
った。

『さっそくですが、外に出ましょう』

「随分といきなりだな・・・とりあえず理由を聞かせてくれ」

『勿論、ドディックジュエリを探しにいくのですよ』

勿論、と言われても、俺にはとっては勿論ではない。

「そもそも、そのドディックジュエリとやらはどうやって探すんだ？ まさか、こんなに小さな石ころを、町中歩き回って探せって言うんじゃ・・・」

『そうですね、できればそうしていただきたいのですが、恐らくその方法で見つけ出すことは不可能に近いでしょう』

「じゃあ、どうするんだ？」

『ドディックジュエリの魔力を探れば何とかかります。ともかく、いったん外に出て魔力を探ってみましょう』

その言葉に従いこの住宅街にやってきた。ちなみにアレスは部屋においてきた。まだ動くのはつらいそうだ。

なんでもこの辺りに漆黒の石、ドディックジュエリの反応がわずかながら感じ取れるらしい。

家からは歩いて10分もかからない場所。ちょうど学校への通学路の途中にあり、ついさつきも通ったばかりだ。

『この周辺からドディックジュエリのエネルギー反応を感じます』

彼女の言葉は相変わらず淡々としていた。彼女と話をしていると、どうも危機感を感じない。だが、その彼女の態度が昨日のあの出来事のことを思い出させ、今の状況が現実であると思わせる。

「もっと詳しい場所とかわからないか？ 見たところ変わった様子は無いみたいだけど」

やってきたはいいが、異変らしい異変は見られなかった。

『申し訳ありません。反応は感じるのですが、位置の特定は難しいです』

「そうか・・・」

『ドティックジュエリは、本来それだけでは魔力の反応さえ感じ取れないものです。しかし、昨日のように暴走をはじめるとその魔力、エネルギーは一気に増大します。』

「それっておかしくないか？ だって暴走しないと反応は感じないんだろ。だったらなんで今その反応を感じているんだ？」

今、彼女がドティックジュエリの反応を感じているということは、暴走しているということ。あんな怪物が近くにいたのだとしたら、俺にだってわかるはずだ。

「・・・！」

ズンと何か重圧をかけられるような感覚。なにかはわからない。だが、なにかがこの住宅街一辺を覆った。

『ツキミさん、上です！』

急に声を上げた彼女。その指示に従い上を見る。

スツと黒い影が体を覆い、自身めがけて落ちてくる。

「のわっ！」

すんでのところで影をかわし、ザツと地面を転がる。

さっきまで自分のいたところに、ストツと黒い影がきれいに着地した。

「あれは・・・？」

黒い影は昨日の怪物と同じように、黒く禍々しい形をしていた。回りを覆う闇は、まるで揺れる毛並みのように風になびいていた。

を開け目の前の敵に焦点をあわせた。

「主人公を敵に回したこと、後悔するんだな」

右手に握られた彼女をビシッと突きつけた。

『その台詞気に入ったんですか?』

はあ、とため息をつくルース。

「やああああ!」

しかし、そんなことはお構いなしである。

右手に作り出したエネルギー弾を怪物にめがけ投げつける。ヒュンと空を切るそれは、まっすぐに怪物を狙う。

だが、怪物はそれを華麗にヒョイとかわすと、かすりもせず後ろの塀にぶつかつた。ガラスと瓦礫が崩れる音がし、そこには小さなクレーターができてしまった。

「あ……えっと、ごめんなさい」

とりあえず謝っておこう。

その後も何度も怪物を狙うが、当たるどころかまったく見当違いのところへ飛んでいってしまう。そして、辺りにはいくつものクレーターが完成していた。

「だーもう! ちょこまか動き回りやがって」

『下手な鉄砲、数撃ちや当たる。って、わけにはいかないようですね』

「ああ、くそつ、なんかいい方法ないか?」

なかばやけくそになって投げ続ける。しかし、投げれば投げるほどクレーターの数が増えるだけだ。ホントごめんなさい。

『それでは、なにか違う方法で戦ってみてはどうですか?』

違う方法といわれても、戦闘経験のない自分には到底思いつかない。

『ちなみに、私の変形機能は、重火器はもちろん、打撃、斬撃の近接武器。遠距離に対応した弓なんかも対応しています。近代兵器から原始兵器まで何でも取り揃えてあります』

「って、そんなに言われても、どうすればいいか分かんねえよ」

『そうですね・・・それでしたら相手の特性に合わせて、有利なものを選んでみてはいかがでしょう』
「いかがでしょうか、って洋服店で接客する店員さんみたいな言い方で進められても困る。」

「相手の特性に合わせた武器か・・・よし、ならあれしかないな」
考えに考え抜いた結果、ある一つの結論にたどり着いた。そして、構えていた彼女をスツと下ろす。

再び目を閉じる。

まっさらな彼女の中。その中に自身の望む姿を見出す。

「モードチェンジ・・・」

言葉をつぶやく。言葉自体に意味はない。これは自身が魔法発動させるためのきっかけに過ぎない。

彼女の中にあるそれを掴み、取り出す。手に握られたそれをイメージし、

「フォームランシア」

具現化させる。

杖の形であった彼女はまばゆい光に包まれ、イメージされた形へと変化する。

身の丈を優に超える長槍。これを扱えるものがあるとしたらそれは歴戦将のみだろう。自身には過ぎたるものだ。しかしそれを選び取った以上使いこなせなくてはいけない。

矛先は鋭く光り、夕日が照らすそれはその名に恥じぬほど燃え盛っていた。

その紅く燃ゆる炎を敵へと向ける。怪物は向けられた炎を凝視する。それがはつきりと向けられた敵意だと理解する。

「さあ、はじめるとするか　この槍はちいとばかり熱いぜ」
風のごとく一足で間合いをつめる。

「だああああ！」

一突き。

目にも留まらぬ熱風。しかしそれは触れることなく軌跡を残す。その軌跡は熱で揺らいでいた。

「■■■■■■!!」

華麗に回避した怪物は、漆黒の鬣たてがみを揺らし鋭き爪を振り下ろす。

「・・・つく!・・・」

それを槍で弾き、なんとかやり過ごす。

「あいつ　　はやい・・・!!」

「■■■■■■■■■■■■■■!!」

弾かれた怪物はすぐさま反転し、獅子のごとく勢いで牙をむく。

「ちっ・・・!!」

ギインと刃の軋む音がする。

一撃、二撃と猛攻が続く。

「くっそ・・・っらああ!!」

負けじと反撃するも全てがかかわされる。そして

「はあああ、っ・・・はあ・・・」

『大丈夫ですか?』

「大丈夫、そうに・・・はあ・・・見える、か?」

もともと運動すらしていなかった人間だ。いくら魔法を使えるようになったからといって、身体能力が上がるわけではない。怠けきったこの体はただの数合でへばりきっていた。

「くっそ、槍なら速さで負けないと思ったのに」

『なぜそう思ったのですか? これだけの長い槍相当の長身にしか扱えません。あなたの力では槍の全てを活かしきれませんよ』

相変わらずのしれっとした声で言った。遠まわしに身長が低いと言っているのか? そうなのか!?

「あーもう! わかってるって」

そんなことは百も承知だ。それでもなおこの槍を選んだ理由がある。

この身の丈をはるかに超えるリーチ。相手の武器キバはこれには遠く及ばない。ならば相手の攻撃が届くことは無いと。

実際、奴の攻撃は届いてはいない。反撃されても全てを防ぎきっている。

問題は防御面ではなく攻撃面。疾風のごとき一撃を放つてもそれはかわされてしまう。

「どうしろってんだよ！」

怪物の猛攻は続く。ただそれを防ぐことしかできない。

反撃しようにも当たらなければ意味が無い。

なにか違う別の攻撃方法があれば・・・

「・・・・・・・・」

別の攻撃方法？ 何を言っているのだ俺は。たくさんあるじゃないか。俺はいま魔法使いなのだから。

律儀に槍の戦い方で戦う必要は無い。

「ルース、この形態でも魔法は使えるよな？」

『私を誰だと思っているのですか？ 戦闘に特化されたグレータですよ。たとえどのような形態であろうと、攻撃魔法は使えます。というか、攻撃魔法しか使えません』

うん、それははじめて聞いた。あとグレータってなに？

彼女に聞きたいことが増えたが、今は置いておこう。

「なるほど、それが聞けただけでも十分だ」

なにも、攻撃を届かせる必要は無かった。奴はむこうからわざわざ向かってくるのだ。ならば迎え撃てばいいだけのこと。ただしそれができていなかったから苦戦していたわけだが、魔法が使えるとわかった今は（気付くの遅い）違う。

「さあ来ない又公・・・熱いのをお見舞いしてやるぜ」
槍をもつ手を天へと掲げる。

『この形態で使える魔法を教えてくださいませんが大丈夫ですか？』

「問題ない！ そんなものは気合で何とかする！！」

はぁ、と、再びため息をついたルース。

掲げた槍をブンツと大きく回転させ、徐々に加速させていく。空を裂く熱槍は轟と風を鳴らし暴風を生む。

吹き荒れる熱風。生み出された熱の嵐は画面をゆがませる。

暴風は体を包み天へと上る竜巻へと変わる。

『のわっ！ ちょ、無理やりすぎ！！ ってか回しすぎいいいい！』

「ぬうおるああああ！！」

巻き上がる旋風は一気に膨張し、あたり一帯を壊しつくした。

道路のコンクリートがえぐれ、塀も砕かれ、住宅のガラスは砕け散り、瓦が宙を舞う。

怪物も例外なく嵐に巻き込まれ、瞬く間に消滅した。

「ぜえ、はあ・・・や、やってしまった・・・」

住宅街はもはや見る影も無く、廃墟となってしまった。

『あああ、目が、目がああ！』

そしてルースはいろんな意味で逝ってしまった。

「な、なあ、これってどうしたらいいと思う？」

『あう、ど、どうもしなくても大丈夫でふう』

若干ろれつが回らなくなっている。本当に大丈夫なのだろうか。

「どうということだ？」

『ま、まあ、見ていて、ください』

とルースが言い終わる前に、なにかが起こった。何がどうなったか理解できなかったが、いま目の前に広がっているのは崩壊する前の住宅街だった。

「な・・・！！」

一瞬だった。いやまばたきすらしていない。

『これは恐らく結界です』

「結界？」

『いままで私たちが戦っていた場所は、ドディックジュエリが作り出した結界内だった、ということです。その結界内は現実から切り離された場所。つまり、こことはまったく無関係の場所に私たちはいたわけです』

それってつまり御都合主義ってことか。

「でも、結界を張ってるようなところは見なかったけど」

怪物が現れたときから、相手はそんな様子を一度も見せてはいなかった。だとしたらいつ結界を張ったのだろうか。

「奴が現れる直前、なにか感じませんでしたか？」

「そうか、あのとき……」

そう、あいつが現れる直前、どこからか重圧をかけられるような感覚を覚えた。

「恐らくそれでしょうね。奴が現れる直前、いままで感じなかった魔力が一気に増大したのです」

「……」

「なにはともあれ、二つ目のドディスクジュエリを確保できました」
全てが元通り（実際はなにも起きていない）になった住宅街の道端に、漆黒に光る小さい石が落ちていた。それを拾い上げ、ポケットへと入れる。

「ご苦労様です。今日も魔力を大量に消費したと思いますので、早めに休息されることを提案します」

「ああ、そうするよ」

ルースに言われ、急にドツと疲れが襲ってきた。

こりやまた記憶が飛ぶかもしれない。

あまりしつかりとしたとはいえない足取りで、家路に着くのであった。

「あ、お帰りなさい。どうだった？」

部屋に戻ると、薄暗くなった部屋でアレスが出迎えた。暇を持って余っていたのか、今はもう使わなくなった鉛筆削りの取っ手部分を、ひたすらに回し続けていた。

扉の横にある電気のスイッチを押し、ベッドの上へ腰掛ける。

「結果は上々、といったところですかね」

「へーそうなんだ。やっぱりルースの言うとおり素質があるのかもね」

「いやあ、それほどでも・・・」

普段から褒められ慣れていないせいか、どのように反応してよいのか困る。少なくとも悪い気分ではない。

『そうですね、素質は十分あります・・・十分すぎるくらいですが』

彼女は最後に何かを付け足したが、その言葉は聞き取れなかった。

『いえ、何でもありません。・・・素質「は」あるというだけなので、実力は下の下ですね』

ひどい言われようである。

「結果は上々じゃないのかよ」

『勿論、結果だけならです。あなたの戦い方を評価するなら最低レベルでしょう』

「・・・んな!?」

『とは言いましたが、一般の、それも魔法が存在しない世界のあなたにしては上出来です。これならば、ドティックジュエリの収集も予定通り行うことができるでしょう』

褒めているのか貶しているのか、一体どっちなのだ。

「よかったー、これで一安心だね」

『・・・マスター、元々はあなたがあんなハマさえしなければ、何の問題も無かったのですよ。そもそも、あなたは一国の姫であると同時に、国をいえ、星を代表する戦士なのです。前にも言いましたが、あなたには自覚が無さ過ぎます。その辺のこと、よくお考えになって下さい!』

「は、はい、以後気を付けます・・・」

アレスの犯したハマというものが少し気になったが、それを聞く気にはなれなかった。よほど疲れているのか、眠気が一気に襲い、少しでも早く眠りにつきたかった。

『ツキミさん、疲れているのなら休まれたほうが良いですよ』

そんな俺の気持ちを察したのか、ルースは珍しく優しく優しげな声で言った。

「ああ、そうするよ」

その言葉に甘え、深い眠りにつくのであった。

束の間の安息

「ふあ、はあ〜」

盛大に伸びをし、あくびをする。

昨日の疲れが残りすぎている。少し動いただけで節々は痛いし、そこらじゅうが筋肉痛である。

「にしても・・・遅いだろ」

何が遅いかというと、もちろん・・・

「つきちゃん、おはよ〜！」

こいつである。幼馴染である。入江舞である。

「待ったあ？」

「待ちまくったよ！」

午前8時20分。

これがいまの時刻である。あと5分でホームルームが始まってしまふ。どう考えても間に合う気がしない。

「ごめんごめん、今日はどのリボンにするか迷っちゃってえ〜」

今日は昨日とは違い、水色のリボンをしていた。

「迷っちゃってえ〜、じゃねえよ！まったく・・・」

昨日、舞からメールがきて「明日の朝、7時50分に家の前で待っててねえ〜」とのことだったので、来てみればこれである。

「ほら、早く行くぞ」

舞の手をクイツと引つ張り走り出す。

「あ、ちよ、つきちゃん、待って〜」

「待てね〜よ。どう頑張っても遅刻するだろ」

「じゃあ、遅刻すればいいじゃん。走るの疲れるし」

こいつのその考え方は、世間に悪影響を及ぼすだろう。

「・・・あ・・・」

そのとき、昨日出会った老犬が路地裏から出てきた。

「あ、昨日のワンさん」

老犬は目の前にやってきて、

「ワン！」

とだけ言い残し、路地裏へと帰っていった。

「なんだったんだ？」

「さあ？」

二人で顔を見合わせ首をかしげる。

「つと、こんなことしてる場合じゃなかった。ほら！」
催促するように手を伸ばす。

「え、結局走るのぉ」

悪態をつきながらも一緒に走る舞。

こうして、束の間の日常に戻って行くのであった。
その後、あの老犬を見たものはいなかったという。

月の少女

静かにゆれる風が深海そらを流れる。

深海には無数に輝く星たちが、人ではとても考えられないほどの時間をかけ、この地球に光りをもたらしていた。

そして、この地球に最も近い星。月からの光は一人の少女の髪を明るく照らした。月光の照らすそれは、まるで吸い寄せられるかのように光を含んでいた。

ビルの屋上から外界を見下ろす少女の視線は空を指していたが、しっかりと何かを見据えていた。

『あー、やっぱり来るのが遅かったみたいだね』

この静かな夜に響いた声は、少女のものではなかった。

『しかし、なんていうか、こっちはこっちであれだけど、相手さんも偉いモン持つてるねえ。こりゃ、ちよいとばかり辛いかもよ？』

少女の胸元からの声。そこには月を象った黄金色こがねに輝く首飾りが掛けられていた。

少女は首飾りの声の主に話しかけたが、その声は夜の風に消えるほどに細かった。

『だね。まあ、しょうがないよ。遅れたぶんはこれから取り返せばいいさ。で、どうするんだい？ 何個かソルのお姫様に』

持つてかれちゃったみたいだけど』

顔色一つ変えず、少女は話し続けた。

『ふう〜ん。でも、場所が限られているし、すぐに鉢合わせるかもね』

『そう、ま、それはそれで良いか。じゃあ、そろそろ休も？ 今夜は少し冷えそうだよ』

その言葉に少女は静かにならずき、夜の街に消えていった。

隣の席

『つまり、どういうことかというのと、使用者の魔力を効率よく変換させる、ということですよ』

首下からする声を右から左へと聞き流し、別のところへと耳を傾ける。窓の外からは、元気よく部活動の朝練に勤しむ学生たちの声がしていた。

ルースの魔法使い講座が始まり、約十分。はやくも俺の頭の中はぐちゃぐちゃになっていた。言いたいことは分かる。だが、専門用語が多すぎてなんのこっちゃさっぱり分からん。

午前8時10分。

今日はいつもより早く学校に着いた。

いや、いつもはこの時間には自分の席について、佐藤や鈴木らオタク軍団と情報交換（と言う名の雑談）をしているのだ。しかし、最近その予定を狂わされつつある。

原因は、入江舞。昔から色々と付きまとっていたが、最近になりさらにそれが増えた。朝と帰りは必ずと言っていいほど家の前、教室の前で待ち伏せしているし、昼休みはおるか休み時間毎に教室に侵入する幼馴染っぷりである。

いったい何がしたいのだ、といわんばかりにまとわりついてくる。いつしかクラスの皆からも同情の目で見られる始末。

あるとき幼馴染萌の奴が「幼馴染って憧れるけど、アレはさすがに無いわ」とまで言うほどである。

だが、今日はいつがいない。風邪を引いたとかなんとかで学校を休むそうさ。他人の不幸を喜ぶのはいささか問題があるが、久々にゆっくりできそうさ。

『そもそも、我々が使う魔法は自身の魔力をそのまま相手にぶつける、というもの。魔力を体内から放出するだけなら簡単ですが、それは単に自然の中に魔力を流し込んでいるだけ。魔法として扱うに

は魔力を変換する必要があります。ただし魔力変換機なしで魔法を
発動させる場合、その過程に体力、魔力を多く消費します。そこで
我々^{ゲレータ}を使うことにより変換の過程を自身の体ではなく、我々^{ゲレータ}が行う
わけです。』

そして今日はいつものヲタク軍団では無く、パートナーのルース
とイヌもどきに変身しているお姫様のアレスの二人が話し相手にな
っている。

ルースからはいつの間にか「マスター」と呼ばれるようになった。
うん、なんか悪い気はしない。

「普通のゲレータはそれだけだけど、ルースいろんな武器に変身で
きるんだよ」

さて、彼女たちを学校へ連れてくるにあたって、多少問題が発生
した。ルースは首飾りなので問題ないのだが、アレスの場合どう見
ても未確認生物なので、他人に見つかる騒ぎが起きてしまうだろ
う。

本当は連れてくるつもりは無かったのだが、どうしてもついて行
くと聞かないので、無理やり鞆の中に詰め込んできた。意外にも俺
の鞆の中は居心地が良いらしい。

『しかし、その場合使用できる魔法に限りができます。特に剣や槍
といった近接武器などは行使可能な魔法が極端に減少します』

ちなみに普通に話す^{テレパシー}とバテしてしまうので、念話を使って会話して
いる。テレパシーって便利だね。

「一番多くの魔法を使えるのが砲撃モード。何が使えるかっていう
と、弾幕とかビームとかほか色々……って、つきクン聞いている
？」

「え、ああ、聞いてるよ。まあ、かなり分かりにくい説明だが」

アレスのそれは説明になっ^ていていない気がする。

『アレス、やはりあなたは黙っ^ていて下さい。ちょっと邪魔です』

「むう、私ヒロインなのに……」

あまりの雑な扱いに頬を膨らませるアレス。

ヒロインが不遇なのはよくあることだ。

「先ほどアレスがおっしゃったように、もっとも多くの魔法が使用可能になるのは砲撃モードです。これはマスターであるあなたの魔力を、変換、放出させるのに一番効率がよい構造をしています。ですから初級から中級、上級まで幅広い魔法が使用可能となります。先日あなたが使った魔法は、そのごく一部ということですよ」

「ふうん、ま、ルースがどういうモノなのか、っていうのは大体わかったよ」

二人がいる方向とは、まったく別の方を向いて返事をした。

理解したのは、彼女がどのような機械であるか、という事であって、何をどうしてこうするからこうなる、といった専門知識はまったく理解していない。

「そうですか。それはよかったです」

相変わらずの無感情な声である。

「そうそう、もうひとつ聞きたかったんだけど」

窓の外に向いていた視線を教室内に戻し、思い出すように声を出した。

「なんででしょうか？」

「お前たちが地球に来た理由ってドディックジュエリの回収なんだよな。だったらさ、ルーナからも誰か来てるのか？」

彼女は若干の間を置いて、

「なぜですか？」

と短く聞きなおした。

「いや、なぜっていわれても・・・」

前回のドディックジュエリ回収のときも、ソルとルーナ両国から一人ずつ選ばれたわけだから、今回もそうではないのか、と思っただけである。

実際、一人でこれをやるのは大変だと思う。というより、もしも一人であるなら目的を達成できない。ドディックジュエリは一箇所に集めると飛散する。これは確認された事実ではないとルースは言

「うわっ！」

思わず普通に声を出してしまう。出してからでは遅いのだが、思わず口を手でふさぐ。キョロキョロと周りを見るが、誰も声には気付かなかったようだ。

気付けばいつの間にか、ホームルームの時間まであと数分となっている。教室内のざわつきがピークになる時間だ。そのおかげで俺の声は聞こえなかったようだ。

『あの時アレスは……』

そして、何も無かったかのように続けるルースである。

『おや？ マスター、呼ばれていますよ』

しかし、淡々と話を始める彼女であったが、途中で話を切った。

「高村君、おはよう」

彼女たちに集中していた意識を一旦教室に戻すと、ちょうどそんな言葉が右隣から聞こえた。その声のした方向を見ると、そこには一人の女学生がこちらを見ながら椅子に座っていた。

「ああ、千草か。おはよう」

その姿を確認すると、俺はいつものように挨拶をした。

『ご友人ですか？』

「そうだな、友人と言っかなんというか、ただのクラスメイトだ」
ルースの問いに、曖昧な答えをした。

千草^{ちくさななせ}。昨年も俺と同じクラスだった。出席番号が並んでいたということもあり、話しかけることが少々あった。といっても、友達という関係でもなく、そんなに仲がいいわけでもない。

第一印象は良くも悪くも普通の女の子。あまりパツとした印象はなかった。しいてあげるなら、腰まで届こうとするツインテールが目に残った位である。

しかし、彼女が剣道部に所属していて、エースと呼ばれる存在だということを知ったときには印象がガラッと変わり、いろんな意味で近付き難くなった。

ともかく、友人と呼ぶには仲が良くなく、他人と呼ぶには仲が良

すぎる。そんな関係である。

「ねえ、どうしたの？　なんかボーっとしてたみたいけど」

ついさっき来たばかりなのか、千草は机の上に鞆を置くと教科書を取り出し引き出しの中に入れた。

「え、あ、いや、そ、そうか？　ま、まあ、気にすんな」

なんとか誤魔化そうとするも、顔を引きつらせながらぎこちなく答える。

「ん、そういわれるともものすごく気になるんだけど・・・ま、いつか、あんまり興味ないし」

疑り深く聞いてきたかと思えば、割とあっさり退く千草であった。それはそれでなんだか傷つく。

「ごめんごめん、冗談だよ」

彼女は、軽く笑うと鞆を手に取り机の横にかけた。

「で、本当は何してたの？」

と聞かれたら聞かれたで、なんと行って良いのか回答に困る。

「えーっとだな、これはなんと説明したらよいものか・・・そう、妄想だ！」

何かとんでもないことを口にした気がする。言うてからでは遅いが後悔しまくりである。普段なら間違っではないが、今回は違うと断言したい。

「・・・あーっと、今のは聞かなかったことにする」

千草は、そっと席を遠ざけた。

「あ、ちよ、誤解するなよ！　決して変な意味ではない！」

「うん、大丈夫。誤解してないから」

と言いつつも、さらに机を離す千草である。

「いや、絶対に誤解してるだろ！　言うておくが俺の妄想は真面目なものだ！！」

「ごめん、意味わかんない」

自分自身でも言っていることが意味不明なことは理解している。

だが、これが事実なのだ。他に説明のしようがない。

「高村君、これ以上はしゃべらないほうがいいと思う。私の中でのあなたのイメージが崩壊していく」

「ま、まで！ そんな哀れむような目で見ないでくれ」

「……もういいよ、私、ちゃんと分かっているから　　っ

「！」

こうして俺の一日は、誤解されたまま始まるのであった。後で誤解を解くも、どれ程の時間が掛かったかは聞かないでほしい。

「はあ……」

放課後。人気の少なくなった教室で一人溜息をつく。

朝に差していた太陽の光りは夕日となり、教室内を赤く染めた。

「どうかしたの？」

溜息後の小さな沈黙のあと、アレスが鞆の中からひょっこり頭を出して聞いた。

「どうしたもこうしたも、今日の出来事があまりにも出来過ぎていて恐ろしいんだよ」

『今日の、ですか。具体的にはどのような？』

ルースにしては珍しく、興味ありげに言った。

「二人も見てただろ、今日の俺と千草のやり取りを」

『お二方のやり取りですか？』

「何か変わったところでもあったかな？」

ルースとアレスの二人は、声をそろえて疑問を口にした。

「有りも有り、大有りだよ」

そう、あれは一時間目の授業中の出来事であった。

今度は隙間から上半身を乗り出し、無理やり脱出しようと試みる。しかし、羽が引つ掛かっているのか、なかなか下半身が出てこない。いや、出てこなくていいです。

『では、まずは事の発端から解説しましょう』

ルースはルースで、相も変わらず淡々と話を進める。

『……ふむ、マスター、また呼ばれていますよ』

と、またも話を途中で、というか初っ端から中断した。そして、なぜかルースは不機嫌そうにしている。

また呼ばれている、ということは千草だろうか。そう思い、千草のほうを振り返ってみる。

「高村君。おい、高村くん」

まあ、予想は当たっていたわけで、彼女はひそひそと周りには聞こえない様に、というかほとんど声にはなっておらず、口パクで俺の名を呼んでいた。

「どうしたんだ？」

彼女に合わせて自分も口パクで応えた。

「床に消しゴムが落ちてるよー」

「消しゴム？」

言われて床を見ると、確かに消しゴムが落ちていた。机の上を確認すると、消しゴムは無くなっていた。

さっきアレスが暴れたせいで落ちたのか。

「取るうか？」

「いや、いいよ。それくらい自分でやるよ」

とは言ったものの意外にも遠くまで転がり落ちていて、微妙に手が届かない。

「ふん！」

勢いをつけて、ぐいと手を伸ばす。

あと少しで手が届く。

そこまできた。

瞬間。

ばし、と二人の手と手が触れ合う。

「あっ………」

「う、ううん………」

赤面する二人。彼女の頬は熱を帯びるように赤く染まる。それがとても可愛らしくて、そして、愛おしかった。

「……それは、つつこむべきなのでしょうか？」

一通り話し終えると、ルースの冷たい言葉が待っていた。

「そうやって冷静に返されると、俺もどうしていいかわからん」

「で、結局どこがおかしかったの？」

アレスは首をかしげ聞いた。

「お前には分からののか！ あの場面の重大さがっ！ あり得そうであり得ない現象。消しゴムが落ちることがあっても、二人の手が触れ合うなんて事は無い。あまりにもできすぎている。これはまさに、消しゴムが落ちてそれを拾うとしたときに「あっ」となる現象だ」

「そのまんまじゃん」

「そう、そのままだ。だが、これがどれほど重要な出来事であるのか、お前たちは理解していない」

たまたま体育の授業で、たまたま千草が走っていたところに、たまたま俺が気づかずにつつき、たまたまこれなんてエロゲ状態になったこと。

「それは一体、どういう状況なのでしょうか？」

「今でも忘れない。この手に残る感触を………」

「こ、答えになってない」

二人は、何を言っているのだコイツは、といった感じだ。

「まあ、分からなくても仕方ないか」

考えてもみれば、二人は女性で、尚且つ異星人である。この地球の文化を理解するほうが難しいかもしれない。この地球の人間でも理解できる人は少ないのに。

「まあ、簡単に説明するとだな、俺と千草の間に現実では起こりえない現象がたくさん起きているわけだ」

「起こりえない現象。それが、さっき言ってたこと？」

アレスは首を傾げ聞いた。

「そう。消しゴム落として、それを拾ってもらって、手が触れ合う。そんなことがそうあると思うか？ いや、無いね。仮に起こったとしても、それはどちらかが意図してやらない限り起こりえない。もしそんな状況になったら、手が触れる前に腕を引っ込めるだろ」

『結局のところ、その起こりえない現象が起きてしまったことにより、何か問題があるのですか？』

「いや、特に無い。むしろ、俺としては貴重な体験ができてよかったと思っている」

「こんなことは、一生の内に何回も起こることじゃない。それは、奇跡に近い。」

「いや、待てよ。今日の出来事がもし一生分の出来事だとしたら、それはものすごく損をしているのではないか？ うーむ、これはマズいな」

教室の片隅で、一人思い悩む。

「そんなに悩むことなのかな？」

『さあ、どうなのでしょう』

に行くぞ」

と言うと、佐藤は腕を握り引つ張った。

「っておい！ ちょっと待て、何で俺も行かなきゃいけないんだよ！」

「決まってるんだろ。俺たち……親友だろ」

いや、それは関係ないと思うんだ。

「で、鈴木は付いて行くのか？」

隣で静観している鈴木は、一体どうするのだろうか。

「俺は付いてくよ。なんか面白そうだし」

と、鈴木は笑顔で言った。

面白そうっただけで付いていくなんて、なんて無謀な。

どちらにしろ、鈴木が行くのなら、俺が行く必要は無いと思うのだが。

「このミッションはなあ、お前なしで達成することは不可能なんだ」

「なんでだよ！ 俺、全然カンケーねえじゃん」

関係ないどころか、かすりもしていない。

「お前が一緒じゃなきゃ意味が無いんだ」

いや、だから何故なのだと聞いているのだが。

「そりゃあお前……恥ずかしいからに決まってるだろうが！」

それは威張って言うことなのだろうか。

「恥ずかしいならネットで予約しろよ」

「宅配テロが起きたらどうすんだよ」

じゃあもう買うなよ、と言いたい。

だがしかし、少し気になることがある。それは、いつもの佐藤とは明らかに違うことである。

佐藤はオタクとして生きている。そしてそれを何一つ恥じていない。例え周りから何と言われようと、自分の好きなものに一生懸命になれない奴よりは断然マシだ、とは彼の口癖である。

そう、佐藤は自他共に認めるオタクだ。普段の佐藤ならば恥ずかしいなどという言葉は絶対に口にしない。

「お前は、自分が嫌っていた人間になり下がるのか！」

「うっ……」

「それでいいのかよ。自分のやりたいことができない人間になっていいのかよ。」

お前もつと自分に自信を持っていたはずだ！ アニメを愛してはたはずだ！ 彼女たちを愛していたはずだ！ それを裏切ってもいいのか？ 違うだろ？ 彼女たちが求めるのなら、それに応えなくちゃいけない。そうだろ！？」

「……そうだな、そうだよな。俺が間違ってた。お前の言うとおりだ。俺はただ単純にアニメが好きで、それ以上でもそれ以下でもない。」

すまない。カッコ悪いところ見せちまったな。お前のおかげで気付けたよ、何が大事なのか、ってな」

佐藤はドアの前に行きそこで止まった。

「俺、行つてくるぜ！」

と、勢いよくドアを開け走り去っていった。

「……はあ、ものすごい疲れた」

「うん、面白かったよ。じゃ、俺も行くから、またな」

鈴木は手を振ると佐藤の後を追って言ってしまった。

「俺たちも行くか……」

教室を後にし、下駄箱で靴を履き替えそのまま学校の外へと出た。

「うう、途中から何を話しているのか訳がわからなかった……」

アレスは頭を抱え唸っていた。分からない方がアレスの身のためだと思う。

『早速ですがよろしいでしょうか？』

今までの出来事が無かったかのように、ルースは切り出した。

『これから、駅前へと向かっていただきます』

「駅前？ なんでまたそんなところに」

『これから、ドディックジュエリを探してもらおうと思います。かなりの手間がかかると思いますが……』

それは、言わずもがな、である。探し物はあの小さな石ころだ。範囲がこの市内全域だとして、それがあと十個。魔力反応というやつも正常な状態であるなら見つけることはできないらしい。それはつまり、この市内（面積はおよそ200平方kmくらい）から豆粒みたいに小さな石を、自力で歩いて探し回らなければいけないということである。

『反応が出るまで待つのも一つの手段ではありますが、それは暴走するまで待つということです。最も確実な方法で、最も危険な方法ですが、それは避けるべき行動です。できるならば、暴走する前に回収したいと思います』

「別に探すのはいいけど、何か方法があるわけでもないんだろ？」

『ええ、地道に探すほかありません』

これは、なかなか骨の折れそうな仕事だ。

「まあ、とりあえず行くか」

帰り道とは逆方向の、駅前へと向かう道。ここは住宅地一帯を抜けると、大きな橋がある。山から海へと流れる大きな川が、市全体を横切るように流れている。川の西側が郊外、東側が都市部となっている。駅があるのはこの橋の向こう側。主な移動手段は徒歩、もしくはバスのみである。

徒歩は時間がかかる。バスは時間に制限される。自転車があれば快適なのに、と常日頃思う。今はバスの時刻が中途半端なので、歩いていくことにした。

「ところで、どうして駅前なんだ？」

橋を渡りきったところでルースに質問をした。

『簡単に説明すると、一番反応を感知し難い場所だからです。昨日、この地域一帯の魔力反応を探ってみたところ、駅前に様々な魔力反応を感じました。』

これだけの魔力反応がある場所でドディックジュエリの暴走が起こったとしても、魔力反応が微弱である場合、すぐに発見すること

はできません。近くにいれば、何とか判別は可能ですが、遠く離れた場所からの感知は難しいでしょう」

「つまり、その様々な魔力反応が邪魔だから、できるだけ近くにしよう、ってことか」

「そうです。それに、その魔力反応は朝とこの時間帯に多くなります。ですから、これから放課後は、できるだけ駅前へ向かいたいと思います」

「えーっと・・・毎日？」

「一応「できるだけ」と言いました」

ルースはやけにそこを強調したが、それはつまり、絶対ということとで間違いないのだろう。

「でも、なんでその時間帯だけ魔力反応が多くなるのかな？」

鞆の隙間から外を眺めていたアレスが小首をかしげていた。

「ああ、たぶんそれは、その時間帯に人が多くなるからだよ」

朝とこの時間帯、つまり夕方に魔力反応が集まるということは、恐らくその正体は通勤、通学途中、帰宅途中のサラリーマンや学生たちだろう。

「ラッシュ時には駅前にたくさんの方が集まるからな。それはもう数え切れないくらいだよ」

「へえ、そんなに人が集まるんだ」

アレスは頷き、そして外を眺めていた。関心があるのか無いのか・・・

「魔力はヒトそれぞれに色がありますが、それはドディックジュエリにも言えます。全く同じ色になることはあり得ませんが、限りなく近い色や同魔力量になると判別が難しくなります」

「ってことは、近くにいても反応に気付かなかつたりするの？」

「あり得ない話ではありませんね。実際に、前回のドディックジュエリ回収時にも感知が遅れて、あわや大惨事になりかねない事態が起こりましたから」

「ま、マジでか？」

「マジです。しかし、事前に結界を張っていたため、事なきを得ましたが……」

「そういえば、前にも結界の話が出たけど、一体どういうものなんだ？」

「そうですね、今後のためにも少し説明しましょうか」

結界とは、今ある場所と全く同じ形容をした場所を作り出すこと。その空間は現実とは無関係な存在であり、その全てが借り物の姿である。外部から視覚的に認識は不可能だが、存在自体を確かめることは可能。外部からの物理的干渉は実質不可能だが、内部に侵入することは可能。

「と、まあ、こんなところでしょうか。あと、あの变身シーンもこの結界が関係していますが、厳密には異なるものですので、ここではやめておきましょう」

「とりあえず、結界が張られていれば大抵のことは何が起きても大丈夫ってことか」

「はい、ですがマスターでは、いえ、私の力を通してのあなたの力では、結界を張ることはできないでしょう」

「どういうことだ？」

「先程も話しましたが、私は攻撃特化のゲレータです。本来、使用可能な魔法は攻撃のみで、防御魔法は一切使えません。ですから、結界という分類上は防御魔法の上位に位置するものを使用することはできないのです」

ルースは言い切った。しかし、先日の戦いで確かに俺は防御魔法を使って怪物の攻撃を防いでいたはずだ。

「じゃあ、俺が使ったアレは何だったんだ？」

「何でしょうね？」

ルースはけだるそうに言い放った。

「あれは、私にも分かりません。本来あり得ない現象です。今まで例外など存在せず、防御魔法を使用した者はいません」

つまり、使用できない以前に、使用したという事実がすで

にあり得ないということか。

「ま、考えても分かんねえもんは分かんねえか」

『……そう……ですね』

なんだか引つかかるような言い方をするルース。

『いえ、何でもありません……さあ、早く行きましょう。こうしている間にも危険が迫っているかもしれないから』

ルースはまた、何かを考えている様子だった。その様子になんとも煮え切らない自分であった。

約十分後。

駅前に着いた俺は、事の大変さを未だ理解していなかったと悟った。

別にここは都会つてわけじゃない。それでも、この人の多さに愕然とした。歩道を闊歩する学生やサラリーマン。車道には車の渋滞が何列にも渡つてできている。普段ならば、同じ時間帯にここに来ても驚きはしないだろう。しかし、今は状況が違う。この中から、あの小さな石ころを探さなければいけないのだ。

『なんの反応も無しに、この中から探すのは難しそうですね』
『そんな人ごとみたいに言わないでくれ。』

『とはいえ、反応が出て困りますけどね』
『そう、それが問題だ。』

こんなにたくさんの方がいる中で暴走でもしてみる。パニックどころの騒ぎじゃない。

『とりあえず……』

『とりあえず？』

『テキストに歩きましょうか』

「つておい、そんなにいいのか？ こうした方がいいとか、ちょっと何かあるだろ」

『それが無いから困っているのですよ。それに、ここ地形は大体把握しています。なにぶん十年以上も前の話なので、あまり当てに

なりません。ですので、ここはマスターにお任せします』

お任せします、と言われてもどうしたら良いのやら。

『人の通りが多い場所、もしくは密集する場所。このような場所を中心に回っていきましょう。最終的にはこの近辺、全ての場所を回れると良いのですが……』

「人通りが多い場所か……」

ルースに言われ、この駅周辺の地図を頭に思い浮かべる。いくつか心当たりはあるのだが、なにせ時間が時間だ。どこも人が多いことには変わりはない。それに、この辺り一帯を全て回るには一日では足りないだろう。一体どうしたものか……

『そこまで難しく考える必要はありません。そもそも、こんなに広い場所でドディックジュエリを見つけ出せるとは思っていませんし、なにより、前回の探索時も、一度も暴走前に見つけることはできませんでしたから。今、私たちがここですべきことは、ドディックジュエリの暴走時に素早く回収できるよう対策することです。これが、今できる最善の策。できれば暴走前に見つけ出したいですが……』

ですので、この近辺の地形を教えていただけだけでも、とても助かります』

「うーん、そうだなあ、じゃあ、まずは商店街のほうから行くとするか」

特に何か考えがあるわけでもないが、なんとなく商店街に行こう、そう思い歩みを進めるのであった。

「おお、すごい。美味しそうな食べ物がいっぱい!!」

商店街に着いて早々、感嘆の声を上げるアレス。

アレスの言うとおり、ここには飲食店がたくさんある。他にも八百屋、果物屋、老舗スーパーなど、食に関する店がずらりと並んでいる。勿論、食以外にも着物店、洋服店などの衣類関係、畳屋なんかもあったりする。

駅の周りには高層ビルやマンションが立ち並び、めまぐるしく姿を変えていくが、この商店街は昔から変わることはない。小学校低学年くらいまでは、母に連れられよくここを訪れていたが、最近はめつきりなくなつた。母自身もここを訪れる回数は減つたようで、隣にある大手デパートへと買い物先を変えつつある。

客数は減つたと言うが、まだまだ活気があるし、隣のデパートにも十分に負けていないと思う。

「……！ ねえねえつきクン、あれは何!？」

と、驚くような口ぶりでアレスはあるものを指差した。

商店街の隅に、小さく経営するとある屋台。そこからは、焦げた甘い独特な香りが漂ってくる。じゅう、と音を立て、流し込まれる生地。それは、まるで魚のような形をしていた。生地は甘い餡子を包み込み、外はカリカリ、中はモチリしている（と、看板に書いてある）。そう、鯛焼き屋である。

「ん？ ああ、鯛焼きだけ……そっちの星には無いのか？」

「ええ、ガラシアには、あの「タイヤキ」というものはありませんね」

アレスにかわつてルースが答えた。

「そもそも、「タイ」なるものがガラシアには生息していませんので……」

言われて納得する。異なる星同士である。大きく生態系は異なっているのだ。似た生物は存在しても、それを同じ呼び名で呼ぶなんて事は恐ろしい確立なのだろう。

「？ 何で日本語が話せるんだ」

ふと、思い出すように聞いた。当たり前のように話をしているが、異星の言葉が同じなんてあり得ない……と、普通ならば出会つた時に気付く疑問に、今更ながら気付く。

「なぜ、急にそんなことを聞いたのかは問いませんが、経緯などを説明するとややこしいので、結論を説明します」

彼女らには言語翻訳機というものが備わっているらしい。それを持

っている者は、国あるいは星が異なっていて言語が全く通じなくても、互いに意味を理解できる。これは、高度な文明を持つ星にとっても重要な機能であり、言語翻訳機があるからこそ星間の交流ができるのだ。
だそうである。

もつともな理由を聞いたが、こちらにとってはご都合主義にしか聞こえない。ただし、胡散臭く聞こえてしまうだけで、信じないわけではない。

「へえー、便利な機能だな」

と、関心していると、

「……」

物欲しそうに鯛焼きを見つめるアレスを発見した。

「はあ、しゃーない、一個買うか」

自らの財布と相談した結果、一個くらいなら大丈夫だろうという結論にたどり着いた。

「おじさん、鯛焼き一つ」

「はいよ」

お金を渡し、紙に包まれた鯛焼きを受け取る。

「熱いから気を付けな」

「ありがとう、おじさん」

受け取ったそれを、鞆の中に放り込む。

「ほら、その身体だったら一個で十分だろ？」

「つきクン……！　ありがとう。この恩は一生忘れないよ」

と、言った途端に鯛焼きにむしゃぶりつくアレス。

「……」

「どうしたんだ、急に黙って」

『いえ、ただ、昔のことを少し思い出していました』

「昔のこと？」

『ええ、今から十六年前、アレスの母、ヴァレンティーナ王妃もここを訪れた際に、タイヤキを食っていました。それを少し思い出し

ていまして……」

ルースは昔を懐かしむような、そんな声で話した。

「こんなことを話している場合ではありませんでしたね。さあ、行きましょう」

珍しく感情のこもった声で話したと思ったら、すぐにいつもの淡泊な彼女に戻っていた。

「……なあ、分かったことだけど、全然見つからねえな」

この商店街に着いてから約二時間。入り口の看板から念入りに調べ続け、そろそろ出口に着こうとした所で足が限界に近づいてきた。それもそのはずである。何しろ、同じ場所を何度も行ったりきたりして、さらには地面にへばりつき隅々まで探したのだ。周りからは変な目で見られるし、もう散々である。

「もともと見つかるとは思っていませんでしたが……」
そう言われると、すごくやる気がなくなってくる。

「それに、もうこんな時間だ。このままやって見つかるとも思えないし、続きはまた今度でいいんじゃないか？」

気付けば辺りは薄暗くなり、時計の針も六時を回ろうとしていた。「そうですね。暴走前に発見をと思いましたが、やはり難しいですね。できることなら人気がなくなるまで探したかったです……」

「うーん、でもつきクンが倒れたら元も子もないし、ここは帰って休むべきだよ。私もお腹がすいてきたし」

アレスはお腹から大きな音を鳴らした。
たぶんそつちが本心だろうな。こんな時間じゃ無理もないだろう。自分の腹の虫も鳴りそうだ。

「あ……つと、そうだそうだ、危うく忘れるところだった」
商店街から出ようとしたところで、もう一つ用事があることを思い出した。

「帰る前にちょっと寄りたい所があるんだけどいいか？」

『別に構いませんけど』

「どうかしたの？」

二人は口をそろえて聞いたのだった。

「ああ、まあちよつとな・・・」

千草凧という少女

「で、何か買うものは決めてあるの？」

アレスはなんだかとても興味ありげに聞いた。

風邪で休んだ入江舞のために、見舞いでもしようかと考えている旨を二人に伝え、ある場所へやってきた。

「ベタに果物でも買っていこうと思う」

というか、それ以外の食い物で病人に良さそうなものが思いつかなかった。

『それで、なぜここなのですか？』

ルースはいぶかしげに聞いた。

彼女がそう言うのも無理はない。いま俺たちはケーキ屋の前にいるのだから。

商店街の片隅にこじんまりと経営している。さして有名というわけでもないが、地元では知る人ぞ知る隠れ名店である。

昔から誕生日とクリスマスはこのケーキを注文し食している。いわば常連だ。

「このケーキ屋はもう一つの顔があつてだな、まあ、見てれば分かるわ」

店のドアを開け、レジにいたおばちゃんにペコリとおじぎをする。

「どうも、お久しぶりです」

「あらまあ・・・えつと、どちらさん？」

つて、覚えてないのか。

俺が来るのは5年ぶりだから当然と言えば当然だが。

「俺ですよ、俺。高村月海、覚えてないっすか？」

と言うと、おばちゃんは少し考えるようにして

「まあ、高村さんのところの・・・そう、大きくなったわねえ」と、優しく微笑み、久しぶりの来訪を歓迎してくれた。

「一人で来るなんて珍しいねえ。それで、今日は何の用だい？」

「はい、実は舞が風邪をひいて寝込んだんで、それでお見舞いにか果物でもと思って。」

「舞？」

おばちゃんは誰だっけ、と首をかしげた。

「俺の幼馴染ですよ。たまに一緒に来てた……」

と、そこまで言っ言葉をとめた。

そういえば、あいつと一緒にここを訪れたことはあっただろうか？ まあいいだろう。幼馴染がいることは知っているはずだ。

「ああ、あの女の子のことかい？」

ああ、なるほど、

へえ。」

なにかに納得するように頷くおばちゃん。

「そういうことなら……これを持っていきなさい」

どこから取り出したバスケットに、これまたどこから取り出した大量の果物を詰め込み、ほら、と俺に渡した。

「いや、さすがに多すぎますよ。それにそんなにお金もってないです」

「遠慮しなくっていいよ。これはおばさんからの饞別さ」

あはは、と豪快に笑い飛ばし、肩をポンポンと叩かれた。

「いやあ、いつまでも子供と思ってたけど、やることやってんのねえ」

おばちゃんは何故か顔を赤らめながら言った。

「そ、そんなんじゃないっすよ」

「もう、恥ずかしがっちゃってえ。はあ、若いつていいわねえ」
そして羨ましそうに続けた。

「うちの主人なんか、年がら年中家の中でぼーっとしてるのよー。だんだんメタボになってくし、昔はかつこよかったんだけどねえ。

まあ、働いてくれるだけマシなんだけどね、それ以外がてんでダメ男なのよ。この間なんかねえ……」

おばちゃんはその後もご主人の不満を俺にぶつけ続けた。一体いつまで続くのだろうか。

『マスター、そろそろ出ないと遅くなりますよ』

20分ほど経っただろうか。そろそろおばちゃんの小言にうんざりしてきたところに、ルースが程よく声を掛けた。

「それでね高校2年の夏休みに一緒に遊園地に行ったのよ。そのときね……」

「おばさん、そろそろ帰らないと……」
と、おばちゃんの言葉をさえぎった。

「ん？ あら、ごめんなさいねえ。ついつい話が進んじゃって。愛しのガールフレンドが待つてるものねえ」
だれが愛しのガールフレンドだった？

「はいよ、これも持っていきな」

おばちゃんはショートケーキ二切れを箱に詰め、それも俺に渡した。

「そんな、悪いですよ」

「なに遠慮してるんだい。いつもひいきにしてもらってるお礼だよ」

「じゃあ、せめてお金だけでも」

「じゃないと俺が母さん怒られる。」

「いいよいいよ。さっき言ったでしょ、これは餞別だって。ちゃんと看病してあげて。その代わりじゃないけど、大人になったら二人の幸せな姿を見せて頂戴。あ、でも早すぎるのはダメよ」

いろんなところにつっこみたいけど、そんな気力は先ほどの小言で使い切った。

「じゃ、じゃあ出世払いということだ」

「ふふ、そうさせてもらうわ。ああ、数年後が楽しみねえー」
なんかもうこの人と関わりたくない。

しばらくはこのケーキ屋を訪れることはないだろう。

ケーキ屋を出てからしばらくの後

『ずいぶんと賑やかな方でしたね』

商店街を出たところでルースが話しを切り出した。

「賑やかというか、ものすごく絡みずらい」

一を言えば十が返ってくる。そんな人だ。

「でも、優しそうな人だったよ」

鞆の中に閉じ込めておいたアレスが、ひよっこりと顔を出した。

「それは否定できん」

母親がよく買い物に来るからひいきにしてもらってる、というのもあるかもしれないが、よくしてもらっているのは事実である。

『ところでマスター、もしかして最初からそれが目的であるところを訪れたのですか？』

なにか疑り深い声でルースが聞いた。

「違っつて。俺はそんなにがめつくない。あそこは元々果物も置いてある店なんだよ。」

『ケーキ店なのですか？』

「ケーキ店だからだよ。ケーキにも果物とかいっぱい使ってるだろ？　その余りを譲ってもらうんだよ」

「結局、譲ってもらうんだ」

「昔はそうしてたんだけど、それじゃ悪いからってことでお金を払うようにしたんだよ」

『なるほど、そういうことですか』

納得した、とルースは頷いた（ように聞こえた）。

「でも、そのケーキ美味しそうだなあ」

恨めしそうに抱えたケーキの箱を見つめ、よだれを垂らすアレス。『アレスは甘いものには目がありませんからね。しかし、その格好はあまりにもはしたない』

ルースは嘆くように吐いた。

『！？　・・・これは？　何が・・・』

が、次の瞬間、その声は嘆きから静かな愕きへと変わった。

『どうした？』

『いえ、今、わずかですがドディックジュエリの反応を感知した・

・様な気がします』

ルースは曖昧に答えた。

「それって結局は反応が出てない、ってことだよな？」

しかし、彼女は渋るようにした。

『どうでしょう、はつきりとは分かりません。私の勘違いであれば良いのですが……。もしも場合も考慮してもう一度探索したいのですが、よろしいですか？』

「ああ、少しでも可能性があるのなら探さないわけにはいかないからな」

舞には悪いが、今はこっちを優先すべきだ。ドディックジュエリは人の命に関わるものだ。何としても見つけ出さなければならぬ。『分かりました、では、参りましょう。反応があったのは、ここから北の方角です』

「分かった。早く終わらして、ちやつちやと帰ろう」
手にしたバスケットとケーキの箱を持ち直し、商店街の道を北へと進む。

商店街の出入り口である大きな門をくぐると、そこから先は一変して家屋がずらりと並んでいる。町の形態を変えつつある駅周辺で、変わっていないのは商店街とこの住宅地のみである。

自分の住む住宅街と比べどことなく高級感あふれるが、造りは同じような感じになっている。そのため、普段から来ることは無いこの地域は今でもさっぱりであるが、ある程度は把握できる。

『この先の十字路を右へ曲がってください』

ルースは確信を持った声で言った。

「わかった」

短く答え、やや早足で進む。

「ねえ、どうして分かるの？」

ドディックジュエリの反応は暴走していない限り見つけるのが苦労するのに、なぜルースはこつも確信を得た様子なのだろうか。加えて、彼女の感知した反応は感知したかどうか曖昧なものである。

と、アレスは疑問を口にした。

「それに、ルースは魔力反応に感づいて、私だけ気付かないなんておかしくない？」

「・・・どう答えるべきか迷いますが、魔力反応を感知した一瞬の後、ある場所に何か引つかかるものがあるのです。それが何かは分かりませんが、私自身でもはっきりしない確信がそこにある、そんな気がするのです」

「で、俺たちはその場所に向かっている、って訳か」

ルースは無言で頷いた（気がした）。

「あ、あと、アレスだけが気付かなかったのは、単純にアレスが気を散らしていたからだと思います。先ほどから目線がケーキに釘付けですから」

「え、あ、いや、これは・・・」

妙にうるたえるアレスであるが、ルースはさほど気にしていないようであった。

「いつものことですから咎めることはしません、少しは回りの気配には気を配って欲しいものです。特に今という状況はかなり特殊な状況ですからね」

「はい、猛省します」

アレスは鞆から出した頭をぺこりと下げた。

ただ、言いながらよだれを垂らすのはどうかと思う。

「なんか、全く緊張感無いな」

「私は常に緊張感を持っているつもりですよ」

と、無感情な声で言われても説得力に欠ける。

「あ、その突き当りを左に曲がってください」

「はいよ」

ルースの言う突き当りを左に折れると、目の前に一人の少女がいた。しかし、この距離ではかわすこともできず、

ドン！

と、勢いよくぶつかってしまった。

「うわっと」

「きゃ」

少女は短く声を上げると、ぶつかった反動でそのまま後ろに倒れ尻餅をついた。

「いったたた……」

持っていたケーキの箱と果物の詰まったバスケットは手元から滑り落ちる。ケーキの箱は何か無事であったが、バスケットの方は丸出しになっていた。果物が飛び跳ねるように散らばった。

「だ、大丈夫ですか？」

尻餅をついた少女に手を差し伸べる。

「は、はい、すみませんボーっとしていて……」

少女は手を握り「よっこいしょ」と、まるでおじいさんが立ち上がるようにヨロヨロと立ち上がった。

「あ」

そして二人の声が重なる。目の前にはツインテールの少女が目を見張らせていた。

「た、高村君かぁ、もう、びっくりさせないでよ」

ぶつかった少女の正体は千草であった。千草は俺の顔を見ると、少しだけホツとした様に胸をなでおろした。

「わりいわりい、ちよつと急いでたもんだから」

言いながら、落とされた果物を拾う。

「あ、私も手伝うよ」

と、千草は落ちた果物を拾おうと手を伸ばす。次の瞬間、ぱしっ
と二人の手が触れ合った。

「あ……ご、ごめん」

「い、いや、こっちこそ」

って、なんで一日に何回もこんなことしているんだ。

「はい、これで全部だよ」

「ああ、ありがとう」

千草が拾ったりんごを受け取りバスケットの中へ入れる。

「……んん？ んう……」

「な、なんだよ」

千草はケーキの箱とバスケットをまじまじと見つめると、妙な声を上げた。

「あ、なるほどなるほど、そういうことね」

そして、一人で納得するのであった。

「アレでしょ、ずばり風邪を引いた入江さんのお見舞いでしょ？」

いや、まあそんなんだが、そんな風に勝ち誇ったような顔されても、どう反応したらよいのやら。

「しかもその箱は、近所では噂の某ケーキ店のもの。やっぱり違うわねえ。幼馴染の効果は偉大なのか？ ……でも、それ多すぎない？」

果物が大量に入ったバスケットを指差し千草は言った。

「しょうがないだろ。店の人が譲ってくれる、って言うんだから」

「譲ってくれる？ ひよつとして、お店の人と仲が良いとか？」

「まあ、そんなところかな」

すると突然、千草は目を輝かせ始めた。

「ね、ねえ、もしかして、高村君が頼めば割引してくれたりする？」

「っていうか貰えないかな!？」

「できなくは無いと思うけど……」

さすがに金を払わずに貰うのは気が引けるのだが。

「ほ、ホント！」

さらに目の輝きを増して、ずいずいと迫ってくる。その反応に少しだけ後ずさりし、コクリと頷く。

女の子は甘い物の事になると豹変する、というのは本当らしい。

「ああああ、でも、おじいちゃんから甘い物禁止令が出てるしい〜

！これ以上食べたならお腹周りの脂肪がすごいことになりそうだし……でも、やっぱり食べたい。食べたい。ううん、ここで食べな

きや女の子じゃない！」

空を見上げたり、自らの手を見つめたりと、奇妙な動きを見せながら、なんだかよく分からないことを言い出した千草。

普通は逆なんじゃないか、女の子としては。

「千草の事情を知らないこちらとしては、どちらでも構わないんだが」

「よし、決めた。私、食べない！」

結局食べないのか。

「だって、バレたらおじいちゃんにどんな目に合わされるか……うう、考えただけでも恐ろしい」

何を想像したのか、千草は身を震わせあげた。

「千草のじいさんってそんなに怖いのか？」

と、聞くと、千草は怒りとも怯えともとれる表情で話した。

「怖いも何も、あれは人知を越えた生物よ。鬼でも悪魔でもない。

もつと恐ろしいもの。あの人に喧嘩売って勝てる人なんて、この世にはいないわよ……ってくらいおそろしいわ」

すごい言われようである。むしろ馬鹿にしているのではないかと思える。

「バレたら素振り千本追加は間違いないわね」

千草は素振りのフリをして見せた。まるで本物の竹刀を手に持っているようだ。さすが剣道部。

「なんていうか、大変だなお前の家も」

「大変の一言で済まさないで欲しいわよ」

はあ、と千草はため息をついた。

「物心つく前から剣術をやらされてるんだからね。しかも、あの拷問ともいえるような特訓を……」

そして、また一つため息を吐く。

実際に見たわけではないが、彼女のこの雰囲気から察するに、かなり厳しい特訓だったのだろう。

「まあ、自分の身を守る位にはなったから良いんだけど。ほら、

私、部活もやってるじゃない？ おかげで放課後は部活か稽古かのどっちかだし。っていうか、稽古は毎日あるんだけどね」

千草は苦笑し、手を上げた。

「自分の時間が無い、ってことか」

「そういうこと。みんなと一緒に好きなことできないのは、ちょっと辛いかな」

ほんの少しだけ、千草の顔に曇りが見えた。

自由が縛られている。そんな気分なのだろうか。

幼い頃から自身のやるべきことが決められている、選択肢の無い人生。

言い過ぎかもしれない。けれど、彼女にとってはそういう気持ちなのかもしれない。

「あ、あの！ べ、べつに剣術が嫌いってわけじゃないよ！」

慌てるように千草は訂正をした。

「俺は何も言っていないぞ」

「え！？ あ、うえ、えっと！ …… はあ、何言ってるんだか？ それを言いたいののはこっちなのだが。」

「言っとくけど、剣術が嫌いじゃないって言うのはホントだよ。うん、むしろ好き。じゃなきゃ、あんなに辛い特訓、とっの昔に投げ出してるよ」

千草は微笑を浮かべていた。何故だかそれを見てちょっと安心する。

「そっか、じゃあ、後悔とかしてないんだな？」

「後悔って、随分と重い言い方ね。」

大丈夫、何を心配してくれているのか分からないけど、今までやってきたことに悔いはないよ」

「そっか、良かった」

陰りのあつた顔が明るくなるのを確認すると、なぜだかこちらも心が晴れる気がした。

「……高村君って、もしかしてお節介やくタイプ？」

「いや、自分ではそんなつもり無いけど・・・なんで？」
不思議な質問をするもんだ、と心の中で思う。

「うっん、ちょっとそんな気がしただけ」

千草は大したことが無いように言った。そんな彼女の言動に首をかしげる。

自分では自覚の無いうちに、何かギャルゲーの主人公みたいなのとをしていたのだろうか？ それはちょっと寒い気がする。以後、自分の言動には気をつけるとしよう。

「そういえば、千草の家って何かやってるのか？」

「何かって、何？」

「ほら、昔から剣術やってる、って言ってただろ」

先ほど口にしていた千草の言葉が、少し気になったのだ。

「ああ、そのことか。言っただけだったわけ？ 私の家、剣の道場やってるの」

やってるの、なんて、そんな軽く言われても全然現実味が無い。

「初耳なんだが」

しかし、剣道部に所属していて尚且つエースと呼ばれている。なるほど、言われると頷ける。当然の結果ということか。

「ま、門下生なんていうのもいないし、知られてないのは当然よね」
それはつまり、道場を開いておきながら、誰一人教えていないということか。

「かなり昔からやっているみたいだけど、今まで誰も入門した人はいないって。えーっと、五百年くらい前に始めたとか言ってたなあ」

「う、五百年!？」

それこそ現実味の無い数字を言われて、驚きと疑いの感情が交じり合い、変な声が出てしまった。

今から五百年前というと戦国時代最初期である。確かにその時代ならば剣術とやらをやってもおかしくはないが、それが五百年も続くなんてことはあるのだろうか。

「ほ、ホントなのか？」

半信半疑に問いかける。

「うん。家にある書物に、永世五年なんたらかんたら、って書いてあったのを見たし、おじいちゃんも先祖代々伝えられている、って言うた。本当かどうか分からないけどね」

千草はそんなことを言っているが、書物が残っているのなら恐らく事実なのだろう。たとえ五百年が嘘でも、百年単位で続いているのであれば驚きである。

「そりゃすごいな」

「すごくないわよ。剣術なんて言ってるけど、型は滅茶苦茶だし、よっぽど剣道の方がちゃんとしてるわ」

「そうなのか？ でも、千草自身はかなりの腕前だし、それは剣術が通用しているって事じゃないのか」

「うーん、まあ、そういうことになるんだけど、なんかねえ」

千草はどこか納得のいかないように唸った。

「ほら、さつきも言ったけど、剣道って決まりごとが色々あるじゃない？ 家の剣術は決まりごとなんてほとんど無い自由なものなんだけど、その二つを比べるのはねえ。同じ土俵に立ってない感じがして、どっちが優れているかなんて分からないわ」

つまり、同じ剣を使ったものだけど、勝手が違うから比べられないということか。

「ま、そんなことを比べるために剣道をやってるわけじゃないけどね」

「どうでもいい、と千草は手を振った。」

「まあ、それはいいとして、すっかり話がそれちゃったけど、それ、いいの？」

そして、千草は持っていた二つの見舞い品を指差した。

「・・・あ・・・」

「私が言うのもなんだけど早くしたほうが・・・」

彼女が言い終わる前に、近くに建っていた時計を確認する。

時計の針はいつの間にかやらの数字を指していた。

「や、やべえ、もうこんな時間！」

本来ならドディックジュエリの有無を確認した後すぐさま帰るつもりだったのが、こんな時間まで長居してしまった。

「じゃ、じゃあな千草、また明日」

「え？ う、うん……」

言つと同時にその足は駆け出していた。

千草の少し戸惑った声を背に、両手にケーキと果物を抱え幼馴染のもとへと向かった。

「……行っちゃった。はあ、なんか忙しそうね。そ

れじゃ、私も帰るとしましようか……って、買い物途中だったんだ」

少年の影を目で追い、彼女は一人呟く。

「……ん？」

彼女は目を地面に落とした。何故か分からないけどそこに何かがある気がしたからだ。そしてそこにはあった。黒く漆黒に輝く石が。

「あれ、これって……？」

その声は遠く走る少年には届かなかった。

お見舞い

「結局、見つからなかったね」

走り出して少しすると、アレスは残念そうに言った。

『ええ、どうやら私の勘違いのようでしたね』

だが、ルースはどこか気がかりがあるような、そんな感じだった。
「なにか引つかかるのか？」

『はい』

ルースは短く答えた。

『先ほども言いましたが、魔力反応を感知したのは一瞬です。確かに「有る」と感じ取れたものが、突然「無い」となった。ドディックジュエリは例外中の例外ですから何が起きてもお不思議はありません。しかし「無い」と確信できるのに、そこに絶対に「有る」と感じ取れる』

「で、結局無かったわけだが」

『はい、ですが今もまだその感覚は拭えていません』

ルース曰く「有る」のに「無い」。実際に確認したところ「無い」ということがわかったのだが、ルースは未だに「有る」と感じている。

「どういうことなんだ？」

『どうということでしょうね？』

オウム返しですか……

『これ以上は詮索しても仕方ありませんね。事実、無かったのだから「無い」のでしょう』

とは言ったものの、ルースは納得していない様子だった。

「いいのか？」

『ええ、「無い」ものを捜すことほど無意味なことはありませんから』

「まあそうだけどさ……」

本当にこれで良いのだろうか。ルースの言うとおり「無い」ものは捜しようがない。しかし、彼女の感じる「有る」が本物だったら取り返しのつかないことになるかもしれない。だが、「無い」のだからどうしようもない。

「だあゝもう」

頭の中で延々といたちごっこをするのであった。

「はあはあ、はあ・・・や、やっと・・・着いた」

膝に手をつき乱れた息を整える。

時刻は七時十分。まさか商店街からここまで十分で来ることができるとは思わなかった。

「うつぶ、気持ち悪い」

走ったせいで鞆が揺れたのか、アレスは気持ちが悪そうにしていた。

「大丈夫か？」

『大丈夫でしょう』

代わりにルースが答えるが、どう見ても大丈夫ではない。

「ま、いつか」

「あう、良くないよお」

悲痛な声が聞こえてくるが、俺にはどうすることもできない。

「我慢してくれ、としか言えない」

「・・・うう・・・」

住宅街にある一軒屋。似通った家がある中でここも他に漏れず似たような外見だ。

白い煉瓦の塀が家の周りを囲み、真ん中に獅子を象った門扉があ

る。門扉をくぐるとすぐ目の前に玄関があり、左右には芝の庭が広がっていた。庭の端には小さな花壇が訪問客を出迎えた。

箱とバスケットを持ち直し、インターホンを押した。

「……」

しかし、返事は無かった。

「留守……なわけないか」

もう一度インターホンを押す。

「はい、入江です」

と、押す直前に、インターホン越しに舞の声がした。

正体は舞、では無く舞の母親だ。声があまりにもそっくりで、電話や今回のような顔が見えない場合は、舞との区別が全く付かない。だが、話し方があまりにも違うので判別は可能だ。

「あ、えっと、高村です」

急な返事におかしな声を出してしまった。

「あら、つきちゃん？」

「は、はい、お久しぶりです、おばさん」

この人も相変わらずその名で呼ぶのか。

「あの、舞……さん、の、お見舞い……に来たんですけど」

久しぶりなせいか、妙な緊張がある。おかげで言葉が変に詰まる。

「あら、舞の？ わざわざありがとう。今、鍵開けるわね」

と、玄関に明かりが灯り、鍵の開く音がした。

「いらっしやい、どうぞ上がってちょうだい」

おばさんは上半身を半分だけ出した形で手招きをした。

「どうも」

軽く会釈をし、家の中へと入った。

久しぶりの訪問だが、中はあまり変わっていなかった。少しだけ懐かしい感じがする。

「舞は部屋で寝てるわよ。それにしても久しぶりねえ。少し見ない間にかっこよくなっちゃって。舞が惚れるのも納得ね」

「んな！ な、なに言ってるんですか！？」

「あら、事実を言っただけよ」

「うふふ、と笑みを浮かべるも、その笑みにどこか悪戯なものがある気がする。」

「ほらほら、そんな顔しないで、早く舞のところへ行つてあげて話し方は違つても、根本的なところは親子そろつて同じよつだ。」

おばさんに背を押され、舞の部屋のある二階へと向かった。

階段を上がつた先にある二つの部屋。手前が舞の部屋で、奥は物置になっている。

小さいころに二人でこの部屋の中を探検した覚えがある。中には大量のダンボールが山積みされており、中身を探るためにダンボールを破いておばさんに怒られたのを今でも鮮明に記憶している。

さて、部屋の前まで来たはいいが、なかなかドアノブを回せずにいる。

緊張しているのだろう。自分でも分かる。

心臓の鼓動は早くなっているし、手も小刻みに震えている。毎日のように通っていたこの部屋に入ることを、今になってためらっている。

「はあ、何やってんだか」

お見舞いなんて慣れないことをしようとするからこうなるんだ。

いつものようにすればいい。そう自分に言い聞かせ、ドアを思い切り開けた。

「よ、よう！ 見舞いに来てやったぜ」

だん、と勢い良くドアを開けると、そこには昔と変わらない舞の部屋があった。

ベッドにテーブル、勉強机。未だに配置は変わっていないかった。窓のカーテンは淡い水色をしており、これもあの時のままだ。

一つ変わったところは、ベッドの上にあるぬいぐるみが増えたことだろう。以前はネコの大きなぬいぐるみ一つだけだったが、その隣に新しく犬が増えていた。

そして、その横には一糸まとわぬ舞の姿が……

「……っえ？」

「!!!!」

やばい！ やばい!!! やばい!!!!

なんだこの状況は！ どうしてこうなった！

いや、待て。落ち着け、冷静に考えるんだ。理由なんかはどうでもいい。今重要なことは目の前に舞が素っ裸でいるということだ。まだ諦めるには早い。捕まらなければどうという事はない。そう、捕まらなければどうという事はない。

「し、失礼しました……」

今ならまだ間に合う。素早くここから脱出することができれば、まだ助かる！

「ねえ、つきちゃん」

うん、間に合わないね。

「ッ！ は、はい？……」

重く押し掛かる威圧感。

悪寒が走る。

「アタシ、最近プロレスにはまってるんだ」

「へ、へ、そうなんだ。は、初みm……ぐべしっ！」

舞の細い腕が首にすっぽりと入り込み、ぐいと締め付ける。

「うんっ、だからっ、ちょっと、実験台にっ！」

そして更に、その細い腕からは考えられない力でぐいぐいと巻き

ついてくる。

「がふっ！」

ちよ、おま、首が！

「げぶ！」

ぎ、ギブ、ギブ！ 無理っす、もう無理っす……！

とある猛者は言った。全てを受け入れる。さすればその先の未知なる快樂が得られると。

「……あれ？」

「どうしたの、つきちゃん？」

「え、いや……」

ふと何かがつっぱりと抜けた。何かはわからない。目の前のベッドには舞が寝ていて、俺はその横にいる。ただそれだけだ。

なんだろう、なにか悪夢のようなものを見た気がするのだが。

たぶん気のせいだろう。そうだ、と身体が言っている。

「うーん、なんだったんだ？」

しかし、思い出そうとすると身体が拒否をする。

「つきちゃん、思い出したくないものは無理に思い出さないほうがいいよ」

「それもそうだな」

身体が拒否をするくらいだ、よほどのことだろう。思い出さないほうが身のためである。

「ところで、つきちゃんは何をしにきたの？」

「っと、そうだった。ほら、見舞いに来てやったぞ」

と言って、果物の入ったバスケットを舞に見せた。

「わああ、ありがとう、つきちゃん！」

「いや、大したことしていないよ。それだって親の金で買ってきたものだし、俺はなにもしないよ」

「ううん、アタシはね、つきちゃんがこうして来てくれた事が嬉しいの」

舞は笑顔で答えた。

そんな真顔で言われるともものすごく恥ずかしいのだが。

「ん〜、でもさっきご飯食べちゃったしな〜」

「そうか、ちよつとタイミングが悪かったな」

仕方ない、果物は冷蔵庫で冷やしておいてもらおう。

「ねえ、そつちの箱は何が入ってるの？」

舞は興味心身にケーキの入った箱を指差した。

「ああ、こつちはほら、ケーキが……」

しかし、そこにあつたものはケーキと呼ぶには難しい、見るも無残な姿があつた。

「……ケーキ？」

思い返すと、こいつには色々あつた気がする。原型を留めていないのも頷ける。

「えつと、ケーキ……だつたもの……？」

「……うん、見なかつたことにしてくれ」

これは家に持ち帰って処分をしよう。

「あ、待って」

だが、舞はケーキの箱を持って帰ろうとする俺を止めた。

「それ、勿体無いから食べよ？」

「いや、でも……こんなに崩れてるし、食べられないだろ」

「ううん、こつちやつてフォークですくえば……ほら」

ほら、つてどこからそのフォークは取り出したのだ。

「うん、美味しいよ」

舞はフォークでケーキをすくい、パクリと一口食べた。

「そ、そうか？」

「ほら、つきちゃんも……はい、あーん」

おもむろにケーキを差し出す舞。

「いやいや、自分で食べられるから」

「えー、つまんなーい!」

と言われても、そんなこと恥ずかしくてできるわけがない。

「むー、そんなこと言うと一人で全部食べちゃうよ」

「もともとお前に買ってきた物だからな、別にいいぞ」

「……つきちゃん、それは夢がないよ」

舞は深くため息をついた。

「幼馴染という関係にこの特殊な状況。利用しないと損だよ」

何を言っているのだこの人は、と言いたくなるような言葉だが、悲しいかな俺には分かってしまう。

「そりゃ確かにそういうシチュエーションにはロマンがあるけど、何でもかんでも二次元のものを現実リアルに持つてきてはいけないんだ。

二次元で起こる現象は二次元であるからこそ輝く。現実リアルにそんなものを求めてはいけない、いや、あつてはいけないだ!!!」

「そ、そうなんだ……。ん、それでもさあ、アタシはこうやって一緒に食べたいなあ。つきちゃんがアタシの部屋に来てくれたのも久しぶりだし、やっぱり楽しくいかないかね」

「ま、それには俺も同意だが、それとこれとは話が別だ。それに、例えそれをやるとしても立場が逆だろ。今はお前が病人なんだからさ」

「つきちゃん……」

「当然、やらんがな」

舞の持つていたもう一つのフォークでケーキをすくい、一口放り込んだ。

「む、つきちゃんの意地悪!」

と言うと舞はケーキの箱ごと取り上げてしまった。

「ふふん、これはアタシのものだからねえ、つきちゃんにはあげないよ」

「はいはい」

心配して来てみたが、どうやら風邪はすっかり治っているようだ。舞のいつもの笑顔を見ることができたし、もう問題ないのだろう。

「ん、どうしたのつきちゃん、アタシの顔に何か付いてる?」

「ああ、ケーキのクリームが付いてる」

「ウソっ！ え〜どこお、つきちゃん取ってえ〜」

お前は子供か！ というツッコミは今日は無しにしておこう。少しくらいこいつのわがままに付き合つのも悪くない。

「ほら、右のほっぺに付いてるぞ」

舞の右頬に付いていたクリームをティッシュで拭い取ってやった。

「え？ あ、ありが・・・とお・・・」

何故か声が尻すぼみになっていく舞。

「どういたしまして」

「・・・あ・・・う・・・」

「どうした？」

「な！・・・なんでも・・・ない・・・」

心なしか顔が赤くなっているような気がする。治ったと言っても病み上がりだ、しばらくは安静にするべきだろう。

「そんじゃあ、そろそろ帰るとするか」

「ふえ！？ あ、うん・・・ごめんね、わざわざ来てもらって」

「気にすんなって、それにこういうときは「ありがとう」って言うんだぜ」

「う、うん、ありがとう、つきちゃん」

舞は笑顔で頷いた。それは俺が見た今日一番の笑顔だった。

「じゃあな、ゆっくり休めよ」

「うん、バイバイ、つきちゃん」

ベッドの中から手を振る舞に対して手を振り返えし、部屋を後にした。

太陽のお姫様

「今日はありがとうね、またいつでも来てちょうだい。舞も喜ぶから」

「はい、お邪魔しました」

一つお辞儀をし、玄関を出る。外はすっかり暗くなっていたが、月明かりが眩しいほどに輝いていた。

「随分、遅くなっちゃったな」

「くふ、くふふふ」

すると突然、アレスは鞆の中から顔を出し変な笑い声をあげた。

「初めてあの子に会ったとき、まさかとは思ってたけど予想以上に幼馴染してるんだね」

「なんだよ、幼馴染してるって。」

「自分では恋愛話は期待するなって言ってたけど、やっぱり恋愛してるじゃんかあ」

「アレスを恋愛と呼ぶるかどうかはともかくとして、世間一般的な幼馴染の関係は築けているのではないかと思う」

「じゃあ、やっぱりそれは立派な恋愛だと思うよ」

「ん、そうか？」

自分の知る限りでは、あの程度では恋愛と呼べない気がする。

俺たちは幼馴染と言う特殊な関係なのだ。世間で知られている恋愛が俺たちの関係に告示していたとしても、それは所詮幼馴染なのである。

「恋愛とは人それぞれです。マスターたちの関係をただの幼馴染と捉えるか、はたまた恋愛関係にあると捉えるか、それは本人次第です」

ルースの言葉に同意するように俺は頷いた。

「但し、幼馴染から恋愛感情に発展する場合も多々ありますから、アレスの言うような関係にお二人がならない、とは言い切れません」

ね

今度はアレスが強く頷いた。

『どちらにしろ、私にとつてはどうでもいいことですけどね』

ルースは言うだけ言って黙ってしまった。

結局どつちでも良い、ということだ。恋愛つてのは、それくらい曖昧なものなのだろう。

「いいなあ、私も恋したいなあ〜」

「アレスには好きな人とかいないのか？」

「好きな人？・・・うん・・・」

アレスはしばらく考えて

「今はいいかな」

と、小さな声で呟いた。

「もし、好きな人ができたら、つきクンみたいに色んなことがしたいなあ」

「例えば？」

「一緒にお喋りして、ご飯食べて、買い物に行つて・・・とにかく一緒にいたいな」

「ふ〜ん、そんなんでいいのか？」

あまりにも普通すぎたので思わず聞き返していた。

「なんかこう、もっとやりたいこととかないのか？」

「・・・私は好きな人と一緒に居れたらそれだけでいいかなあ、つて」

アレスは空を見上げ星を仰いだ。

考えてもみれば彼女は一国のお姫様なのだ。自由な恋愛というものではないのかもしれない。

王族の婚約とか恋愛とか、そんなものは全くわからない。しかし、それがとても複雑で限られたものだと言易に想像がつく。

アレスが恋愛に興味を持っているのはそれが理由なのだろうか。

初めて出会ったときも執拗に聞いてきたし、普段の会話も恋愛がらみが多い気がする。年頃の女の子ならこんなものだと思うていたが、

やはりそうだった事情があったのかもしれない。

「じゃあ、あれだ。この機会に恋してみる、ってのはどうだ？」

「この機会に……?」

アレスは首をかしげ、聞き返した。

「そう。いま、地球こくにいるのはアレス一人だけなんだろう？ だったら、ややこしいお家の話とかは抜きにして、自分の好きなようにやってみたらどうだ。向こうでどんな生活を送っていたかは知らないけど、少なくともここにいる間は自由なんだ。誰からの制約も受けない。今だけでも自分の好きなように生きてみるのも悪くないんじゃないか？」

「いい……のかな？」

「ああ、全然オツケーだぜ。もちろん恋だけじゃなくて、色んなところで遊んで、飯食って、友達と喋って、目一杯遊ぶんだ。俺の友達紹介するからさ、もちろん舞も。変なやつばっかだけど、みんないやつだぜ」

「……でも、私にはやらなきゃいけないことがあるから」

「そのやらなきゃいけないことってのは、今は俺がやってるんだ。自分の思うように、自分のやりたいように、ちよつとの間だけでもそういう経験してみないか」

「……」

だが、アレスは俯いたまま答えなかった。

「まあ、別に今のままでいいならそれでもいいけどさ。無理にする必要もないし。ただ、いわゆる普通の生活ってのを経験して欲しいかなあ、って思っただけだからな。ま、結局はアレスがどうしたいか、だよな」

「私が……どうしたいか……」

アレスがどうしたいのか、それは聞かなくてもわかる。それでも彼女がそうしない理由は、やはり自分の立場という問題だろう。自分が一国の姫であるということ。それが自分の気持ちを抑えてしまっただろう。

「別に今じゃなくてもいいからさ、考えておいてくれよ。しばらくは地球（ちきゅう）にいるんだろ？　ここにいてる間しか出来ない事、やってみようぜ」

「……………ん……………」

返事をしたのかどうかわからない小さな声でアレスは答え、鞆の中へと潜り込んでしまった。

『ありがとうございます』

「何だよ、突然」

アレスが鞆に引つ込むと、彼女に聞こえないようにルースが言った。

『あれであの子は素直な子ですから。文句こそ言えど、アレスは国の一番上に立つ者としての責務を全うしていました。自分の立場を理解して、理解しすぎて、普通の女の子として過ごすことを自ら止めていました』

「やっぱそうだったのか。俺にはそういうの何もわかんねえからさ、ちよっと出すぎた真似かもって思ったんだが」

『いえ、あの子にとってはこれくらい言った方が良いでしょう。』

あの子は自ら気持ちを押さえ込んでいますから。ですから、今のマスターの言葉があの子の心を動かしてくれるきっかけになればと……

……

そんな大それたことをやったつもりではないのだけれど、結果的にそうなるのであればそれは良いことである。

「そうだな、そうなるといいな。……………にしても、普通に過ごすことを止めていた、か。なんか、全然想像つかないな」

『そうですね、普段の振る舞いを見ればそんなこと思いもしないでしょうね』

「それもそうだけど、そのお姫様としての生き方ってのがよくわからん。普通の暮らしとそんなにも違うものなのか？」

テレビやマンガに出てくるような、例えば乗馬や狐狩りなど、漠然とした絵面を思い浮かべ俺は聞いた。

「特に変わったところはありません。ただ、アレスは貴族としての生き方を全うしているだけです。普通の暮らしというものが衣食住のことを指すならば、マスターの言う普通の暮らしと何の変わりもないのでしよう。ですが……」

「それ以外は無いですか？」

「……」

しばらく黙ったかと思うと、ルースは急に切り返した。

「無かったわけではありません。マスターの想像する貴族の暮らしがどんなものかはわかりませんが、少なくともそれに近いものはあったと思います。しかし、あの子はそれを何一つしませんでした」。つまり、俺で言うところのゲームやアニメといった娯楽を一切しなかったということである。そんなこと俺には想像もできない。

「アレスはいつも一人でした。自分の立場を理解し、そうあると自分の欲を抑えています。ですから、あの子はいつも一人でいました。何も考えないように」と

「……」

言葉を失っていた。アレスの生き方に。アレスは自分であることよりも、一国の姫であることを優先した。故に常に一人でした。そこに自分の感情が滲み出ないように。

「そんなの、間違ってるよ……」

「ええ、そうですね」

こぼれた言葉にルースが短く答えた。

「普通」なら間違っています。ですが、あの子は「普通」ではなかった。一人の人間としてではなく、一国の姫として生を受けた。そして、あの子の生き方はそれに相応しかった。誰もが国を背負うに相応しい人物だと思ったでしょう。しかし、あの子の本当の気持ちを知る人は極僅かでした。ですから、できれば友達としてあの子と付き合っしてほしいのです」

「ああ、言われなくてもそのつもりだよ。ってか、お前も含めてすでに友達みたいな感覚で話してたんだけどな」

出会ってすぐはその珍妙な姿に戸惑ったけれど、そんなアレスの姿にもすぐに慣れてしまった。人はどんな環境でも慣れてしまえるもので、人間の順応性の高さに自分の事ながら驚きを隠せない。

「友達ってそんな改まってなるようなモンじゃないしな」

「そうですね・・・そうでした」

ルースはまるで忘れていたものを思い出すように言った。

「しばらくそういったことを考えていなかったもので、疎くなっていました」

「いや、考えるものではないと思う」

「・・・そうでしたね。確かに、もつと曖昧なものだったと記憶しています」

ものすごく機械的な言葉だった。そんな言葉に思わず笑いがこぼれる。

「どうしたのですか？」

「いやいや、やっぱりルースって機械なんだな、とと思って」

話している分には普通の人と変わらないのに、どこかで見せる機械的、客観的な口調がやはりそうなのだと思うせるのである。

「・・・当然です。私は・・・機械なのですから」

ルースは確認するように言った。それは自分に言い聞かせているようでもあった。

「マスター、あの子のことよろしくお願いします」

「ん、ああ。お願いされるよ。さっきも言ったけど、もう友達みたいなもんなんだし、それに・・・」

「それに？」

「俺もお前たちともっと仲良くなりたいたいと思ってる」

ただ単純に、周りにいる友達のように、この二人とも普通の友達になりたい。

「・・・その言葉とても嬉しく思います」

と言った彼女の言葉には、ほのかに笑みが含まれている気がした。

「やはり、千草凧の言っていたことは正しいのではありませんか？」

「な、なんだよそれ。千草の言っていたこと？」

ルースの言う千草の言葉が何かはわからないが、彼女の口調からして明らかに良いことではなさそうだ。

「まあ、何でもいいけどさ……。とりあえず、もう一度言ってみるよ。せつかくこんな遠い星に来たんだから、友達くらい作っておかないとな」

ただ、やはり気になってしまう。普通の女の子として生きてこなかった彼女が、素直に頷いてくれるのだろうか、と。

「・・・・・・・・」

静かに星を見上げ続ける彼女はどこか儚げで、ルースの話したお姫様^{レス}を見るようだった。普段は見せない彼女の顔に、俺は言葉を掛けることが出来なかった。

千草凧という少女 2

何かがおかしい。

いつものように学校に登校し、いつものように席に着いた。そして、いつものようにホームルームまでの時間を適当に過ごした・・・はずだったが、いつの間にやら妙な感覚に身体が襲われていた。何かおかしいのかわからない。だが、明らかに違和感ある。今日、初めて教室に入ったときは感じなかった違和感を、今はひしひしと感じている。

この感覚はいつたいなんだろうか。

まさか、この教室内にアレがあるのだろうか。となるとかなりまずい状況である。ルースもアレスもこの違和感には気付いていないようだ。

「！！！」

バシッ！

「いてっ！」

まるでハリセンか何かで叩かれたように、頭が良い音を立てた。

「こら、高村。聞いているのか？」

「あ・・・」

叩かれた頭を押さえ上を見ると、そこには出席簿を片手にポンポンと手で叩く、鋭いまなざしの先生がいた。

「まったく、いるなら返事をしろ」

「す、すいません、ちよつと考え事を」

「ほう、珍しいな、高村が考え事か。考えるということとはとても大事なことだ。だが、今はそのときではない、わかるな？」

言われたことは至極当然のことだが、なぜこんなにも威圧感があ

るのだろう。最近、先生からのあたりが厳しい気がするのだが気のせいだろうか。

「う．．．了解です」

「わかれば宜しい。はい、じゃあ次。千草風さん．．．」
踵を返し教卓へと戻っていく先生。しかし、彼女の返事は無かった。

「．．．え!？」

先生が声を上げる。それどころか、クラス中が驚きの声でどよめいていた。俺もそのなかの一人である。

なるほど、先ほどから感じている違和感はこれが原因か。

「千草が．．．休み．．．だと．．．!？」

先生の驚きようは半端ではなかった。

少し昔の話をしよう。

彼女は普通の学園生活を送り、部活動にも所属し普通の女子中学生として日々を過ごしていた。

ある日の出来事。

たしかマラソン大会の翌日だったか。その日はとても寒かった。今年一番の寒さ、とニュースでやっていたのを覚えている。マラソン大会の翌日ということもあり、欠席者も多かった。

彼女はいつものように登校し、自分の席に着いた。しかし、どう見ても様子がおかしい。

マスクをつけ、防寒着を身にまといながらも、顔を真っ赤にし、ふらふらと足がおぼつかなかったからだ。

「お、おい大丈夫か？」

自分の席でぐったりとつぶれている千草に声をかけた。

「．．．．．」

千草は重たそうに顔をあげ、じー、とこちらを見つめる。が、それだけでまったく反応が無い。

そして．．．．．

バタン！

「……………！」

そのまま前へ倒れ、机へと顔を打ちつけピクリとも動かなくなつた。

「ち、千草！」

その後、千草は病院に運ばれ治療を受けたのだが、

「わたし、このまま、じゃ……………皆勤賞が無くなる！」

と、医者ですつ飛ばして学校に戻ろうとしたらしい。

もちろん駆けつけた親や看護師に止められた。

あとで聞いた話によると、千草はインフルエンザにかかっていたらしい。恐らく前日のマラソン大会で感染^{うつ}つたのでは、と本人は話した。

さらに彼女はこうも言った。

「インフルエンザって事は公欠だよな？ よしっ、これでまだ皆勤賞を狙える！」

これにはクラス中の皆が呆れ返っていた。

つまり何が言いたいかというと、彼女が学校を休むなんて事はあり得ない！ ということだ。彼女ならたとえ何が起ころうと学校に来るだろう。それでも学校に来ていないということは、よっぽどの「何か」が彼女の身に起きたということである。

「ん〜、欠席の連絡もきてないか。千草にかぎってサボりは無いと思うが……………」

先生は出席簿にチェックをいれた。

「あとで連絡するか……………では次、堤……………」

放課後

結局、千草が学校に来ることはなかった。

先生の話によると、千草はいつもどおりの時間に家を出た、と親御さんに確認が取れたらしい。とすると、単なるサボりか、なにか事件に巻き込まれたか。

千草の性格からして前者は考えにくい。ということは、本当に千草の身に何か起こったのか。

『気になりますか？』

ホームルームの後、ボーっと考えている俺にルースが話しかけてきた。

「ん？ まあな」

その問いかけに空返事で返す。

『おや、その様子ではさほど気にした風ではありませんね？』

「千草のことは気になるけど、ただ学校を休んだっただけだからな。深く考えるのもどうかと思う」

「しまい忘れていた教科書を鞆に入れながら言った。

『そうですか。では、ひとつ忠告です』

「忠告？」

聞きかえすと、彼女は声色を変えずに続けた。

『ドティックジュエリの影響は、いつ、どこで、どのような影響を及ぼすか、それは未だにわかっていません。先日のように、ただ単に暴走しわたしたちを襲ってくることもありますし、嵐や津波などの天災も引き起こします。また何かモノに寄生、憑依し、意思を持つこともあります。モノとは、たとえば動物や植物、はたまたその辺に転がっている空き缶。全てのモノに寄生、憑依します。意図はわかりませんが、いずれにせよ、わたしたちにとっては脅威以外の何物でもありません』

「お、おい！ もしかして千草がその寄生とか憑依ってやつの対象になっただってことか？」

その返答にルースは「いいえ」と答えたが、それはあまり自信の

ない答えだった。

『……ですが、可能性はあります』

「……!!」

そして、彼女は答えた。

『あくまでも可能性の話です。今まで人間に寄生、憑依したということは一度もありませんし、そもそも、そんなことは有り得ない話です。パーセンテージで表すなら1パーセントにも満たない数字です』

だとしても、千草が絶対に寄生されていないとは言い切れない。

『大丈夫ですよ。今のところドティックジュエリの反応は出ていません。仮に彼女が寄生されたのだとしたら、すでに反応が出ているはずです。しかし、今はそれが感じられないということは、現時点ではドティックジュエリは暴走すらしていないということです』

「本当に、大丈夫なのか？」

『ええ、大丈夫です』

ゆっくりと静かに彼女は返事をした。

『ですが油断しないことです。最初に言ったとおり、ドティックジュエリは不明瞭な点多すぎます。どのような事態が起こるか見当もつきません。あなたの言う「守りたいもの」がそれに犯されぬよう、常に警戒してください』

ルースは最後に、警告とも取れる言葉で締めた。

外から吹きつける風が、教室の窓の隙間を流れヒューッと音を鳴らした。

ふと周りを見ると教室の中には俺を含め数人しかいなかった。俺

たちが話をしている間に皆帰ったのだらう。

『私たちもそろそろ行きましょか』

静かな教室に自分にしか聞こえない彼女の声が響いた。

行く、というのは勿論、駅前のことだらう。昨日から始まった駅前探索だが、早くも嫌気が差すほどのダルさが身体を襲っていた。

しかし、そんなことを言っている場合ではない。何が起るかわからないあの石を放っておくわけにはいかない。どんなに辛くてもやらなきゃいけない。今それを出来るのは俺一人だけなのだから。

「ああ、そうだな。それに、干草のことも気になるし……」

『おや、気にしていないのではなかったのですか？』

それに対してルースは、しれっとした言葉で返した。

「そりやお前にあんだけ脅されりや気にもなるさ」

『別に脅したつもりはないのですけどね。私はただ単に事実を言うただけですから』

先ほどとは打って変わって、今度はいつもの真面目な声で言った。『ともかく、早く移動することをお勧めします。また、何か嫌な予感がするので……』

「それって、昨日の「有るのに無い」ってやつか？」

『ええ。正確にはそれに近いような何か。もしくは全く同じで違う何か』

彼女は昨日と同じく、辻褃の合わない言葉を発した。

『……こんなことは私も初めてです。ドディックジュエリがどのような影響を及ぼすものか分からない、と言っても、私はずっとアレを見てきた身。ましてや先の戦いでその能力を一部とは言え見たのです。それなのに私は何も理解できていなかった。』

齒がゆいですね。何か起きてからでは遅い。私たちは到底対応できないことが起きるかもしれない。そんなことは絶対に避けるべき。分かっているのに、それをするとはかなわない。だとしても、私たちのやることは変わりません。慎重に、そして、最善の注意を払っていきましょう』

何度目の忠告だろうか、彼女からその言葉を聞くのは。出会って間もないにもかかわらず忠告の言葉は脳内にこびり付くほどに聞かされた。

そして、それは当然理解している。しかし、理解しているだけではどうにもならない。

闇雲に探しても見つかるわけも無く、見当をつけたところで反応すらしらないものを見つけるのは無理な話である。

『しかし、それでも、私たちはやらなければいけない。それが私のやるべきことですから』

「だな、俺たちがやらなきゃ誰がやるんだって話だ」

そう、出来る出来ないじゃない、やらなきゃいけない。他の誰でもない自分自身にしか出来ないことなのだから。

「……ごめんね、つきクン。私がこんなことになってなければ、つきクンを巻き込まずに済んだのに」

鞆から僅かに覗かせた顔は、ものすごく申し訳なさそうな顔だった。

「そんな顔すんなって。巻き込まれちゃったもんは仕方がないだろ。お前に悪気があるわけじゃないんだ。だから、アレスが気にすることはないさ」

「でも」

「でももへちまもないぜ。こんなヘンなことに巻き込まれてウゼエ、なんてことも思ってたなし、嫌々やらされてるわけでもない。俺はただ純粹にお前たちを助けたい、そう思うからこうしているんだ。自分からやるって言うてるんだ。アレスが気にする必要もないし、謝る必要もないよ」

「うん……わかった。つきクンがそういうなら、気にしない」
納得できていない、と言った感じだったが、それでもなんとか分かってくれたらしい。

「よし、それじゃ駅前探索に行くとしますか」

新技登場？

朝日駅へと向かう途中にかかる巨大な橋。海へと続く川が緩やかに流れ、そよふく風がほのかな潮の香りを運び、鼻を刺激する。

「お、「ロンドンコンジェニート回転す紅蓮の炎」ってどうだ？」

「……なんですか、それ」

ルースは冷ややかな声で聞き返した。

「何って、この間使った魔法の名前だよ」

「いえ、そうではなくて、名前に付いているその可笑しな振り仮名は何なのですか？ と聞いているのです」

「やっぱ必殺技には格好良い名前が必要だろ？」

必殺技を叫びながら敵を倒す。これ王道。

「うん、すごくカッコイイと思うよ、私は」

鞆から顔を出し川の流れを眺めていたアレスが振り向くと、その目を何故か輝かせていた。

「名前を考えるのは特に問題ありませんが……」

ルースは言うど、はあ、と溜息をついた。

「魔法発動時に技名を叫ぶのは如何なものかと思えます」

「なんでさ、名前を叫ばないと魔法って使えないだろ？」

「そんなことはありません。確かに魔法発動に詠唱が必要なものは存在しますが、発動と同時に技名を叫ぶことなど滅多にありません」

それは初耳なのだが、と心の中で呟くと、まるで聞こえているかのようにルースは話した。

「でしょうね、言っていないせんから。ですが、発動の条件に技名を叫ぶものはいくつか存在します。しかし、そのほとんどが最上位魔法で禁呪と呼ばれています。普通は扱うことは出来ません。禁呪とというのはその名のとおり使用を禁止されている魔法のことです」

「やっぱ、強すぎるとかそういう理由で使えないのか？」

「そうですね。各属性の最上位魔法は、そのほとんどが大地を変化

させるほどの威力を持っていますから』

「そりやすごいな」

そんな魔法を俺でも使うことは出来るのだろうか。もし出来るとしたら、ドディックジュエリが暴走してもすぐに止めることができそうだな。

『それは難しいでしょうね。私の知る限りで現存する最上位魔法行使可能者は四人です。その四人全員は原初の血を引く者、つまりソル、ルーナ、ステイーレの血を引くものです。こればかりは才能や努力ではなく血筋ですから、どうにもなりませんね』

「そっか、そりや残念だ。もし使えたらだいぶ楽になりそうなのに……って、もしかしてアレスも使えたりするのか？」

ソルの血を引くものであるアレスならば、その最上位魔法とやらを使えるのではないだろうか。

聞くと川を眺めていたアレスが振り向き答えた。

「ん、私？ 私は最上位魔法は使えないよ。お母さんは使えるけど」「なんだ、そうなのか」

「その代わり……じゃないけど、ソルの家に代々伝わる魔法はちゃんと使えるよ」

アレスが言うつと続けてルースが話した。

『その魔法も禁呪の一つで、それこそ大地が破壊されるほどの威力を誇っています』

「へー、凄いな」

『ええ、ですから先人はこれらを禁呪としたのです。二度と過ちを繰り返さないようにと。もう、遙か昔の出来事ですが、その爪跡は今でも残っているのです』

漠然と話を聞いていたが、その最上位魔法というものは禁呪と呼ばれるほどのものであるのだ。ルースの言う過ちというものがどれ程悲惨なものだったのか、容易に想像ができる。

『そう、だからこそ禁呪として定め、そして、戒めとして代々受け継いできたのです』

「そういうのって、使わないようにするのが普通じゃないのか？」
聞くとルースはいつもの声で答えた。

『突出した強い力、それは人を、国を支配する。ひいては世界そのものを。一つの国だけが禁呪を使えるところなるか、結果は目に見えて分かります。つまり、それぞれの国が禁呪を受け継ぐことによつて、一つの国が独裁する世界を作らないようにしているわけです。この地球ほしも似たような境遇があるのではないのですか？』

言われて納得する。この地球せかいも同じだった。

ある国が誰も逆らえないような武器を造りだした。他の国はこれに対抗すべく更に強力な武器を造りだした。そして、いつしか世界中にはそれ一つで世界を破壊こわしてしまう武器で溢れてしまった。

『悲しい話ですが、世界はそうやって均衡を保っているのです。恐らく、どのような星でも同じことが起きているでしょう』

どの星でも同じことが起きている。とてもだが信じられない、と言いたいが、事実なのだろう。他の星のヒトたちがこの地球ほしに住むヒトたちと変わらないのなら、有り得ない話ではない。それはアレスタチを見ても分かる。彼女たちは俺たちと何も変わらない。姿形は違うけれど同じヒトだ。

「同じヒトである以上、生き方は変わらない………ってことか」

『ここで世界のあり方を嘆いていても仕方ありません。それに、今の私たちには優先すべきことがあります』

「そうだな、そのために俺たちは今ここにいるんだからな」

橋を渡りきり、眼前に並ぶビル群を見上げる。

「とは言っても、やることは地味だし意味があるのかどうかもわからないからなあ」

『まだそんなことを言っているのですか？』

「やらないとは言っていないんだ、別に愚痴るくらいはいいだろ？
タダなんだし」

人間、愚痴らないとやっていけないのである。

「つきクン、分かるよその気持ち、私も立場上いろいろあるから」
『で、その愚痴はすべて私に回ってくると言うわけです。毎日毎日、愚痴を聞かされる身にもなってほしいものですよ』
気の許せる相手が少なければそうなるのは当然というわけか。

「いいじゃん、減るもんじゃないし」

『その言葉は用法が間違っています。それに、私のメモリーの残存量が減ります』

「なにさあ、そんな有るか無いかわからない位の容量で変わるわけ・・・」

口を尖らせたアレスだったが、そこまで言っただけで急に黙ってしまった。

彼女を見ると、目を瞑り何か意識を集中させているようだった。

『アレスも気が付きましたか』

「うん、ほんのちよつとだけど、魔力が揺れてた」

ルースの言葉に声だけで返事をすると、アレスはふっと目を開けた。

二人は何か気付いている風だったが、俺にはさっぱりだ。

「もしかして、ドレックジュエリの反応があったのか？」

『確証はありません。ですが、尋常では有り得ない魔力の動き方でした』

「方角は北西、商店街のある方だね」

アレスは北西の方角、ビル群に埋もれた商店街の方向を向いた。

「いつ暴走が起きるかわからないし、急いだほうが良いな」

自らの足は、言い終わる前に街中へと向かっていた。

輝く金、揺れる闇

「はあはあ……つ、何も起きてない？」

走って乱れた息を整えながら辺りを見渡した。しかし、商店街には普段と変わらない風景があった。

「おかしいなあ、確かにこの辺りからモヤモヤって感じがしたんだけど」

アレスが首を捻っていると

『ここに反応があつたのは確かですね。ですが、どうやら移動してしまつたようです』

と、ルースは商店街の奥、住宅街に何かあると言つた。

「あつちの方が。昨日も何かあるとか無いとか言つてたけど、それと関係あるのか？」

『いえ、それとはまた違つた感じですよ。どちらかと言えば、先日戦つたあの犬の物の怪に近いですよ』

ということは何かに憑依した可能性が高いと言つたことか。

頭にルースの言葉がよぎつた。ドディックジュエリは何にでも寄生、憑依する。それは人間も例外ではない。可能性はほんのごく僅か、全くのゼロに近いとルースは言つたが、それでも、この不安を拭うことはできなかつた。

「ッ！ また、何か……変な感じ」

商店街の奥を目指し走っていると、アレスはまた何かに気付いた風に言つた。

「これって、結界……かな？」

アレスはもう一度目を瞑り集中すると、自信なさげに言つた。それに答えるようにルースは話した。

『ええ、これは恐らく結界でしょう。ですが、普通とは違う物のようですね』

結界の基本構造は、外部からの干渉をほぼ不可能にすること。例

えば外部からの視認、認識を不可にしたり接触や侵入を防ぐ。高度なものになると空間を丸ごと入れ替え、存在そのものを外部とは別なものに変える。それにより結界内部で起こった出来事は外部とは一切干渉を持たなくなる。

『ですが、この結界は不完全なものようです。結界内部と外部の境目があやふやになっています』

「その、不完全な状態だと、何か問題があるのか？」

走り続ける足を更に早めて、ルースに聞いた。

『結界内部の出来事が、外部との関係を強く持つてしまう。つまり、完全に隔離された空間ではなくなってしまうということですよ』

「それって、中で起きる出来事が外にも影響するってことだよな？」

その問いにルースは短く「ええ」と返事をした。

「くそつ、早くしないと不味いよな」

吐くようにして言葉を出す。

商店街を抜け住宅街に入るが、依然として明確な場所は分からない。

『ここが、結界の淵のようですね。これならば、魔法を使わずに中には入れるでしょう』

住宅街に入つてすぐ、何の変哲も無いただの道端。ルース曰く、ここが結界の入り口だそうだ。

『十分に注意して下さい。前のように突然襲われれないとは言い切れません』

「ああ、わかった」

彼女を見ずに返事をし、結界の中へと入つていった。

ズンと重く何か掛かる感覚。この間と同じだった。全身が重く、そう、まるで血液が正しく流れていないような、そんな感じ。

「つ」

目に見えるもの全てを、感じるもの全てを、全神経を集中させて一歩一歩進んでいく。彼女が犠牲になつていないことを祈りながら。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・また・・・・・・・・」

長く続く道の中ほどだった。アレスは三度、何かに気付いた。

『あの角の右です。慎重に行きたいところですが、また移動されるとも限りません』

「ああ」

ルースの言葉に身構えて、慎重にかつ素早く移動した。真っ直ぐ進んだ道の突き当りを右へと曲がる。

すると

「うわっと」

曲がり角を曲がると同時に、見知らぬ誰かの肩に激突してしまった。相手はバランスを崩しそのままドスンと尻餅をつく。

曲がる時に向こうからもこちらに曲がってくるのが見えたのだが、僅かに反応が遅れてしまった。

「す、すみません。大丈夫ですか？」

尻餅をついた相手に手を差し出す。

「……！！」

そこまでして、ようやく相手が自分知人であることに気が付いた。

「千草……だよな？」

最後に疑問符をつけたのは、彼女が彼女に見えなかったから。自分でも何を言っているのかさっぱりだが、目の前にいる女性が千草凧には見えなかったのだ。

「おい、大丈夫か？」

地面に座り込んだ千草に手を伸ばし、身体を引き上げた。だが、彼女は力なくふらふらとして、今にもまた倒れそうだった。

『結界の境目があやふやなせいで、彼女も知らずの内に中に入ってしまったのでしょうか。魔力の耐性が少ないのか、この結界の魔力に耐えられないようです』

「じゃあ、早くここから出してやらないと」

千草の身体を背負い外に出ようとしたが、ルースの言葉にそれは止められた。

『一度外に出たとしても、近くにいる以上この曖昧な境界線では、

危険である事に変わりはありません。ドディックジュエリを見つめるまでは、一緒に居たほうが安全でしょう。』

ルースの言う通りだった。何がおきるかわからないこの状況で、千草を一人にする方が危ない。一緒に居れば俺が守ることができる。「そ、そうだな、わかった。よし、千草、離れるなよ」

千草の身体を降ろし、彼女の手を握った。

「千草………?」

だが、千草は握った手を振り払うようにした。

「あ………た、かむら……君」

そして、弱々しい声で名前を呼んだ。

「だ、め………わたし………から、離れて」

彼女の顔に気は無く、だらりと腕が垂れ下がり、よろめくように離れていった。

「『………!』」

瞬間、千草の身体から黒い煙のようなものが湧き上がってきた。それが何を示しているのか即座に理解できた。だが、身体は言うことを聞かない。全てを否定している。

『マスター!』

ルースの声が脳に響く。スイッチが入ったように脳が回転を始める。身体は、口は、自然に動いた。

「ルース・ド・ソル

トランスフォーメジオン」

言葉と同時に光りが身体を包む。と同時に千草の体も漆黒に輝いた。

がうんと鈍い金属音が響く。

光と闇が晴れた瞬間、刃と刃が交わった。千草は手にした黒刀を一気に振り下ろした。ズンと空気が押される。短く持った炎槍でそれを受ける。

「………つく!」

あまりの斬撃の重さにひざが落ちる。
さすがというべきか。とても少女とは思えない力が刃にのしかか
る。

「くっそ……」

交差させた刃をギリギリとバネのように反動をつけ弾き、そのま
まの勢いで後ろに跳び距離をとる。ざっと地面をすべり槍を構えな
おす。

「千草！ おい、千草！！」

虚空に向けて彼女の名前を叫ぶ。

『無駄です！ 今の彼女は、すでに千草風ではない』

そんなことはわかつている。目の前にいる彼女が、すでに彼女で
無いことを。それでも俺は、この刃を彼女に向けることはできない。
彼女の姿をしたそれは、ダンと地面をけり、一気に間合いを詰め
た。

横殴りの刃が襲う。辛うじて受けきった刃を流し、次の斬撃を後
ろに跳び避けた。

『ここは結界の中です、彼女は彼女ではない。本物の彼女はまた別
にいる！』

ルースは叫ぶように言った。

「本当か！？」

『本当です。過去に憑依された生物も、結界が解ければ元に戻って
います』

「確証は？」

だが、その問いに、ルースは答えなかった。

わかっていた。コレに確証なんて無いことを。それでもやらなき
やいけない。それができるのは、今はただ一人なのだから。

下げていた矛先を目の前に上げる。

「わかった、お前を信じる」

何をどうしたら最善なのか、そんなの俺にはわからない。

正しいとか、間違いとか、そんなのわからない。

でも、ただ一つできることがある。

それは、彼女を信じること。

「だから、力を貸してくれ」

『無論です』

その力は、目の前の人を守るため。

そのための力。そのための刃。

「だったら、やることは一つ。いくぞ

っ！」

炎槍が激しく燃える。

少女は刃を構え突進する。

「だあああああ！」

大きく円を描いた炎槍は、景色を揺らし少女を狙う。

少女の刃は半月の軌跡となって襲う。

二つの刃はぶつかり合い、火花を散らした。

刃は弾かれ、次の一撃を繰り出した。

二撃、三撃と刃が交わり、金属音をかき鳴らす。

だが

「……ぐっ」

少女の一撃は重く、速い。

徐々に矛先が下がる。

少女の刃は確実に炎槍を流し、確実に急所を狙っていた。

防戦一方。いつしか、攻撃の手は止み、少女の刃を防ぐことしか

出来なかった。

「はっ、はっ、はっ……っ！」

身体が酸素を欲している。手に入る力は抜け、足は立っているのもやっとだ。全身は痺れる様に感覚が麻痺してきている。

少女の攻撃は尚も苛烈に、そして、黒刀は着実に獲物を捕らえようとしていた。剣撃が止まることはない。辛うじて防いでいるが、まるで踊らされているようだ。

そして

「がっ……っ！」

今までのどの一撃よりも重い一撃。それを、受けることも流すことも出来ず、槍は弾かれ身体は大きく体勢を崩した。瞬間、影が迫る。無防備な胴を一直線に。

死

脳裏によぎる、一つの文字。はっきりと感じた。百分の一秒後に起きる事実。そう、それは確定事項。

光が翳る。

闇が踊る。

炎が綻ぶ。

黒が全てを覆った。

そう、思った。いや、事実起きた。だが、それは覆された。

刹那

視界一杯に黄金こがねが拡がった。さらりと流れる

黄金色の河。それは絹のように滑らかで、まるでそのものが輝いているよう。

河が風に揺れる。隙間から除かせるは、美しく整った女性の顔。

硝子の様な美しい瞳は眼前の闇を睨んでいた。

目の前で起きた光景。それを理解することは出来なかった。それでも、一つだけ心に浮かんだもの。ただ、そう「美しい」と。

ギンと耳を突く音が鳴ったかと思うと、闇は大きく後退した。

「・・・・・・・・」

闇は金髪の少女を見つめ刃を構えなおした。

同じように見つめていた金髪の少女の右手には、日本刀のように

綺麗な曲線を描いた曲剣が握られていた。柄には護拳がついていて見た目はサーベルのよう。

「闇に囚われても尚、剣を握る。あなたの心は真に剣士なのでしよう」

まるで、空を流れるような澄んだ声で金髪の少女は話した。

「できれば、本当のあなたと刃を交えてみたかったです」

静かに剣を構えると、じりじりと闇に詰め寄った。

すでに、少女の原型を留めていない闇は、手のような何かで刃を構え、同じく金髪の少女に詰め寄る。

二人は同じように進み、そして、ある場所でピタリと止まった。

二人はにらみ合う。闇は刃を頭上に構え、金髪の少女も構えと言えり様な構えではなかったが、一つの姿勢は崩さなかった。

流れる無言。もとより、二人に言葉は無かったが、この沈黙ほどの沈黙より静かだった。

二人の間には見えない何かがあるように、そこから全く動かないこれが間合い、と言うやつなのだろうか。二人は、いや、闇は一切前に進もうとはしない。金髪の少女は、出方を伺っていると言うよりは、先に打って来い、と言わんばかりの態度だ。

それに答えるように、闇は勢い良く踏み込み刃を振り下ろした。

唸る轟音。

刃は空気を押しつぶすように金髪の少女を捕らえた。だが、それを難なく受け流すと、少女は音も無く懐に入り込み一太刀を浴びせた。 ように見えた。

斬られたと思った闇は、少女の剣を刃で受け止めていた。

「お見事です。あの体勢でよく持ちなおしました」

何が起きているのか分からない。今の一連の出来事があまりにも速すぎて、目が追いつかない。

一つ分かることは、あの闇はさっきの戦いよりも明らかに強くなっている。さっきの戦いでは本気を出していなかった、ということか。そして、金髪の少女はその闇を遥かに凌駕している。

少女は右足を下げると、腰を落とし腕を斬りにいった。だが、それも闇は受けきった。

少女の猛攻。放たれる連撃。その細腕からは想像もできない速さで、一撃を繰り返す。

しかし、闇はそれを紙一重でかわし、流し、受ける。押さえているはずなのに、何一つ危なげない。

「っふ！」

少女の口から息が漏れる。放った一撃は、今までのどれよりも速く、そして、重かった。

闇は刃で防ぐと青白い光が飛び散り、身体ごと後ろへ飛ばされた。空中で体勢を立て直し、地面を滑るように着地した。

「　　？　その構えは……」

闇は着地と同時に深く腰を落とし、刃をまるで鞘にしまう様に構えた。

「いいでしょう。ならば、私もそれに答えるところでしょう」

少女は剣を横に構え、距離を詰めた。

二人の距離は僅か数メートル。足を踏み出し剣を振るえば、相手に剣先が届く。

再び沈黙。二人は動かない。いや、少しずつだが動いている。互いが踏み込む、その瞬間を狙って。

瞬刻

二人は同時に地面を踏み込んだ。

風を斬る。音も無く。

振り切った二つの刃。

静まり返る空間。

「ありがとうございます。とても楽しいひと時でした。できれば本物のあなたとも手合わせ願いたいものです」

金髪の少女は静かに言うと、それを聞き取ったかのようにして、漆黒に飲まれた少女の身体はふつと消え去った。

一体なにが起こったのか。理解ができない。ただ、金髪の少女が勝者だという事実だけが、目の前の光景の意味するものだった。

「……………」

少女は表情一つ変えず、右手に持った剣をはらりと払い、鞘に収めた。

「こりや意外だったね。まさかソルのお姫様に男装癖があったなんて」

少し皮肉ったような声。声を発したのは少女ではなく鞘に収められた剣だった。

「あなたに聞きたいことがあります」

今度は少女の声。少女は振り向きもせず、その横顔だけを見せた。眉一つ動かさない、とはこういうことを言うのだろうか。少女は眉一つどころか、瞬きも、息さえもしていないのでは、と思えるほど微動だにしなかった。

「今あなたはその石を二つ所持している。間違いありませんか？」

硝子の瞳がわずかだけ動きこちらを見る。

「あ、ああ」

質問の意味は考えなかった。いや、考えられなかった。呆気にとられて。否、そう、俺は、彼女に見惚れていた。

「そうですね、ありがとうございます。では、またどこかで……………」

「

短く言葉を切った少女は、静かに立ち去った。

初めての・・・？

「そ、そうだ、千草は！？」

しばらく、ボーっとしていると、ふと現実に戻されるように思い出した。

「大丈夫、そこにいるよ」

アレスに言われて、近くの塀にもたれかかっている千草を見つけた。

「はあ、なんとか大丈夫みたいだな」

脈もあるし、息もしている。どうやら気絶しているだけのようだ。いつの間にか結界も解け、あの重苦しい感覚は無くなっていた。

日は傾き、夕焼けがビル群に反射し眩しい。

「あの子は一体、何者だったんだろう」

ほんの数分前の出来事。黄金こがねに輝く美しい少女。あの金髪の少女が頭から離れなれず、目にしっかりと焼きついていた。

『彼女たちについては、後ほどお話します。ですが、今は千草風の回復を優先しましょう』

ルースは金髪の少女、そして、もう一つの声の主を知っているようだった。しかし、彼女の言うとおり、千草を回復させてやるほうが先だ。

「でも、回復ってどうやってすりゃいいんだ？」

ゲームのように回復魔法が使えるわけでもなし、そもそも、外傷が無いのにどこをどう回復させるのかわからない。

『そうですね、一番手っ取り早いのは』

「手っ取り早いのは？」

『接吻です』

「せつ！ つぶ！？」

何をおっしゃってるんでやがりますか、この人は！？

いや、さて、落ち着いて考えるんだ。ルースは冗談を言うような

奴じゃないことくらい分かっている。そう、コレにも意味はあるはずだ。

「えっと、それにはどんな効果が？」

『自分の魔力を相手に流し込むことができます。彼女の衰弱の原因は、極端な魔力の消耗です。生命力と同等である魔力を消費すれば衰弱するのは道理。ですから、マスターの魔力を彼女に与えることによって、その生命力を回復するわけです』

「な、なるほど、そういうことなら仕方が無いよな」

そう、仕方が無い。コレは仕方の無いことなのだ。彼女を助けるにはコレしかないのだ。

何度も自分に言い聞かせ、そつと彼女を抱き寄せた。

「うっ……」

ドクンと心臓が跳ね上がる。その鼓動は急激に早くなる。

顔が、耳が、燃えるように熱い。たぶん、かなり真つ赤になっっている筈だ。

こんなにも近くで彼女の顔を見るのは初めてだ。いや、彼女だからというのではなく、女の子をこうして抱きかかえ、更には顔を近づけキスまでしようとしているのだ。緊張しないわけが無い。

「……」

千草は静かに眼を閉じているが、呼吸は少し乱れ、額からは汗が流れていた。それを見ると、緊張している自分が馬鹿らしくなる。

こんなにも彼女は苦しんでいるんだ。何を躊躇う必要がある。

「い、いくぞ」

誰に発した言葉なのか、本人もわからない。

徐々に千草の顔が近付いてくる。

彼女の口から漏れる息が顔に掛かる。

「っ」

彼女の唇はとても柔らかさそうで、その、なんていうか、ごめんなさい。

『他にも丹田に流し込むという方法がありますが』

「早く言えっ！」

臍の下三寸に指を当てる。……臍の下三寸ってどこ？

『大体で構いません。指を当てたら指先に魔力を送ってください』
「と言われても、どうしたらいいのかわからん」

横に寝かした千草の臍下に指を当てたまま、どうしたら良いのかわからず硬直する。傍から見れば実におかしな光景だろう。

いや、眠っている女の子の服を捲り、臍に手を当てている光景は誰が見ても犯罪の匂いしかない。早いトコ済まさなければ、警察のお世話になってしまう。

『先日のマスターがやったような、魔力の弾を作るような感覚です。意識を指先に集中させて、そこに小さな魔力の塊を造ってみてください』

言われるがままにやってみるが、果たしてうまくいくのだろうか。
「指先に意識を集中。小さな魔力の塊を作る」

千草の肌に触れている部分に全神経を集中させ、そこに魔力の塊を作る。

「！」
瞬間、指先から何かが抜き取られるような感覚があった。

思わず指を離してしまっただが、大丈夫なのだろうか。

「……………」
だが、その心配は不要だったようで、千草の顔色はみるみる良くなっただけ、呼吸も元に戻ったようだ。

「ひとまず安心だな」

しかし、このまま道路で寝かせたまま、というわけにはいかない。かと言って、彼女の家まで運ぶことも出来ない。なにせ彼女の家の場所を知らないのだ。知らないものはどうしようもない。

「さて、どうしてものか　ん？」

千草の腕がすっと少し動き、胸元へと移動していった。

「起きた、わけじゃないか」

彼女の目は閉じているし、すうと寝息も立てている。

「……ん……う……」

だが、どこか苦しそうな雰囲気である。さっきのとは違う、寝苦しそうな感じだ。

「あ………っ……」

「………?」

よく見ると、また額から汗が滲み出ていた。それどころか体中に汗をかいているようだ。シャツがべっとりと体にくっついて、肌がうっすらと見えている。

「……あ、つい……」

と、胸元にあった手で、おもむろにシャツのボタンを外し始めた。「わっ、ちよ、まった!」

僅かに開いた胸元をなるべく見ないようにして彼女の手をつかんだ。

「ふう、危ない危ない」

危つく本人の意思とは無関係に、彼女の裸を見てしまうところだった。

「……う……あつい……」

と言われても、どうしようもない。

「あつい……アツイ、あつい、暑い……」

千草はうなされる様に、何度も同じ言葉を呟いている。

「だー! 暑い! 暑すぎる!」

「のわっ」

ついには俺の腕を跳ね除け、勢い良く立ち上がった。

「って、あれ?」

起き上がった千草は、周りをきよろきよろと見渡した後、自分の手を見て呟いた。

「元、戻ってる?」

千草は不思議そうな顔をして自分の身体を確かめていた。

「よう、おはようさん」

「あ、高村君。えっと、私、どうなったの？」

「どうなったの？」と、聞かれても答えるすべが無い。ありのままを伝えても意味不明だろうし、そもそも、信じられないだろう。

「ねえ、私、高村君に何かした？」

「な、何かって？」

聞かれてまごつくが、彼女自身はさっきの出来事を覚えていないようだ。

「具体的には言えないけど、さっき高村君とぶつかった時、なんかすごく嫌な感じだったの」

「嫌な感じ？」

聞き返すと、千草は答えた。

「そう、自分じゃない誰かの殺気みたいなもの。確かにそれは自分の中にあつて、でも、それは私じゃない誰かの感情。それも、普通じゃないほどの」

言つと、千草は恐ろしいものを見たように顔を強張らせた。

「あんなにはつきりとした殺意は初めてだった。それが高村君に向けられていて、すごく怖かった」

「そうか、だからあの時「逃げて」って言ったのか」

それは、千草が闇に囚われる直前のことだった。立っているのもやっとな彼女が発した言葉。その感情はドディックジュエリによるものなのか。そもそも、石に感情があるのか。やはり分からないことが多いすぎる。

「その後のことが全然覚えてなくて、もしかしたら、高村君を傷つけたんじゃないかって」

「いや、千草の思ってるようなことは無かったぜ」

ものすごく危なかったのは確かだが、幸い、というか、辛くも無傷だった。

「そっか、よかった」

それを聞くと、千草はホッと胸をなでおろした。

「誰の感情かもわからないもので、友達を傷つけるなんて絶対にし
たくなかったから」

「そうだな、千草の腕前なら、俺なんかひとたまりも無かっただろ
うな」

事実、ひとたまりも無くなりそうだった。

「な！　なによ、私だってか弱い乙女なんだから、男の子には負け
るわよ」

いや、か弱い乙女とは到底思えない強さだった。とは、口が裂け
ても言えない。

「まあでも、お前が無事でホントに良かったよ」

「今更そんなこと言ってもダメですよー。」

あ、でも、

私の身体に触ってたことは許してあげよっかな」

「ぶおっふ！」

なんで気を失っていた千草がそんなことを知っているんだ。あれ
は事故のようなもので、決して疚しい気持ちがあつたわけではなく、
いや、男である以上無かつたわけではないが、っつかそんなことは
関係ないわけで。

「んっふふふ、じゃあそういうことで、またね」

「な、あ、おい」

千草はいたずらな笑みを浮かべ、去っていった。

「あいつ、気付いてたのか？」

『いえ、魔力の消耗で気を失っていたのは確かです』

「だよな」

自分自身で確かめたのだから、当然である。

「まあ、そこは気にすることでもないか」

『ええ、今は家に帰って身体を休めてください』

ルースの言うとおり、早く家に帰って休みたい。魔力をたくさん
使ったのか、それともただの運動不足か、今日も前のようにくたく
たである。

それにあの少女のことも気になる。黄金色の流れる髪と人形のよ

うに整った顔が、今でも脳裏に焼きついている。彼女は一体何者なのか、ルースとアレスなら何か知っているだろう。向こうもこっちのことを知っているみたいだったし、何か関係があるのかもしれない。

「んぐ、すげえ身体がだるい」

ともかく、帰って寝たい。その一言に尽きる。

「ふう」

どれくらい走っただろうか。振り返っても少年はもう見えない。お腹を軽くさすった。臍の下、いわゆる丹田というところが熱くなっている。簡単に説明すると、丹田とは元気の出る源である。呼吸法とか色々あるが、詳しくは知らない。ただ、ここに力を入れると「すごい」というのは知っている。

あの時なにか起きたのか、それはわからないが、恐らくは彼が助けてくれたのだろう、ということはある。

それよりも、だ。記憶を失っていた間の出来事。いったい何があったのか。身体が妙に軋む。変な動き方でもしたのか、普段は全く使わないところが痛む。彼は何も無かったというが、果たして事実なのだろうか。自分の中に存在した自分とは違う誰かの感情。明確な殺意。これが頭の中から離れない限り、彼の話は信じることは出来ない。

「でも、高村君は無事だったわけだし、本当に何も無かったのならそれでいいんだけど」

もう一度、熱くなったお腹を触った。こんなにも熱くなるものなのか。先ほどから体中が焼けるように熱い。それに、いつもよりなんだか身体が軽い気がする。

彼に秘められた謎のパワーが私を強くする。

「……いや、無いな」

それとも、この身体の熱はこのことだけが原因じゃないのか？

今の私にはわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0594p/>

魔法少女代行つきみ ~ 交差する太陽と月 ~

2011年12月1日17時55分発行